

はじめに

自分史第二集「翔べ ひとりごと」を作ったのは平成二十三年四月でした。今年は去年より元氣になったと他人から言われ、自分でもそんな気がする。

あれからも日記を書き、テレビ、新聞などから入り込んで来るいろいろな事を、そのままパソコンに入力していたら、また一五〇ページになってしまった。

俺は間もなく九十歳になる。今は百歳時代になったから俺も人並みに生きられないにしても、もう少しはあまり程度を落とさないで、行けるだろうと思っている。

此の頃少し視力が衰えて来て、パソコンを入力するのが難儀になってきた。一ページ書くのに何日も掛かることがある。だから今までのようには書けないだろう。

今度の一冊は「此処に生きて」とすることにした。それは俺が此処に生まれて約九十年、何処へも行かず暮らし、僅か一年四ヶ月間、軍隊に召されて中国の戦地に行き、そして、細内から此処、大渡りまで二キロくらい移動して、米作りを酪農に変え、此の土とともに生きて来

たことから由来する。

だから此の土の上から見ること、感じることをもう少し書いてみたいと思っている。今までと代わり映えないものとなるだろうが宜しくお願いします。

二〇一五

二度目の本作り

三月二日、清水苑でリハビリの窪田先生が、私がボチリポチリと書き綴った独り言を立派な本に作ってくれた。もつとも以前になんとかしてくれないかと頼んだからだ。

とても嬉しく、有難いと思った。中身は貧しくても、外は立派な宝物として作ってくれたことに感謝した。

二〇〇九年四月 自分史「俺らの一生」を北上プリン트에頼んで本にして貰った。

あれから二年になった。また今度も本屋に頼むことも出来ない。でも何人かの人に読んで貰いたいところもあって窪田先生や桑島さんをお願いしてしまい、大変心配をかけて、人様にあげられる本に作って貰った。

前は日記ではなかったが、五十年以前から覚え印みたいなものをたどって自分史を作った。今度は、自分史で書き足らなかつたことや、日々の暮らして思いついたことなど、気ままな独り言を気の向いた時に書いたもので、自分史余録「翔べ ひとりごと」という題にして纏めて

みた。

宝物と書いてしまったが、このところ何もしないでゴロゴロしていることが多く、そんな合間の中に書き綴ったものが本になったということが、瓦礫の中から宝石が出てきたように思えたのです。私は働けるうちは暇なく働いてきた。そして何らかの価値を得て、飯を食べているからには何かしなければいけないと言う答えにしていたように思う。

そんな暮らしに潜って、今体力の限界でもなかるうが腰が痛くて働けなくなつた。セツコキと妥協してしまつたところもあるが、とにかく働けない。寝て起きて食べてまた寝ると言う繰り返しは、人生の終わり間近であれば仕方ないとしても、まだそれには間があり過ぎると思われる。見て感ずること、思いつくことなどを記しておくことは、生産的ではないが、何もしないで居るよりは救われる気がする。

面白いことは書けないが、後で読んでみると、自分では自分の足跡がよく見える気がする。なくさないでおけば何年か経って、二〇一〇年ころ、こんなことを思いながら過ごした年寄りが居たのかと思つて見る人もいる

3
でしょう。

世の中の動きについては単純な私の感じを記したが、何の知恵も持たない者でも、みんなが幸せなるためになんとかならないか、との思いで書いたがうまく書けなかった。

現役を終わって予備役になり、それも終わろうとしている者が書いたひとりごと、もしか誰かに読んで貰えれば嬉しい限りです。

菅原ミツさんからは可愛い子供の絵を活用させて貰い有難うございました。

清水苑のみなさんのご協力を頂いて本が出来ました。心からお礼を申し上げます



中東 アフリカが変わる

二〇一一年二月一六日、エジプトのムバラク大統領は民衆の蜂起を抑えようとしたが僅か三週間で倒された。

アラブやアフリカは石油やその他鉱物資源が豊富で国王や大統領が近親等の少数の者で権力を握り、膨大な富を独り占めし、多くの国民は貧しいままに放置された。三十年以上選挙もなく、あつても政権を変えない仕組みで、民衆の不満は積もり、ついに各地で民衆デモが起こった。国民の平等、民主化を求める声が全国に広がり、武力で抑えようとするが、抑えきれない民衆の運動が広がりを見せている。

また隣国のリビアでも独裁者カダフィに対して全国で民衆のデモが起こり、カダフィは武力制圧で多くの国民の犠牲者を出し、世界中の批判を浴びた。間もなく民衆の勝利に終わるであろう。

まだ中近東やアフリカには今後このような波が起こり、政権が変わり、平等と平和が訪れると思うが、さまざまな利権が絡むことで長くこたごたが続くことだし

よう。

宗教や民族の争いも多い国々だが、何処の国でも人々の命を大事に、みんなが平和を作り上げるために力を合わせて、平和な暮らしをつくってほしいと願ってやまない。

中近東やアフリカが、長く独裁者に統治され、民族紛争などで政情不安が続く中で油資源が不当に値上がりし、国際経済が大きく揺さぶられている。ガソリンやその他の生活資材が値上がりし、庶民の生活が脅かされ、俺たち日本人にも負いかぶさって苦しくなってきた。

紛争で多くの人が死んだり、世界中が経済不安になつたりすることは、国際協力によつてその根源を質し、世界のみんが安心してくらせるようにして貰いたい。

一つである地球の中の出来事は一つの国に起こつても世界中の生活者に重く押し掛かってくる時代だ。独占者も反省し、世界の人類が平等に平和に暮らせるよう勤めて貰うよう念願して止みません。

千年に一度の巨大地震

二〇一一年三月一日、午後二時四六分大地震が起こった。

清水苑で体操が終わり、テーブルをつないで卓上ミニホッケーのゲームで歓声を上げて夢中で遊んでいる途中、激しい横揺れの強い地震が五分くらい続いた。すぐに余震が何回も続き、テーブルにしがみついて、介護士さんの指示でじつとその場に居た。頑丈な大きな施設にたくさんの仲間と一緒に俺は不安はなかったが、家に一人居るばあさんがどんなに不安で困っているだろうと思った。

三時半、帰りの車に乗り、四時過ぎ家へ帰った。家はどこも壊れていなかった。ばあさんに聞いたら文生が来てストーブを出してくれたし、ラジオも出して情報も聞けるようになっていた。早恵子も来てくれて今帰って行ったところだと聞いてほっとした。

電気はどこも一斉に消えていつ点くかわからない。ガスは使えるのでお湯を沸かして湯たんぽを三つ作り、こ

たつに入れた。腰までこたつに入りラジオを聴きながら情報を得た。なんと大変な地震だこと。東北から関東までひとなめしの震源地だという大被害で、次々に大きな余震が続いた。気象庁も宮城県沖が震源で、マグニチュード⁴8.4と言ったが間もなく⁸8.8に修正。その後⁹9.0に修正した。マグニチュード⁹9.0というのは、今までに世界で4回くらいあったが、千年に一回の大地震だということだ。私たちは千年に一度の大災害に遭遇したということだ。タマゲタってなんて、こんなことは初めてだ。

今度の地震はこの辺では強くて長く揺れたが、物が倒れたり、棚から飛び出したりしなくて大地震の割には被害というものはなかった。道路も壊れず、町内や北上あたりまでは交通は支障がないようだった。

電話は何処にも繋がらず、ラジオで各地の被害を聞いて大船渡や仙台のことを案じて連絡をとることが出来ず、なんともやり切れぬ思いで時を過ごした。

文生も早恵子も早く帰ってきた。古い電灯を点して、家族4人コタツに足を入れ、あるものを食べてそのままこたつに寝た。文生が車から電気を引いてパソコンで画像を見た。沿岸の被害状況は少しみて目をそむけるよう

なものだった。そんな情報を見ながら、うつらうつら眠ったり寒くもあつたし、そんなふうにして朝を迎えた。

明るくなっても電気はこない、電話も出来ない。ラジオで情報を聞けば太平洋沿岸の町はみな悲惨な状態で、陸前高田市はほとんど全滅という程津波に持つて行かれてしまったと報道された。

大船渡に居る嫁の睦子や孫の健二、さらに善美が可愛がつている孫たちの行方など、限りなく案じられるがなんともしない。

加えてガソリンが買えなくなり、車が使えず何処へも行けない。災害の前から物不足で災害に入つてあらゆるものがなくなつてしまった。なにしろ日本列島の約半分が災害になつてしまったから、風評被害も加わつてあらゆる生活物資が一遍になくなつてしまった。災害とはこんなにも世の中を変えるものかとあらためて感じた。

長生きしてもこんなに驚き、怖いと思つたことはなかった。これからこの災害が復興するまでどれだけの歳月や難儀をしなければならぬか、復興に当たる人たちの苦勞が思いやられる。

国難 原発事故

人間が起こし国難で最も恐ろしいのが戦争だが、自然災害で恐ろしいのは大型地震だ。今回は千年に一度の大地震に加えて、福島原子力発電所の事故だ。放射能が飛び散つて、水や野菜や牛乳などが食されなくなるということ、発電所の半径三十キロ以内の住民が退去しなければならぬこと。空気汚染なども心配されるという。命的大事件となつた。

原子力発電所というものは事故が起これば放射能の飛散を防ぐのが大変であるため、これを作ることは住民の大反対があつたものだが、国や資本家達は、電力を安く作ることが出来るということで、国民の反対を押し切つた。

日本全国に数十ヶ所あり、今後も沢山作る計画がある。世界でも沢山作られているが、これからは作らないという国が出てきている。

三月三十日、東京電力会長はテレビ会見で、地域住民に多大な迷惑や心配をかけて申し訳ない、この発電所は

廃止すると言った。この日も水や空気が汚染されて国を挙げて防止するため取り組んでいる。世界の原子力関係者も、重大事件として対策に参加する模様だが、まだなんの対策もとられていない。農地の汚染、海の汚染で農作物の生産や海産物を食べることも作ることも危険であるということが言われ出した。

原発の事故は恐ろしいということも聞いていたが、自分の住んでいる地域の遠くない福島県で起こり、風向きによっては放射能が飛んできてもおかしくないわけだからまさに一大事だ。

今から二十六年前、ロシアのチェルノブイリ発電所で事故が起こり世界の話題になったが、日本から遠いので、その深刻さは判らなかつた。しかし今度の事件は東北で、しかもその規模はそれよりも大きいということらしい。電気のことでも原子力のことでも何の知識もないし、またそれになんの関係もないのに、命に関わる大事件に巻き込まれるのだから、国民の安全を預かる国の指導者達は、ゆめゆめ間違わぬよう慎重に対応しなければならぬ。

今日も着の身着のまま命からがらやつと生き延びた沢山の人々が、不自由な避難所で厳しい生活をして居る

のがテレビで知らされる。

一一四一



照井覚治さんのこと

三月二十九日、午後四時過ぎ、清水苑から帰ったら、ばあさんから、「早恵子のお父さんが亡くなっただよ」と聞かされた。

早恵子とはうちの嫁のことだ。その父覚治さんは長く療養生活が続けていたが、ついに亡くなられたのだ。

覚治さんは若いころは旧沢内村の改革に深く関わった為政者だった。

覚治さんと知り合ったのは、息子文生の結婚の時だった。今から二十七年前だったから俺は六十歳、覚治さんは六十七歳のころだ。(昭和五十九年)沢内村の民生委員を長くなさっており、犯罪者の更生を図る保護士もされていたようだ。

それ以来、時々会って話をする事ができた。

私より七つ年上でしたが、封建時代の貧乏百姓の暮らし、戦争という軍部の絶対体制のなかで同じ思いで耐えてきたことなど、似たように生きてきたことは、お互いに良く判る話だった。

また村政のことや福祉活動のことなども深い英知があることも感ぜられて優れた指導者だと思った。

知り合えてから二十年以上になるが、覚治さんのことを書くにはしつかりした資料もないし、私の一般的に知り得たことだけとなるが、素晴らしい活動家で、親類として付き合えることを誇りに思った。

長瀬野と言う部落は和賀川から離れて山裾に散在していたらしいが、昭和三十年代頃か、集団で和賀川近くに新しく集落を作った。このことはいは安いが実現は難しいことだが、覚治さんたちが中心となって努力して成功させたようだ。これは歴史的大事業で永く誇り得ることだと思うし、心から賞賛したい。

また地域の人たちの信用も厚く、沢内村民生委員を長く務め、和賀管内にもその人柄が広く知られ、多くの人の信頼があったようだ。私の友人小田島悟さんも民生委員時代、隣村の人だが素晴らしい活動家だと尊敬したものだと言っていた。

まだ年若い時は家族も揃って働いたのでよかったが、七十代になって、突然長男が病死し、間もなく連れの奥さんも亡くなった。他の子供たちも既にそれぞれ家を離

れて自立していたので、一人になってしまい、脳梗塞に襲われ、病院や福祉施設のお世話にならなければならなくなりました。それから、病院も福祉施設も同じ場所に長くいられない制度になってしまい、あちこち、自分の意思ではなく、そちらの都合でたらいまわしをされることになってしまいました。お正月やお盆など施設が休みの時は我が家にも休みに来て何日か泊まったこともあった。

それも自分の意思ではなく、誰かの意思で動かされるのだから、さぞ不本意だと思ったに違いない。それでもやや健康が保たれていたころは、私と昔話などをして、いくらか楽しんだものだったが、だんだんそれも出来なくなりました。三年くらい前から福祉施設「ぶなの園」に入園し、体力が次第になくなって、ついに三月二十九日に亡くなられた。九十三歳だった。

壮健な時は志高く、社会の為心血を注いだ人だけに、恵まれなかった晩年を悲しく思い、追憶の念に耐えない。同じ時代に生き、ともに語り合った覚治さんの死は私にとつてまた一つ寂しい出来事です。

一一、四、二二

震災の句

災害は 親も地域も

みな浚い

避難者は たた元の暮らしに

戻りたい

あの友よ も一度来てよと

浜に立ち

青い空 緑の里よ

もう一度

獲れたもの 捨つる被災の哀れさよ

名誉の戦死とは

第二次大戦で私は兄を亡くし、戦後約二年に亘って信用できる情報を得たいと思い、各地の戦後処理事務所に手紙を出して調べた。

兄は南方のブーゲンビル島で昭和二十年四月五日に戦死したという公報が届いた。昭和十八年八月ころ、「南方派遣 猛 第三三五五部隊 小田島藤見」とだけ記し、「元気で任務に精励している」という葉書が着届いただけで、あとはなにもない。国を発つ時は、秋田十七連隊からだったので秋田に連絡してみると、この部隊の本隊は熊本であることが判った。それで熊本の事務所にこの部隊で生還した者の住所を探してもらい、三人の居所がわかった。その方々とやつと連絡がついたが、どの方も兄とは面識はなく、四月五日は大激戦で壊滅状態となり、その後は戦ができず、敗戦を迎え、六千数百名の部隊は僅か三百名でおおよそ負傷者だった。

このことで兄の戦死は確実だと思ふことが出来た。その後岩手県の東和町、大菅久志さんという、ブーゲ

ンビル島の生き残りの人が居ると聞き、訪ねて話を聞くことが出来た。その方は人事係曹長を勤め、多くの兵士を知っていたが、兄のことは知らなかったと言う。ただ、食料も弾丸もなにも送られず、餓死する者、病死する者が沢山出たと語った。

私は兄の最後を知っている者を探したが、そういう人と話ことは出来なかった。壊滅的打撃を受けた四月五日に名誉の戦死を遂げたとは誰も知らないことなのだ。してみれば、兄は何日も飲まず食わずで、耐えかねて死んだかも知れない。

私は中国の戦地で、病気で寝て居る戦友を、上官が「貴様タルンデ居る」と言つて酷く叩いたことを思い出した。戦友はその夜死んだ。この戦友も、もしかしたら名誉の戦死と通報されたかも知れない。

同じようなことを、三月一日の岩手日報の論壇に書いていた人があった。

戦争とは人の命を軽く扱ったし、本当のことを伝えないことも平気で行った。戦争とはなにもかも異常にするものだ。二度としてはならない、しかと伝えたい。

行くも地獄戻るも地獄

四月三日の岩手日報に全国の原子力発電所のこの頃について報道があった。今、日本には計画中のもの一カ所を含めて十八箇所あるという。点検で休んでいる発電所の再稼動には待ったが掛かり、その他の発電所でも、住民の不安が出て大変な状態のようだ。

原発を作る段階で、どこも住民の反対があったが、国は多額の補助金、交付金などで吊り上げ、さらに沢山の固定資産税などを入る仕組みにして反対を阻止した。

その後その地域はいろいろな仕事場も増え、経済も豊かになり、いわゆる原発城下町となり、住民は幸せを感じていたが、今度の福島原発事故によって大きくその夢が崩れた。

東京電力の幹部は「案全を大前提に、地域の発展に貢献する気持ちでやって来たが、地域の暮らしを激変させてしまった」と声を落とした。

地域住民も「騙された」と怒ってみてもこれから何が出来るかもわからない。強い危機感を抱きながら当面は

ここから逃れられないと観念するよりほかはない。

国及び為政者たちは国民の安全を守るため、あらゆる努力を尽くし、住民に対し「行くも地獄、戻るも地獄」の状態を放置すべきでない。

災害には限界がない。したがってこのような大きな安全を脅かし、危険が予想される施設については今後あらゆる角度から検討し、安全の保証のない場合はやめることにしてほしい。

そして今稼動している発電所も更に安全のための補強なども行い、二度とこのような被害が起きないようにしてもらいたい

地震は天災だが原発事故は人災だ。人や自然を壊すことのないように、よくよく考えて行うようくれぐれも望みたい。

何時までも働きたい人

同じ人間に生まれても、何時までも疲れないうで働きたい人と、そうでない人が居るようだ。

私と同輩の巣郷の利男さんは、一緒に中国に軍隊として行った。もう九十に近くなったが、今でも朝早くから夕方まで、農作業に一生懸命働くことが楽しそうだと近所の人たちが言っている。

また近所の大渡りの幸助さんは私より七歳ほど若いですが、十年ほど前に食道癌と言う病気で九死に一生を得て助かった人だ。次第に健康を取り戻して働くようになった。去年まだ若い女房を亡くして、普通の人ならもうなんにもしたくなくなっても可笑しくない人だが、家族の誰よりも先になって、ただひたすらに働き続ける。

何時までも働くことが好きな人はまだまだ居るのかなあ、と私などは考えさせられてしまう。私も若くて元気な時は、大体セツコガサナイで働いた。三年前ごろか、腰が曲がって歩くことも働くことも辛くて働けなくなってしまう。この頃はコタツに寝て居ても、ほんとに

何もしたくないことが多い。

婆さんに「今まで一杯働いて来たんだからええんだ」なんて言われるとその気なつて、もう働けなくても当たり前なのかと思ってしまう。

利男さんや幸助さんの働き魂はどうして出来たのか。普段の健康管理や、働くことの考え方、取り組み方が私なんぞとはもともと違って居たのかも知れない。

人はみな違う生き方をするのだが、働くことが楽しくてやめられない人は、自分も幸せ、周りの人にもいい影響を与えられるから素晴らしい生き方だ。

働くことの楽しい人よ、バンザイ。何時までも幸せでありますようにと心から願う次第です。

高校野球大会

私は若い頃から高校野球大会が大好きで、よく見ている。野球のルールについて全部は知らないが大体判る。

今年は大震災で震災ニュースが多く放送されたので、全部見ることは出来なかったが、それでも大体は見た。

私はプロ野球より高校野球が好きだ。あの若者たちのひたむきに一つのボールを追いかける無心な姿が実に美しい。

何時だったか三十年も前だったが、青森県三沢高校と何高校だったか関西の高校と決勝戦を二日続けて戦った。二日目も九回戦って三沢はついに破れたが、あれは高校野球史上最も輝いている筈だ。

あの時、東北の人たちは、野球が好きでない人もみんな応援したものだった。郷土の誇りと思つて心から声援をおくったものだった。

今年も、東北から青森光聖高校、宮城の東北高校が出たが、大震災で十分練習できなかった。しかし良く健闘してくれた。震災で苦勞しながらもその健闘に元氣をも

らった。選手たちも災害と言う気苦勞を背負つてよく頑張ったものだ。

スポーツは爽やかで美しいが、大災害と重なってしまい、残念だった。高校生たちは一生に一度かも知れない甲子園という晴れの舞台で、精一杯戦えるのだから光栄だ。この幸せを体に蓄え、震災復興のために戦つてほしい。

震災は今まで日本でも、世界の何処の国でも、必ず克服して以前よりも遙かに発展して来た。

今その力が試される時なのだ。頑張ろう日本。高校野球で輝いた若い力が今一層必要とされる時なのだ。

老齡の声は届かなくても、私は高校野球を愛し、何時までも声援を送りたい。

地震と停電

四月六日、夜十一時半ころ酷い地震があつて停電となり、真つ暗になってしまった。三月一日以来の強い地震だ。今まで何回も余震があつたが停電はなかった。でも二回目の停電だから前より慌てなかつた。ラジオで大よその状況は判つた。

次の日の夕食は早めに食べたが、六時過ぎとなれば家の中は灯りがないと不便だ。ロウソクを用意したり、懐中電灯を立てかけたりして灯りにして夕食を済ませた。私たちが子供のころは電気がなく、石油ランプやローソクの灯りで今の灯りの何分の一かでも、不自由とも思わず当たり前と思つて暮らして来たものだが、今は大変不便だ。

便利な暮らしに慣れてしまうと、不便な元には戻れない。先の地震も今の地震も東北地方の大方が停電となり、地震で壊れてしまった電気も水道もガスもまだ直つていない所など、どんなに困つて居るか思いやられる。この夏は電力不足が予想されるようだ。豊かな生活の中で

も、更に電力を必要とする産業が起り、足りなくなるということだ。

原子力発電は怖いが、国際競争に負けない先進国になる為には、一番安くて大量の電力を生む原子力発電所をなくするわけには行かないという事情もあるようだ。

今回の福島原発の事故で世界中が揺らいた。原発のあり方について、再点検や今後の建設中止なども含めて、重要な課題となつた。

世の中がどんなに進んでも、やはり幸せと危険は、表裏の関係で行くものなのか。それにしても事故が起れば人間だけでなく、あらゆる動植物の存立を犯すことについては、人間の全能を傾けて対処しなければならぬまい。地震と停電という課題から、大きく跳んでしまつたが、怖い体験があればこうゆうことも思われる。

この頃のこと

三月十一日の大震災以来、毎日各地の被災状況が報道される。今までになかった悲惨な状況で、見るたびに痛ましく思われる。

私の平凡な暮らしの中でも、なんとなくめまぐるしい日が続いた。そんな中で日記を見ると次のようなことが書いてある。

『四月七日 木曜日 曇り』

婆さんは医者に行つて独りになった。昨日から広治さんの連絡で、今日、川村光夫さんと一緒に遊びに行くという事で待っていた。九時過ぎに来た。私が酸素吸入をしていて、ほとんど外に出なくなつたから、友達たちが心配して、様子を見に来てくれる。有難いし、嬉しい。

川村さんは私より二つくらい年が多い。この頃オシッコの具合が悪くて医者に行つたら、前立腺ガンと言われたという。しかし、北上の中部病院に行き、よく調べて貰ったら手術しなくても治療は出来ると言われてほつ

としたが心配だと言つた。私も同じガンと言われたが、注射治療で二年経つたが、とくに酷くならないということと言うと安心したようだ。

私と川村さんや広治さんは若い時から、親しく議論し、民主化運動などと生意気なことを一緒にやったものだった。そんなことを振り返りながら、この頃の西和賀町の話となる。

ここ数年のうち、全国では臨界村と言われる地域が三千地区も消えている。西和賀地域でも年寄りだけになり数年後には誰も居なくなつてしまふような部落が幾つかあるが、なんとも手が打たれない。なんとかしなければならぬという運動も起らない。日本中の農村に、生き生きとした活動は見られない。寂しいもんだなあ、などと言う話も出て、三時間くらい話題が切れず語り合つた。

『四月八日 金曜日 雨』

昨夜十一時三十二分強い地震があつた。去る十一日の大地震以来毎日余震があるが、今回はあれ以来の大きい地震だ。停電となり真つ暗となった。夜中の地震と停電

は気持ちも悪いし、慌てる。私は酸素吸入をしているが停電すると吸入出来ない。息子が携帯用のポンベを持ってきてくれた。ラジオで情報を聞く、マグニチュード7.2、震度6強が宮城県沿岸部、この辺は5とされた。津波の注意もあつたが来なかつたようだ。

日中は停電でコタツに入ってラジオを聴いていた。北上の北良と言う酸素を扱っている会社の人が心配して来てくれた。携帯用の酸素もあるが、長い停電だと直ぐになくなるので、大きいポンベと取替えてくれた。やはりこんな時は酸素に依存して居る病人は大変だから、この会社は人命を守る仕事なので、こんな時は忙しいようだ。

清水苑も停電で休みだといつてきた。夕方になつても停電は続いて、早めにローソクや携帯電灯などで夕飯を食べた。その後まもなく復旧しほつとした。

『四月十日 日曜日 晴れ』

午前 細内の従兄弟、幸夫さん夫妻が来てくれた。やはり私の健康を心配して来てくれた。一キロとも離れていないが、そんなに近く会う事もない。果物などを持つ

てきてくれて、久しぶり一時間以上も四方山話をした。幸夫さんの母は私の叔母で、今、光寿苑に行つて居る。もう九十二歳だが、しつかりしていて安心だと話し合つた。

午後は友達の一男さんが、やはり心配して遊びに来てくれた。一男さんの嫁さんの姉が、山田町の津波災害で亡くなられ、行つて見て来た話しを聞いた。テレビで見ているより現場の様子はとても生々しいもので、絶句するよりほかになかつたということだった。この辺の火災の跡の何千倍もの惨状でしょうから、その酷さはとても口では言い尽くされないものだったでしょう

また最近、麗ら舎より、文集「おなご」が送られてきたし、昨日は長野県下伊那の鈴木先生(元大学講師、農村問題研究者)から東北大震災の見舞いで、なにかほしいものを教えてください、などと言うお手紙を頂いき、有難く、大変なご心配に感謝して返書を書いた。

此処二、三日のことだがいろいろなことがあつた。余震が毎日で、心落ち着かない日の続きだが、また有難く、嬉しいことを頂いたことでもありました。

清水苑と私

一昨年十二月の末ころ、デイサービスの利用のことで話があり、それから役場の係りに方が何回かお出で頂き、通所することが決まった。昨年二月十二日が最初の通所となりました。

最初に名前を紹介されて仲間となったが、数回の間はなんとなく馴染めないで退屈でしたが、わたしの書いたエッセイを東海林さんから紹介してもらい、みんなが聞いてくれて、それから打ち解けて話し合えるようになってきた。また桑島さんや窪田先生に、私の書いた自分史を提供して読んで貰ったりして親交を深くした。

六月三十日から週二回にふやして貰った。二回来るとまた新しい仲間も多くなり楽しさも大きくなった。

通所は家の玄関まで迎えてもらって送り届けてもらい、清水苑に着けば体温を測ったり、血圧を測ったりして当日の大体の体調検査する。異常なければ頭や体を洗い、そして入浴だ。温泉だからよく温まる。

それから体のよく利かない人はリハビリの先生に治

療してもらったり、電気の治療したりしてから自由に本を読んだり、仲間と話したりする。お昼を迎え、食事を頂き、二時までお昼寝をし、起きてやさしい軽い体操をし、それから体を動かすためのゲームをやる。これがまた、応援や歓声で盛り上がり、実に楽しい。たいてい採点があつて、体の不自由な方も一緒なつてやるのだが、私はいつも中ほどより下の成績で終わる。最近のペタンクではどうしたわけか最高点だった。点灯を叩いて消すモグラ退治では九十六歳の清到さんが一番多く消す。年をとつても神経が若いのだろう。みんなは「やはり九十歳にならなければここまでやれないのかなあ」なんて笑いあつた。またゲームの代わりに、似たような絵、二つを見ながら違ふところを探す間違いさがしもやる。九つの間違いをさがしても、七つくらいしかわからないことが多い。全部見つける人もいる。ちよつとした違いなので、どうしても年寄は見つけられない。これも頭の体操としては面白い。それからおやつを頂いて帰りとなる。午後三時半だ。このくらいスケジュールなら私にはとてもいいと思う。

老人保健施設と老人保健居宅事業所と言うことにな

つていて、通所困難な人は泊まってサービスを受けられるようになっていて。医療法人尽心会という法人が経営していて、県とか町のように直接住民の健康に責任を負うところではないが、人の命や健康を扱う仕事ですから、どなたがやっても人命尊重の精神でやってもらいたい。経営ですから赤字ではやって行けないわけですので、国も正しい監督の下でしっかりと担保しなければならぬ。

私は一年以上通って、介護士さんやみんな職員さんたちは優しく丁寧にしてくれることに感謝しているし、七夕とか夏祭り、クリスマスなど職員が総出でお祭りをしてくれることも大変楽しいと思った。

私よりも体の利かない人や言葉の出来ない人も、排泄の手伝いなど、いたわりの精神で扱ってくれるので、とても神聖な仕事をしてきていると思う。昔、聖職と呼ばれる仕事があったが、今もあるとすれば、こうゆう人たちの事を指してもいいではないかと思う。

私たちをはじめ、社会はもつとこういう仕事を理解し、この人たちに誇りを持って働けるよう、身分保障にも勤めなければならぬと思う。

各地の福祉施設で働く人たちがやめてゆくと、言う話を聞く事がありますが、それは社会がその職責をよく理解しないからだと思えます。もつと多くの人たちに考え直して貰いたい事です。

私は今一週間に二回ずつ通わせて貰って、私の生活の大切な一部になっています。

とても幸せです。これからも私の生き方に、より親しく楽しい清水苑でありますようにと願って居ます。

一一、四、一七

俺はもう少し生きそうだ

二〇一一年四月十四日午後一時、俺はオシッコのため外へ出た。

長く雪に閉ざされて、やつと顔を出した少しの場所の黒い土、そこに俺は腰をかがめてオシッコをする。それから重たい頭を上に向けて青い空を見上げた。やつと春のような柔らかい陽ざしを感じた。季節は遅れても間違いないく巡ってくるなあと思った。

俺は一九二四年一月八日に生まれたことになっている。だから今八十七歳三ヶ月生きたわけだ。若いころは丈夫でもないのに体力以上に難儀した。だから四十台で死ぬと思っていた。しかし今まで生きてしまった。生きていたことを悔やまない、むしろ感謝している。

此処まで来るともう少し生きるのかなあと思う。

でも今はなんにも働けない。体力は老化したが心はまだボケていないと自分では思っている。だから俺は生きていても当然だと思っている。あと数年の命だと思うが、それを寂しいとも悲しいとも思わない。こうやって家族

や、まわりの人たちと語り合ったり、何かを見たりすることは楽しい。だがこうしたことと、やがて決別することになる。それは誰でも避けられないことだ。

なんて悟りを開いた人のような割り切った事を言ってもいいかな。

この頃俺はまだ何か書きたいと思っている。物書きでもないのに、ボケないうちは書けるから、今までも少し書いて綴ってあるが、小説のように面白くもないし、巧みなエッセイのように読む人にいい感じを与えるものでもない。

見たもの、感じた事をそのまんま書いているだけで、ロマンも想像も読み取る事は出来ない。そんなものでも見せてくれとか、もっと書いてくれとか言う人もいる。だから俺は書けるうちは書こうと思う。

書くと言うことはちよっぴり伝えたいと言う欲があると云ったら、友達の悟さんも、「んだ んだ」と言った。

悟さんも俳句や川柳、エッセイなども書いて綴っている。年をとってこんな楽しみを持つこともいいな、なんて話し合っている。 一一、四、一八

シベリアと撫順の抑留

～高橋哲郎さんの体験について～

これは和賀町長沼の文芸誌「おなご」より抜粋したものである。

一九二一年 宮崎県延岡市生まれ 大阪外語学校中国語科卒 一九四四年二月中国山東省済南市にて応召
一九四五年八月敗戦 翌二年よりソ連軍捕虜 シベリア抑留 一九五〇年七月 戦犯として新中国に移管
撫順戦犯管理所に抑留 五十六年九月釈放帰国 二〇〇二年四月「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」創立

シベリア抑留生活

一九四五年八月ソ連軍の捕虜としてシベリアに送られた。ウクライナ山脈の東側の山奥の山林、二千箇所に

約一千名ずつ収容所に入れられ、過酷な強制労働を五年間従事させられた。そこでの食事はひどいもので、キャベツの葉っぱが一枚くらい入った塩味のスープがコップ一杯、雑穀の粃殻の入ったような黒パン一切れ三百グラム、砂糖は一日十グラム、ニシンの切れ端が一切れといった状態が毎日続くのです。おまけに強制労働は過酷で、耐え切れず脱走した者は銃殺され、死体はみんなの見えるところに並べて晒された。

森林伐採とか炭鉱労働、鉄道建設など過酷で危険な仕事をさせられて栄養失調、疲労で多くの人が死んだ。抑留された六十万人のうち一割の六万人が命を落としたと言われます。そのほかポーランド、ドイツの捕虜数百万とも言われる大量の捕虜たちの犠牲によつて第二シベリア鉄道やその他の復興を果たしたと言われます。

戦犯として中国八路軍に引き渡される

一九五〇年七月 ソ満国境のスイフンガで中国八路軍に引き渡された。ここまで来る間はソ連軍の貨車に乗せられ、銃でこずかれながら来たが、今度は白いシート

をかけた客車で、通訳がついて、看護婦さんが「病気の人は居ませんか」と一人ひとりに丁寧に聞いて歩くんです。それから食事もソーセージ、温かい葱のスープ饅頭、白いパンなどが出てびっくりした。

しかし此処は、鉄格子で囲まれ、部屋には鍵が掛けられた。それではじめて戦犯収容所であることを知った

この撫順戦犯管理所には九六九名の日本軍の将兵が収容された。大将など将官クラスが三五名、大佐など佐官クラスが一二五名その他二等兵まで居た。

この頃は中華人民共和国が出来てまだ一年くらいで、戦犯集要所でも我々をどう扱えばいいか決まっていないうで、後で考えてみると、中国側と私たちの両者共同で作りに上げていった人間復活劇だったと思われる。

当時の中国共産党の指導者たち、毛沢東、周恩来とかは、日本人戦犯者の人間性をどう取り戻すかの基本方針はしっかり持っていたようだった。管理所員もその方針の正しさを体験的に学んで行ったように思う。

周恩来首相は「日本人には日本民族の習慣がある。その習慣を大事にしなさい。絶対に殴ったり罵ったりするな。彼らも人間だから、その人間の良心に働きかけるよ

うにしなさい」と言う原則的な方針を示されたことを後で知りました。

一年くらいは起きる、寝る、運動時間は決まってやっただがその後は自由で、トランプ、マージャン、囲碁将棋などで遊んだが、中国の人たちはなにも言わなかった。

それから朝鮮戦争がはじまり、中国は北朝鮮に味方してアメリカと戦った。みんなアメリカには負けるだろうと言っていた。ところが義勇軍が勝利し停戦協定が結ばれた。こんなこともあつて日本人の中国を見る目もだんだん変わっていった。そして我々もただ遊んでばかり居ては駄目だ、人間性についても一度考え直さなくては、という気持ちが出てきた。それから中国側との話し合いとなった。

帰れるかどうかも全く判らない。なんとしても生きていよう。生きてさえ居ればきつと帰れる。そう考えて耐えることにしました。

私たちは上官の命令でやったから戦犯ではないと思いなから、武勲を立てて金鵄勲章をもらいたい、とも思った。こう考えると、やはり侵略日本軍と言う罪を犯した事になる。こんな事が頭の中を行き来したことが何

ヶ月か続いた。そのうちに隊内で学習運動というものはじまった。レーニンの帝国主義論とか井上清の日本の軍隊とか、毛沢東の実践論、矛盾論など哲学、革命論などになると判らない人が沢山居たが、大学教授も居たので、グループ学習会が広くおこなわれるようになった。

また日本の徳永直の「太陽のない街」、宮本百合子の「播州平野」などの小説や「どっこいおいらは生きていく」などの映画も見られた。

私は学習の中で、毛沢東の実践論と矛盾論を感心して読んだ。実践と理論は結合しないとだめだ。いくら理論を知っていても実践と結びつかなければ意味がない。いくら実践されても、それが理論的に整理されなければその実践にも意味がない。私はこれを学んだことが自分を變えるきっかけとなりました。

それから三年、四年と経つと、坦白(たんぱい)運動ということがはじまりました。それは自分が中国でやってきた罪行を隠さず全部みんなの前で吐き出すということです。これはすごく勇気のいることでなかなか出来ないことです、

ある時、広島高等師範学校を出た将校が、自分が中隊

長として作戦実施したことを全部みんなの前で告白したわけです。子供や老人を残酷に殺した事を隠さずに話して、自分は中国の人たちに本当に申し訳ない悪いことをした、と気持ちのこもった告白でした。

本当に前非を悔いて人前で語るといふことはなかなか出来ないことだが、こうゆうことが沢山行われて人間性が変わって行ったのです。中国人民もこうゆう姿を見て、人間らしく変わったと認めたのです。

撫順と太源の戦犯管理所を合わせて一千五十六人のうち実際に起訴され、裁判を受けた人は四十五人だけでした。この人たちには死刑も無期懲役もなく、一番重い刑でも二十年の禁固刑でしたが、この刑の期間にはシベリア抑留の五年と、撫順戦犯管理所の六年、合わせて十一年を含むというもので、一九六四年までに全員が刑を終えて帰国出来たということです。

以上が高橋哲郎さんの報告ですが、素晴らしい反省だと思つて転載しました。

戦争が終わつて、戦犯に問われて刑を受けた者もあり、

侵略を反省して出直したわけですが、今でもあの戦争は正しかったという者も居る。また中東、アフリカ、東南アジアなどでは民族や宗教の対立で戦争が絶えない。古来正しい戦争なんてあり得ない。

人々は平和で争わず、福利を求めて穏やかに暮らし時を望んで止まない。

一一、四二二



清水苑の廊下

四月二十七日 水曜日 曇り

清水苑に行った。計温、血圧測定その後入浴それからリハビリの訓練室に行く。私たちの居所は西の端にある大きな部屋で、十四五人がテーブルに向かい合って座って会話したり、本を読んだりして居る。午前中に、リハビリ室に行きリハビリの先生から治療してもらう者や、低周波電気治療やベルトによる歩行訓練や体力テスト、会話などのことでこの部屋に来る。この部屋は大きな部屋で多目的ルームと言ったところだ。ここまでの距離、私たちの居所からは長い廊下で一度九十度に曲がり、80メートルあるそうで、私やほかの人も押し車に縋って歩行訓練をしている。この長い廊下の両側にはいろいろな部屋があつたり、風呂場に行く通路や二階に上がる階段やエレベーターもある。その中に小さい床屋さんの部屋があり、時々こちらを向いて理髪している人を見かける。今日見かけた女の人、見覚えがあるが、とつきには思ひ出せなかつた。通り過ぎながら誰だっけなあ、あつ、

そうだチマさんだと気がついて直ぐ引き返して「チマさん」と呼んだ。にっこりして会釈があつた。

久しぶりだったが忘れるほどでもないのに、ふっと忘れて思ひ出せなくなる。そういうことは度々ある。これは痴呆症の前兆と言われる。私は出来ればまだ痴呆症にはなりたくないが、なつても仕方ない年になってしまったのだと思ひ返した。

「元気で居るか」と言ったら「手足がシビレて元気でねえ」と声が返つてきた。そのことは前にも聞いていたので、「そうか でも頑張つてねえ」と言った。

チマさんは私とは、ふたいとこに当たる。つまり私の父親とチマさんの母親が、いとこだった。だから子供の時から縁のある親しい間柄だと思つていた。私より二つ年下で、小学校の頃はとても成績がよいと聞いていた。多分戦後だと思ふが、粕賀屋さんと結婚して幸せに暮らしていたようだ。五年ほど前に生まれたところの近くの湯田高原駅の傍の家を買つて住んで居たが、私より早くから体調が悪くなり、此処にお世話になつていた。私もここへ来て時々会つて会話する事がある。縁の者よ、元気で居てくれと願う次第である。

昭和の日

四月二十九日は清水苑に行った。

清水苑は祭日でも日曜日以外は私たちを受け入れてお世話をしてくれる。私などが昔、働いていた時は、曜日など関係なく、ひどい荒れでない限り外で働いた。

子供のころ小学校では四月二十九日は天皇陛下のお生まれになった日で、天長節といって、国を挙げての祝日だった。国旗を掲げ、生徒も出来るだけ立派な服装をして行き、校長先生はモーニング、先生たちや来賓も正装で講堂に集まり、厳粛に儀式が行われたものだった。戦争が終わって昭和天皇が亡くなってからこの祝日はなくならない。暦を見ると、昭和の日となって祭日だった。このように変わるに当たっては、それぞれの議を経て国民に伝えたであろうが忘れてしまっている。

この朝、昭和の日であることを確かめて清水苑に行った。曇りの日だった。リハビリ訓練室に行つてベルト歩行訓練をしていたら長男の善美が訪ねて来た。この間体調が悪くて入院して居ると聞いていたが退院したのは知

らなかった。訪ねて来るほど元気になっていることは良かったと思つた。一週間ほど前に退院して静養しているとのこと。特に病人らしくもなかったので安心した。用事もあつて家に来たので寄つてみたと言ふことだった。元気になって働くようになれば良いと願う。特に用もないので少し話して帰つて行つた。

部屋に帰つたら、今日のお昼はお花見弁当が出るそうだ。まだ花が咲くまでは間があるんだが、昭和の日にちなんで今日にしたのだろう。やがて花見弁当の折箱が配られた。いつもより変わったお昼のお膳を頂いてみんな嬉し顔。子供のように嬉しい気持ちになつた。今日の日に当たつた人たちだけの喜びだ。得をしたんだ。

花が咲くのが待ちどうしい、昭和の日よ、早く春を連れて来て、と思つた。

選挙について

今年はいろいろな選挙があつた年だ。一斉地方選挙と言われて、県知事、県会議員、市町村長、市町村会議員などが、一番多く選ばれる選挙年だった。ところが東日本大震災で、被災地では選挙が出来ないところもあり、その地帯の選挙は延期となった。

四月三十日までに県、市町村の選挙が行われたし、そのほか特別区市や途中改選の選挙もあつた。その結果はいずれの選挙でも、民主党と共産党が議席を減らし、代わりに自民党やみんなの党と地方政党、たとえば減税党などが目立ってきた。

みんなの党は自民党から分かれて作られたのだが、なぜか勢いがついてきた。民主党は、長い自民党政治に変わった新しい政策を期待され大幅成長した党だが、半年ほどで信頼が減ってきて、今は風前の灯という感じだ。

また共産党は、国会でも一番整然とした論陣を張って、例えば生活に困っている人たちの実態を調査して、それに対する対策を示してその実施を求める。このことは誰

が聞いても良く判ることだ。みんなみていることなのでから選挙の票になりそうだがならない。どうしたものか。私は若い時から共産党を応援してきたが、一進一退、この頃はするすると後退して止まらない。

選挙は正しい世論を表すものでしようし、それは否定するわけには行かないが、何か筋が通っていないような気がするところもある、思うのは私だけでしょうか。

三月十一日の大震災、それに原発の重大事故が重なり、先ず何よりこの災害からの立て直しが必要で、内閣を変えたりする余裕がないという調子で民主党政権が辛うじて保たれているようだ。

国の政治を早く、しつかり立て直しには今ほど選挙が必要な時はないとも思えるが、それも出来ないという不自然な状態に陥ってしまったようだ。

選挙は世の中を質しものでありながら、その武器を使えない状態もあるものかと考えさせられる。これも異常事態の止む終えないことなのか。いずれ、早く正常な国の姿に戻って貰いたいものだ。

憲法の日

五月三日。今日は暦にも新聞にも憲法の日と記されている。でも以前のように目立つようには催しもなにもみられない。テレビでもそれにちなんだ番組は見当たらない。今日大きく出たのは、ビンラディン容疑者殺害であった。

岩手日報の社説には「震災と憲法」という見出しで、六十四回目の憲法記念日を迎えたが、東日本大震災の真つ只中で、日々の暮らしを立て直し、働き、産業を興して地域を振興させていく。あらゆる課題を、憲法の理念に照らして解決して行かなければならない。それが今国家が果たさなければならぬ役割である、としてあった。また、こうも述べてあった。「すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」。憲法二十五条にはこう定めているが、震災から二ヶ月近く経った今でも、県内では三六〇ヶ所の避難所に四万一二五七人、全国では一五万人の人が最低限度にも達しない生活を強いられている、と。

今は何がなんでもこうした被災者を救う事に励まなければならぬ。そしてそれはすべての国民が一致協力して努力しなければならぬ事だ。

それは憲法を生かすことにもつながる。

もう一つ戦争放棄のことである。憲法ができた時から自衛の為、警察予備隊というものを置いた。それが今では自衛隊となり、陸、海、空ともに何処にも負けない装備になっている。それは戦争抑止の為として、国民世論は沈静しているが、これは将来とも平和を支えるものになるか私は心配している。

戦争を体験してきた者は、二度と戦争はしたくない。憲法記念日にはいつもこのことの吟味が一番大切だと思う。切角作った世界に誇る憲法とは、戦争放棄を宣言したことだ。

私たちは世界が平和を失いかけた時ほど、世界に日本国憲法を精神を汲み取って貰うよう働きかけたいものです。

花を訪ねて

五月六日は清水苑で過ごした。今日は良く晴れた一日で暖かい日だ。清水苑の庭の端に立っている小さいモクレンの木に二―三日前からかれんな花が咲き愛嬌を振りまいているようだ。午後からまた水芭蕉など野草の花を見ようとドライブに出かけた。一昨日より少し進んだが、まだ小さい緑の衣に包まれた白い茎の先に黄色い水芭蕉が水溜りの中に小さな群をなして咲いていた。その隣の土手には、これまた可憐なカタクリがポチポチ春のいろどりを添えるように咲いていた。今日もこの前と同じコースだったが始めての人もいたので、春の息吹を確かめるようにドライブした。そうだ急いで書き落としたが、新町の入り口の神社のところに桜が二分咲きくらいだったが咲きはじめていて、これはほんとに初めての小さなお花見だった。

沢内ドライブのついでに今日は両沢というところにも入ってみた。何の花とは会わなかったが、家の数も思ったより多く、田んぼもあって少し離れた部落だなあと

思った。

安ヶ沢のカタクリ園も咲きはじめたようだが、いま一つ、この地方は花の季節には遠いようだ。

我が家のクロッカスは終わったがチューリップはまだだし、モクレンはようやく咲き始めたがもう二、三日しないと花の装いとは言えない。

地震、津波、原発事故など大変な被害を受けて、三月以来の放送は凄惨な被害状況の報道と、この被害からどうして復興への道を開くかをみんな考えてようという話だ。そのためスポーツも音楽も一時は遠慮して姿を消していたが、何時までも打ちひしがれて沈んではいられない。復興の元気になるものはない支えあつて頑張つて行こうと言う機運になってきた。

可憐な春の花も心を癒す力となつて復興に繋がって行けばいいことだ。地震とともに長く雪で寒かった春だったが、まだ小さい春よ、暖かく大きく広がってくれよ。青い空にどんだん広がってくれよ。

魂ってなんだべ

私は今まで人が死んで、もし魂があるとすればそれはどうなるか、なんて何回も書いたことがある。

生きている人はみんな死ぬ。そして火葬して、残るのは僅かなお骨だけだ。生きている人は、お骨と違う魂を信じ、その魂を呼び出して三回忌とか七回忌に供養する。でもその魂は誰にも見えない。見えなくても確かに居るんだ。そして供養の時は来るんだ。通俗的に人はみなそう思っているんだ。

魂は普段何処に居てどうして居るんだ。となると誰も判らなくなるのではないか。

高橋日出夫さんと言う人はその著書、「峠路」の中の「玉輪と魂」の中で、『真つ暗闇の中の本の線香の灯火のようなもので、八方塞がりて悶え苦しんでいる時に見える一点の灯りが心に抱く魂というものであろう』と記した。

そして、人が魂と言うものを感じる時は人間が没我の状態にあつて損得から離れ、ただひたすら己の心は無欲

の世界に昇華させる時であろう。

例えば高校野球の時、選手は夢中で白球を追い、応援席でも選手と一体になって応援する姿のようなものだろうか。

そして、人は死んで肉体は消滅しても魂は残ると仏教ではそう言うでしょうし、多くの人々もそう信じて朝夕仏壇に礼拝する。私は人が死に焼かれる時、人の目には見えない極少の玉輪のごとく光るものが遺族の骨拾いの時一緒に拾われ、墓地に埋葬されるであろうと思えてならない。そして時々の供養の時、この玉輪のごとき魂と無言の対話が成立するのではと思う。

高橋さんの説も感ずるところがあるが、私もさまざま思いをめぐらした。

そして私は、人の魂は、生きている間に家族は勿論、知人、友人や多くの人とふれあいの中でそれぞれの人に分け与えて、それぞれの人の心の中に生きているものではないか、だから徳のあつた人は長く、多くの人々の心の中に生きて行くのではないかと、そんな風に思ってもいる。だから縁のある人はそれぞれの回忌に故人を偲んで語り合うのも自然なのかなあと思う。

知らなかった戦後のこと

太平洋戦争が終わって、私たちは占領政策であまり酷い仕打ちを受けたわけでもなく、ひたすらに戦後の復興に努めた。

横浜国立大学の大門正克教授がこのことを調査して書いた著書「戦争と戦後を生きる」によれば、中華人民共和国の成立、米ソ冷戦の本格化、アメリカは東アジアにおける軍事強化と経済復興の二つの課題に迫られた。一九五〇年代のアメリカは、日本の経済復興を優先し、韓国には軍事を分担させたために、韓国の経済成長はおくれることになった。アメリカは戦後の東アジアでは、社会主義に対抗すべく、軍事と経済の分割支配を進めた。

一九五〇年(昭和二十五年)六月、北朝鮮の軍隊は北緯三八度線を越えて韓国に侵攻し、朝鮮戦争が始まった。この年、アメリカは韓国と相互防衛援助協定を結び、中国とソ連も中ソ友好同盟援助条約を締結していたので東アジアの緊張が高まった。

韓国軍は劣勢で六月末にはソウルを明け渡し、一度は

プサン周辺以外、北朝鮮に支配される。ところが九月二十五日にアメリカ及び国連軍が加担してピョンヤン以北まで攻め返した。その後北側に中国義勇軍が援助して三十八度線付近で一進一退となり、一九五三年七月、三八度線を国境に停戦した。

ここまでの報告でも朝鮮は日本の属国だったから経済復興の遅いのは当たり前だと思っていたが、実はアメリカの政策で立ち遅れたのかとはじめて知った。朝鮮戦争も、プサンまで追い詰められたことも、報告によってやがてそうだったのかと思った。

それから、かつての朝鮮は軍国日本の属国で、若者は日本軍隊に志願して行った者もあった。程月順の兄、程煽市は、その一人で陸軍兵としてニューギニア戦線に送られた、戦死公報が届かないまま、母は南方から届いた「一生懸命働いています。秋田実」と言う軍事郵便を大事にして息子の帰りをひたすら待っていた。秋田実は日本人としての改名だった。

朝鮮戦争が始まり、北朝鮮軍が侵攻した。程月順の家にも、志願兵の兄を「朝鮮民族に対する裏切り者」だと

指弾し、次兄を連行して頭を殴打し、次兄は障害を負って戻された。

戦争によって情勢が変わると、何の罪もない家庭に、こんな残酷な仕打ちもあったのだ。

戦争が終わって旧軍港の佐世保などが民間に戻るようになって住民が喜んでいる最中に、朝鮮戦争が起って佐世保の運命を一変させた。九州各地に駐留していたアメリカ軍が集結、出撃。兵担の基地となり、激しい爆音に空は覆われた。その後佐世保の旧軍港の大部分はアメリカ軍に接収され、自衛隊も駐留する現在の姿になった。このように今まで良く判っていない国内の変化も、追求調査してみれば、隣国の戦争によっても大きく左右されてきたことが判った。

朝鮮戦争で日本には特需景気に沸いたところもあったが戦争に反対する意識も強まった。例えば一九五三年二月の朝日新聞の世論調査では、『朝鮮戦争は早く終わった方がよい85%』、『原爆の使用に反対73%』、『在日アメリカ軍に、早く帰って貰った方がよい42%』という

ように、戦争とアメリカ軍を忌避する意識が明瞭に示されている。日本特別掃海隊への参加を拒否する海上保安隊の職員もいた。

朝鮮戦争を通じて原爆の再使用と再軍備への不安を感じた女性たちが、一九五三年に読書会「杉の子会」をつくり、あの戦争と戦時中の自分に対する反省をふまえ、なぜ戦争が起るかを考える読書会で、のちに原水爆禁止運動に発展に繋がっていった。

このように戦争で知らなかったことを調査して報告してもらうと、戦争と戦後の悲惨さを改めて感じたり、あの戦争を潜ってきたことによつて得たこれからの知恵もあった。

調査報告に感謝し、戦争を起さぬようみんなで勤めたものです

今年のお花見

今年のお花見は清水苑のドライブという形で四回出かけました。今年は雨が降らなくても何時もより気温が低く、花が半分くらいしか咲かないで葉が開いてしまうところが多かった。

それでも何箇所も回って見ると良く咲いているところもあって、七内のしだけ桜は綺麗だった。私は始めてだったが例年のコースのようだ。しだけ桜の満開は地面近くまで花が連なって垂れていて見事だ。

また弁天の川向いに川沿いに百メートル以上もあるうか、桜並木が作られていて、まだ若木だったがこれから有名な桜名所となるであろうと思われる美しい花園に巡り会えた事も嬉しいことだった。

大查の上流、通称「巻きぶち」の向かいの焼地台もキヤンプ地としてシーズンには訪れる人が多いと思われる。ここの桜は大分太くなっていて本数も沢山で見ごろの花に出会った。こんな立派な桜のあることは知らなかった。

その他川尻グラウンドや部落毎に綺麗な桜がポチポチ見られた。

今年は春の気候はよくなかったし、それに沿岸地帯のひどい震災もあって自然の美しさを探訪する気分になれなかったわけだが、また例年に戻ったら、西和賀の四季折々の美しさを、多くの方々に見て貰いたい。

清水苑の利用者になって地域の名所を見せてもらい、自分の住んで居る所がこんなにも優れた自然が多いことを知って、なんと「ええぞごだ」と思い返した。

昨日と今日

五月一八日、昨日も今日も晴天だが風が少しあって外を歩くと寒いと感じる。清水苑に行き帰りに所々で見かけるゼンマイもみの姿。わらむしろを何枚も広げて婆さんが一生懸命もんでいる。今年は冬の季節が長かったのでぜんまいもみも何時もより遅い。

昨日も風があつたが、がんばって細内まで車を押して散歩した。富雄さんに自作の本「翔べ ひとりごと」を届けたらと思う、四時少し前に着いた。暫くぶりで会い、とても喜んで話し込んだ。川尻の悠々館のデイサービスには月、水、金の三回行き、木曜日には患者輸送車で佐々木医院に行っている、とのことだ。連れの婆さんは公寿苑に行つて居て何時も一人で居るもんだから、外へ出て人と交わる方が楽しいらしい。なるほどそうだろうと思つた

富雄さんも九二歳だから話をしたい思いがわかるが、あちこちの話を混ぜて急いでしゃべったり、同じ事を何回も話したりで、年齢の老け込みの様子があらわれて来

たようだ。俺も家まで帰るのに時間が多く掛かると思つて帰ると言えば、「まだ早い、もつと話をしよう」と言つて身体でさえぎる。そんなことが二度もあつて、五時半になつてしまつた。今度は小便もしたくなつたので、また来るからと言つてやつと帰りについた。まだ日はあつたが風は寒く夕時となつていた。

お互いに年をとり、久しぶりに会えば四方山話が沢山あつて、あれもこれも話したい、そういう年代なんだ。

田んぼも良く乾かず田打ちもまだみんな終わつていない。これから代掻きをして田植えになるわけだが、例年より一週間以上も遅れそう。気温が中々上がらない冷害でなければいいがと思われる。

今日は清水苑で、午後の体操のあと、門屋充子さんと山本さん、それに大船渡の震災地から避難して湯川温泉に来て居る方が、昔話「かたりべ」をしてくれた。また門屋さんは紙芝居をやつてくれて楽しさを頂いた。

また悲しい事だが、川尻の須藤繁さんが昨夜亡くなられたとのこと。須藤さんには老人クラブの事務局をお願いしたこともあつて私にとつてもゆかりのある人だ。七十三歳とかで、惜しい人だ。冥福を祈る。

春の終わり

五月二一日。朝五時頃から雨となり、日中はゼリ雨が降ったり止んだり、九時ころは少し寒かった。

前庭のモクレンは大分散ったが傍にある花桃は白い花と桃色の花が混じって咲き、咲き分けとも呼ばれ可憐で可愛い。また八重桜は満開で美しい。花はどの花も二、三日あるいは一週間くらいで散ってしまう。あつけないようでもあるが、それは花の任務を終えて去るのだからむしろ讃えるべきものなのかも知れない。

五月の下旬と言えば春ではなく初夏と言うべき季節なのかも知れない。次第に山や里は緑に変わって行く。新緑のトンネルを潜るのも心が洗われるようで私はとても好きだ。此処に住んで四季おりおりのすがすがしき、美しさをあまり感じることもなくなった忙しく過ごした過去が勿体無く思われる。

今日は清水苑に行かない日で、黙って家に居るとゴロリと寝て居てばかりでは退屈になってきた。今なにを思っているかを書いてみたくなる。昨日は清水苑で下前の

俊次さんから、過日差し上げた私の本のお礼と言ってお祝いののし袋を頂戴してしまい、恐縮してしまった。俊次さんという人は礼節の正しい人だと感心した。お断りしたが是非収めてほしいと言って再度渡され、受け取ってしまった。午後のゲームは風船バレーボールで、二つのゴム風船を落とさぬよう自分の近くにきたらね飛ばしてやるのだが、若い女の介護士さんたちはかん高い声を張り上げて、「それ、〇〇さんただけ」と叫んで会場は歓声一杯広がる。黙ってやるより張りがあつて楽しい。

思いついたことをもう一つ書こうかな。
二十日のあかはたに載っていた九九才の柴田トヨさんの詩です。

被災地のあなた

最愛の人を失い
大切なものを流された

あなたの悲しみは
計り知れません

原発事故

でも生きていれば
きつといいことがあります
お願いです

「虎穴に入らば虎兇を得ず」
この格言を知ってか各国はこぞって原子力発電所を
作った。

あなたの心だけは
流されないで

勇気ある決断と言えばいささか乱暴過ぎる。
原子爆弾と言う怖い被災を受けながら、安い電力と言
う虎兇を得る為原発に手を出した。

不幸の津波には
負けないで

原爆と同じ被害をまたしても受けた。
もうこれは気づかなかつたでは済まされない。
人や自然の命を冒瀆するものとして罪を償うべきで
ある。

短くてもとても大きな励ましの言葉ですね、
九九才と言う年齢にも感じますが、詩と言うものの深
くて大きいものが思われます。

一一 五 二二

詩でも文章でも読む人に心を伝えることが大切です。
トヨさんは、被災地の人に心温まる、強い励ましを呼
びかけています。

私は被災者であるように感激しました

一一 五 二二

娘達が来た

五月二十四日。朝から晴れ、少し風があった。

朝飯を食べて少ししてから散歩に出た。仙台の娘たちが来ると言っていたので、何時ごろかな、多分夕方だろうな、なんて思いながら道端の花や草を見ながら遊び半分で車を押して歩いていた。タンポポはすっかり咲ききっていたが時折小さい蜜蜂が蜜を探しているようだった。傍に雑草で少し背の伸びた茎の高い細かい葉の沢山ついていたのがあって、その草には、緑色の小さい粒が数個付いて、その周りに黄色い可憐な花が幾つも付いていた。なんとという草花か知らない。その花はまだ咲いたばかりか蜜蜂は盛んに群れ飛んで蜜を食べているようだった。少し離れた野原にはまだワラビの柔拳は一つも見えない。

川尻方面に向かって少し進むと左側の道下斜面にイタドリが数本立っていて、中央の茎はしゃんとしていたが横に出た葉が枯れてしおれていた。イタドリという草は寒さに弱い種類なのかとはじめて知った。

少し行くと隣の富子さんが畑になにか植えていたのでそばに行つて何を植えているか聞いてみた。コンニャク芋を植えていると言った。テレビで群馬県あたりで芋を輪切りにして干しているのは見た事があるが、実物の種芋と言うのを見るのは初めてだ。私たちが毎年植えるジャガイモより数倍大きく真ん中の上のほうに白い芽が出ていて、それから茎が伸び葉が伸びて根に芋をつけるものようだ。これから食べる芋になるまで三年はかかるそうだが、作つて食べるまでのいろいろな行程が楽しめるというものだ。

帰つて家の前のチューリップの花がいよいよ美しく大きくなったので傍によつて観察した。赤いのと黄色いのと二種類咲いている。開いた花の内部を見ると、赤い花の方は真ん中に少し太めの三センチくらいの茎があつて雄しべの芽のようなものが小さく三方にわかれてついていた。茎の根元から六本のやや黒味かった雌しべが、雄しべに沿うように立っている。赤い花びらに張り付き、六角形にやや黒味かかつて、その六角形のへりを金色に取り巻いて、なんとも美しい花の内部に見とれてしまう。黄色い方は赤の内部のように六角形の美しい

ものはないが、雌しべ雄しべは赤と同じように可憐な姿で、花全体はあくまでも美しく輝いて見えた。

咲き分けと言われる桃の種類の花は小さく白と桃色が沢山咲き、散りだして花びらが何処までも飛んでゆく。まだ大きくならない二本の八重桜はまだ健在に咲き誇っていて春の戸締り役を務めているのか。

娘たちは、思ったより早く一時過ぎには着いた。仙台から高速バスで横手に来て、それからお風呂に入ってゆっくり来ると思っていたら、お風呂の時間を少なくして列車に乗って早く来たとのこと。料金八百円も出してもつたないことをしたようだ。

やっぱり今の話の始まりは地震災害だ。仙台は此処よりよっぽど酷かったことは報道で聴いていた。

民子は広瀬橋の近くのマンションの七階に住んでいる。高いほど揺れが酷いのかと心配したら、やはりひどかったようだ。三階あたりが一番酷く壊れて、七階は壁が割れて大災害のようで、暫く避難所で暮らしたが日中は通って、散々に乱れ飛んだ棚の物を片付けたりしていたそうだ。とてもまた入れないだろうと思っていたら災害保険屋が来て、保険金で直せると言う。戻る気になっ

たが、なにせ恐ろしい余震が引続いてやってくるのでとても怖かった、と言う。

妹のふき子は泉崎のライオンズマンション二階にいる。ここは少し弱かったようだが、みんな働きに出ている間に、棚や戸棚から物がみんな飛び出して、片付け方は大変だったとのこと。二人とも海岸近くではなかったので津波の被害はなく、家族が無事だったことはよかった。こんなときは何と言っても自分たちの家族が無事であることが一番いいことだ。

あのときは仙台の被害は大きいと聞いたが、電話もインターネットもダメで暫く連絡が取れず、ただ心配だけした。

各地の災害に際して、どこの人も心の準備をしておくようにと言われていても、その場に当たればみんな慌てる。

そんな大変ことがあっても、年取った私たちを、子供たちが心配して、時々電話をくれ、なにかお土産を持って顔を見に来てくれる。幸せに思うし、嬉しいことだ。

友人定雄さんと長さん

ある朝ふと思ひ出した。定雄さんは何時亡くなったと。そう遠くないようだが思ひ出せない。自分史「俺らの一生」を見たらちやんと書いてあった。平成十九年三月十二日だった。まだ四年しか経っていないのに、もっと遠いような気がした。

彼は昭和四三年に大台野の勘次郎さんの家と田圃と原野をまとめて買い取り、「イシカラネ細内」から引越して来た。間もなく大渡の原野三丁部を開田して約総面積五丁歩の大規模農家にのし上がった。この辺では一番の大規模農家だ。若い時から一緒に活動して来た仲間で、誰にも負けない根性で頑張り成功した湯田町の大物だった。

大台野の家は俺の家から五百メートルくらいで川一つ隔てた隣に住んでいた。亡くなる三、四年前に足を怪我したとかで、田圃では働けなくなっていた。何回か遊びに行ったこともあったが聞きたいことも余り聞けないでしまった。彼のお婆さんという人は、若い頃二度も

北海道に渡って畑作をやり、子供たち四、五人育てた成功者で、晩年はこちらで亡くなったと思う。そのことなどをもうと聞きたいと思つたが聞けなでしまった。

もう一人定雄さんと同級生で白木野の長さんと言う人が居た。この人は若い時俺らと一緒に酪農の先駆者をやつたもので、飲み友達でもあった。彼は盛岡農学校を卒業して間もなく役場に就職し、それから農協の役員となり、西和賀農協の専務や組合長を勤め、西和賀の大物となった。

俺は定雄さんや長さんより年は多かつたが彼らのように立派な仕事は出来なかつた。

長さんも定雄さんより少し遅れて亡くなった。二人とも俺より若くて有名な活躍者であつたが、二人とも俺に先立って逝つてしまった。

人の寿命とは判らぬもので、俺は彼らのことを偲ぶことになつてしまった。

岩手県内の航空事故から四十年

沢内協立診療所に行くようになってから三年になった。田中先生とも少しくらいは様々な話をする事があって、ある日盛岡の伊藤孝さんと言う作家が私の書いた本を見たいというから一部都合してくれと言われた。同時に伊藤さんの書いた「機関銃を捜しに来た男」という分厚い小説とエッセイを書いた本を貰った。

開いてみると、今から四十年前に起こった雫石町上空で一般旅客機と自衛隊機が衝突して乗客一六二人が犠牲になった大事件のことで、私もまだ忘れていない。興味を持って読んだ。

やはり彼は作家だから、これをもじって自衛隊機は機関銃を落とす、それを捜しに来たふりをする警察官は、実は学生活動や組合活動を調べ、リーダーなどをリストして置こうという魂胆だったが、逆に組合側に知られて警察が吊るし上げを食らうという内容だった。

それからこの伊藤さんは、医療協会を作る為に何年も努力し、できてからは事務局に働いたが病気で退職して

今はフリーで活動しているようだった。

その伊藤さんが私に手紙をくれて「あなたの本を見て面白くて為になることを沢山学んだ」と書いてあった。

盛岡の若い活動家が、組織化した医療協会の力で、金儲けではなく、お金がなくても医療を疎外しないで救ってくださるようお願いしたい。

憲法によって日本国民は文化的最低限度の生活を享ける権利を有す、とあり、老人医療無料化を全国に先駆けて実現したのは旧沢内村でした。

雫石事件に機関銃の発想は面白かった。

作家の創造力は日常活動に結びつくこともあり、今の混沌とした時代を切り開く力にもなれることがあるに違いない。

ワラビ

五月二十七日。やや曇り。清水苑に行く。

昨日婆さんが始めて山に行きワラビを取ってきた。山といつても家から見える直ぐ傍だが、少し斜面が急で年寄りが歩くには少し酷いくらいになった。

去年までは当たり前前に歩いて取ってきたが、今年はなかなか山は歩かれなかったとかで、それでもよいワラビがよく出ていたので取ってコダシに入れ、あれもこれもと取っているうちにコダシがいっぱいになった。背負って帰ろうとしたが足が飛び、腰がふらふらして歩けなかった。それでコダシを引きずって、這うようにしてやつと家まで帰ったという話で、やぢまげ(大変だ。やっぱり婆さんもダメになつてしまつたかと思つた。

取つて来たワラビは太くてよいワラビだったので「明日、清水苑の方々に本を作つてくれたお札に食べさせてあげたい」とお願いして、朝出かける時持つて行った。

お重に一つ持つて行ったので、利用者みんなに分けた。みんな美味しいと言つて喜んでくれた。婆さんが難儀し

て取つて来たお陰で私が感謝された。

春の山菜は沢山あるが、西和賀のワラビは「西ワラビ」の名で各地で評判の山菜だ。季節の早い時のワラビは食卓に乗ると、なんとも言えない新鮮な山の緑と滑らかな粘りで食欲をそそる。幸い今年春が遅くワラビもまだみんな食べはじめないから珍しい食べ物のうちだ。丁度良い時期にみんなに食べさせることが出来てよかった。

前に仙台から娘たちが来た時も少しあって、春の味を喜んで食べていった。都会の人も此処に住んでいる人も旬の食べ物として今のワラビは美味しく喜ばれる。

少年の頃、夢多くお互い詩を書いて友達と交換したとき、誰かが「わらびの柔拳 空を掴まんとす」なんてのがあって、山村の春をうまく表現したもんだと感心したことがあった。

西ワラビよ、何時までも喜んで来る人を呼んでくれ。

親族懇親会

この頃毎年長男の善美が、年老いて行く俺たちの慰めに、兄弟姉妹や子供たちそれに従兄弟も呼んだりして懇親会をやってくれる。今年も正月過ぎから考えて企画し、早くからみんなに五月二十九日に集まるよう呼びかけていた。

去年は相野々温泉「鶴ヶ池」でやったが、今年は金ヶ崎の三貫石温泉だ。民子もふき子も今日は休めないのので二十四、五日に来て行った。だから人数は少なかったが、水沢の秀子が子供二人連れて来たので大賑わいだった。私の妹テイ子の娘秀子が結婚して十年近くになり、あまり会うこともなかったし、その子達とははじめてだ。大きい子は女の子で美咲といい、小学校の三年生だという。小さい方は二歳半で男の子、祐樹ちゃんといって喧しい盛りでみんなの微笑みを沸かした。

盛岡の妹みつ子はこの間心不全と言う病気で来られず、参加者が少なくなった。震災とは関係ないが久巳も少し元気がなくなつた。お互い年をとるとだんだん活気

がなくなることはしょうがないことだ。でも集まれる者が集まって語り合えることは楽しいことだ。

北上の義美の家から孫の健二の車に婆さんと二人乗せてもらって三貫石温泉まで行った。

健二から津波の話聞いて鳥肌が立った。

『地震の日津波の予報を聞いて家に立ち寄り母さんが退避したかを確かめているうちに津波が来てしまった。もうどこへも逃げられず、二階から屋上に上がり、更にアンテナ柱に梯子をかけて波の上に立った。足元をいろいろな物や家が流れて通って行った。波の流れが遅くなり何人か屋根の上で合図しながら波に揺られている人がいた。暗くなつても波は引かないので朝まで梯子の上で過ごした。寒かった。朝になって波が引いたので下に下りて、伯母さんの家に避難した。其処は高台で安全な所、お母さんもみんな無事でいて安心した。』

見えない話だけではなかなか実感は沸かないが、津波と言う果てしない濁流すれすれの中で、一本の棒の上にしがみ付き、暗くて寒い夜を過ごすなんてどんなに怖いこ

42
とか、よくも頑張ったもんだと思った。

親族懇親会の前に危機談話を聞いてしまったが、集まる機会がなければまだ聞けなかった大事な話だった。

一一五三一



芝桜公園

六月一日。清水苑に出席。この日は細内の富雄さんがはじめて参加し、一緒になる。富雄さんは私の叔母の夫で義理の叔父さんだ。清水苑に行ったら、桑島さんや窪田さんが昨日富雄さんのお宅で話し合っていて、通苑を決めて今日から来ることにしたとのこと。まるで電撃作戦みたいだ。でも同じ日になったことはうれしいことだった。

五月十七日にはじめて遠出の散歩で車を押して富雄さんを訪ねた。二時間ばかり話し合ったがそのときは清水苑に行きたい話しなどなかった。長く悠悠館に行っているからこちらに来ることなどないものと思っていた。九十二歳でも元気で私より健康だと思っていたが近寄って見ればそうでもなく、大分年寄りになったなあと思われた。

今日は山内の芝桜公園にドライブすることになり昼前に車三台に分乗して出かけた。此処は平成十七年以前には山内村が管理して観光地としていたが、雑草が多くなり、閉鎖してしまった。それからボランテアなどによ

って復活したようで、今年は公開することになったようだ。三十分くらいで行けるからそんなに遠くない。今日は平日なので参観者は少なかったが休日だと車が混雑するものだった。

公園と名乗っている分、芝桜の咲いている所はとても綺麗だったが、まだ咲いている所が少な過ぎて残念だった。六年ほど前に水沢から来たお客さんを案内して来た時は斜面一杯に咲いていて、目を見張るような美しさに感動したことを覚えている。

芝桜は土地によって、よく育つ所と育たない所があるようで、雑草に負けないでどんどん広がって行くところもある。この公園は手入れが必要な所なようで、なんとかみんなよく育てて、多くの人が楽しめる観光地になってくれればと思う。

燃えるようなピンクの花園がもつともつと大きく輝いてほしいと願う次第だ。

テントの下でテーブルと椅子があつてそこでみんな楽しくお昼を頂いた。お天気がよかったが少し風があつた。小高い丘にも車を運んで貰っていい眺めも見せてもらった。楽しいドライブの一日だった。

道草

六月五日。曇りから晴れ。午後二時半散歩に出た、気温十六度で、押し車にすがり付いて歩くと汗が出た。天気の良いときの散歩はダメで、今まではあまり天気に恵まれず、天気がよくても風があり寒かったが今日は夏のような暖かさだ。毎日歩けば足腰が丈夫になるだろうが、たまにだとすぐに疲れて休みたくなる。それに今日はカメラを持って何か見つけたら写そうと思つての散歩だ。出かけて間もなく道端の黄色く咲いた草花の一群を見つけて早速カメラを向けた。普段なんとも思わず通り過ぎていく草花でも近づいてよく見るととても美しい。風に晒されたり雨に打たれしながらも、誰の力も借りず一人でこんなに綺麗に咲く。この小さな草花のどこにこんな力が隠されているのだろう。そんなことを思いながらカメラを近づいて見ると、小さな花の一つ一つが間違ひなく同じように組み立てられている。自然の芸術なのか、草花たちの天性なのか、ただの小道のすぐそばにこんな美しいものが無数に育っている。

こんな花の中にポチンポチンと直径五センチくらいの白いぼんぼりがある。これはタンポポの種だ。この間まで黄色い綺麗な花が実を結んだのだろう。間もなく風に乗って遠くまで飛んで、来年そこで芽を出すのだろう。草花たちは自分の仲間や子孫の繁栄のために素晴らしい工夫をしているものだ。

暫く歩いて一休みすると、街路樹地帯に植えて何年もなる、ハナミズキに今年やつと小さな花がぼちぼちと花が咲いていた。これも珍しいから、下の方に咲いた花に近づいてカメラに収めた。木によって白い花と少しピンク色とがあるようだ。花びらが四枚で葉の間のあちこちにほんの少しだけ見える。この木の花も小ぶりで美しい。来年はもっと多く咲くのか、目立つほどたくさん咲いたら綺麗だろうと思った。

数日前に道下の土手に生えて、葉が霜焼けしていたイタドリは、その後太くなり葉も沢山茂って立派な群生になつていた。

散歩が道草になつて足のためにはならなかったが、目の保養にはなつたか、今日の散歩。

やつと来た初夏

六月七日。晴れ。やつと気候も平常になったようだ。婆さんは畑仕事や草取りなどであちこちが痛いと言いつつ働いている。俺はセツコキになりきってしまった。もったいないようなお天気の日も、酸素を鼻につけてゴロゴロ寝たり起きたり、テレビを見たり、本を読んだり。そうしているうちに、やや疲れて横になって休んだりで、まったく年寄りの生活態度になってしまった。こうしてパソコンに向かうときもあるが、それも疲れを覚えたり、パソコンが思うように動いてくれなかったりで、日中の大半の時間はなんということもなく過ごしてしまう。今日ははじめて夏のような気温で、居間の戸を開けて外気を取り込みながら涼んでいられる。

前述のように年寄り生活に入ってしまったが、残された時間をどうでもいいようには過ごしたくない。出来れば、本を見ても、テレビを見ても自分で納得出来る様であればいいと思う。

一日一日があまり空虚でないように過ごしたい。

物書きでもない俺が、いつの間にか書くことに興味を持つようになった。小説は無限の想像力を働かせて読む人の心を捉えて離さない。現実にはないことを、どこにでもあることのように人の心を操ることが出来るのだからたまらない。どうしてこんなことが書けるのか、しかも何十編書いても同じことを書かず、別な面白みを描いて行く力って大したものだ。

ぼんやりして居たり、うずくまって寝て居たり、居間を占領していつもこうして居る俺が、やがて居なくなつて家族や近所の人の思い出になるのも、そう遠くはないだろう。今の幸せを大事に余りむなしくない日を過ごしたい。なんて欲深なことを思ったりする。

この頃は婆さんも物忘れが目立つようになったし、俺もそうだ。ボケ防止はお互い気をつけているが、それでも老いには適わない。

初夏の季節は風もさわやかで、新緑。汗も出ないでいい季節だ。今日の独り言はこれで終わり。

面倒を見合おう暮らし

もう十日以上の前のことだが、中村の菊池百合子さんの所へ自分史をある人に届けて貰いたくて訪ねたことがあった。百合子さんの所までは一キロメートル以上あるので、押し車を押して行くのは楽ではなかった。届きたい人はまだ一キロも先なのでとても行けないので百合子さんに頼みに行つたのだ。足が健康であれば歩くことも苦にならないだろうし、車の運転の出来るときは何の苦にもならないが、歩くことが一番苦手になつてしまつた今は、誰かに依存しないと何も出来ない。

百合子さんとの話の中で、昨年連れの婆さんを亡くした昭九郎さんは、ずっと婆さん任せで暮らしてきた。一人になつてしまつたら、食べることも片付けることも何も出来ない。いちいち誰かにやつて貰わないとダメだ。

「明後日は医者に行く日だよ」と教えても、また次の日「明日医者に行く日だからな」と言わないとダメな人よ、と言う。こんなにも近所の人のことを心配することにも感心するが、こんな豊かな思いやりに満ちた村の暮らし

があることも微笑ましく思った。

俺の住んでいる大渡りでも、幸助さんの家と富子さんの家は本家と別家でどちらも我が家のように出入りして仲睦まじい。本家の婆さんの京子さんは年若くして突然亡くなつたが、残された夫の幸助さんは余り悲観もせずひたすらに家業の百姓に一生懸命働く。そういうなかでも、分家の富子さんは、本家の京子さんの意思をついで、まだ若い本家の嫁さんを助けて家業を手伝つたり集まつてくる近所の人たちに、お茶の振る舞いなど我が家同然の働きをする。

これもまたなくしたくない田舎の温かい、親しみの深い暮らしぶりで、いつまでも保ち続けたい風習だと思ふ。村の暮らしにはこんな温かい、壊しがたい人情にあふれる暮らしがたくさんあつて、生産性とか経済性では割り切れぬいいものがある。人間の生活の原点がここにあるという気がする。

政治は生き物というが

平成二十一年八月三十日。衆議院の総選挙で圧倒的多数の支持を得て、過半数に近い議席を獲得した民主党。五十年以上も続いた自民党主導の政治を変えて新しい政治局面を開こうとして選んだのだ。

大資本と癒着した自民党政治は国民生活に格差が大きく現れてきた。世論の反感が出てきて、国民は民主党を選んだ。しかし民主党は自民党の分身で、政治意識にそう変わらないことは国民も判っていたことだ。

九月十六日、鳩山由紀夫内閣ができて、沖縄の米軍基地を沖縄県外に移しことや、予算を国民の前で仕分け作業するとか、今までやれなかったことに取り組んだ。しかし沖縄の基地問題は米国と折り合わず、実現不可能となり、翌二十二年六月二日退陣となってしまった。国民から待望されて生まれた鳩山内閣は僅か八ヶ月余で終わり、変わって菅直人内閣が出来た。六月八日でした。ところが、民主党の生みの親ともいわれる小沢一郎さんとぎくしゃくした関係になり、政治日程がうまく進ま

なくなつた。そのうち七月十一日の参議院選挙に大敗を来たしてしまつた。

前年八月、衆議院選挙で大勝利した民主党を僅か十ヶ月で窮地に陥れてしまふという選挙民の意志とは何なのか。政治は生き物でこんなにも早く化けるのかと思わざるを得ない。

この後参議院の議席は野党が多くなりいわゆる捻じれ国会となり、度ごとに衆議院と参議院の議決が異なり、議案議決が進まなくなる。

そんな中で尖閣諸島に於いて日本自衛艦へ中国の間船の衝突事件や南北朝鮮の戦乱があり、国際間でも不穏な事態が起きた。これらはすべて菅内閣の政策を進めるものにはつながらなかつた。

そして今年三月十一日の東日本大震災とそれに伴う福島第一原発の事故が起こり、避難民が絶望の危機に瀕した。そしてそれを救う手立ても進まず、各政党は一致団結して国難に当たることはせず、国会はただ責任のなすりあいだけで、困り果てた避難民は怒りと困惑するのみだ。

生き物の政治よ、千年に一度と言われるこの国難に精

48
一杯の良識を働かして絶望困惑の国民を救え。

六十。



花木を見つめて

六月十一日。午後雨が止んで陽が照ってきたので庭の木や花を少し詳しく見つめてみた。

白いドウタンはもうしっかり散ってしまい、今は赤いドウタンが咲いている。このドウタンは濃縮したような赤さで花びらは十ミリほどで四枚の花びらの中に小さいオシベとメシベが抱き合っているようだ。幅六センチ長さ十センチほどの細長い葉とともに下を向いて小さいラッパのように咲いている。木の丈はなかなか伸びないが、高山植物の一種で可憐な花はとも愛らしい。その隣のシャクナゲはドウタンより薄い赤の花で、ツツジの花より少し大きく沢山密集して咲いている。冬の間、雪にやられて背は高くなれない。でも今年、沢山咲いてうれしい。またその隣のテマリも、白い、いかにも手まりのように連なって咲いている。直径十五センチくらいの六枚の花びらが、規則正しくくっついて丸い形を作り、沢山咲くので期間中に枝が裂けたりする。ブルーベリーは終わったが、これは白くてドウタンより小

さい可愛い花で下を向いる。よく見ると花びらが二枚のようで、ほんとに小さく抱き合っているようだ。

去年あたり婆さんが買って来て植えた仙台ハギは繁殖力が旺盛で今盛んに咲いている。黄色い花で、茎の先に小さい花びらが群がって付いている。よく見ると一枚の羽が両方に開いて沢山付いているようだ。

私は植物学者のように表現出来ないが、花木は種類によって当たり前だがそれぞれ違った形や色でそれぞれによって雑種化して変わったものになっていくかも知れないが、今の姿を保つ為には人間が守らなくてはならないでしょう。

花木は時間を惜しまずよく見ると、それぞれがとても美しい。あまりよく整理していなくても、自然と調和して、人の目や心を癒してくれる有難い存在だ。

この頃の私の医療

平成八年七月頃から沢内協立診療所へ主に通うようになった。その前は、腰の痛みひどい時は横手の湯浅外科医院に行っていた。腰の痛みは背骨が曲がって神経を圧迫するからで、手術する治療法もあるが、老齡の人はみんな成功するとは限らないので、注射と電気治療などでうまく付き合っていくよりほかはない、と言われた。飲み薬も頂いて、一年以上も月二回くらい通った。それから前立腺検査で精密検査を受けるように言われて平鹿病院に一年くらい通って検査したり治療したりした。しかし年寄りの痛みを良くする医者はそのなにいもない。前立腺は癌だと言われたので慎重に治療してもらい、さらに進行しないと言われた。肺の治療も安定したようだった。西和賀管内の医者の治療うけることにした。老齡化するとちよこちよこ医者に行きたくなる。だから掛かりつけの医師と言うものがあつた方がいい。それから西和賀町内の医者で治療を受けた場合、一ヶ月千五百円以上の費用は町が補助することになっている。そし

て町外で掛かった費用には補助しないことになっているので、専門の医者でなければならぬ病気を除いて、私たちのような年寄り病の者は町内の医者に掛かった方が助かるし、町でも医療支出が少なくなるようだ。

何時も思うことだが、老人医療は全国的に増えていき、医療費は大きくなると報ぜられている。もう少しの間は老人人口が増えるのを我慢しなければならぬだろう。間もなく老人人口は減って行き、老人医療費は少なくなっていくと思うが、老人医療を受け持つ、いわゆる町医者という医者たちは、患者の七、八割は老人で、患者の機嫌を損ねないように適当に合槌を打って、害にならないような薬を出して、患者の話をよく聞いたふりをして対応を続けて行く（言い方がひど過ぎるかな）。こういうやり方では医療費は減らないだろう。でもまた老人たちは自分の話を聞いて貰えるだけで半分くらい気が楽になることも事実だ。

日本の医療にはいい面と悪い面が同居していて、これを根本的に洗い直すことも面倒だと思える。やはりこうゆう医療がまだまだ続くのかな。

田中先生と私

沢内診療所に通い始めて三年くらいになる。医者も様々な思想を持って仕事をしている。私は此処の田中生と話しているうちに、やや気が合うところがあつて、今はこの先生をかかりつけ医に決めた。

最初の頃先生は私に、人は健康を保つ為は何よりも大事なことは食べ物をよく工夫して食べることだ、病氣だつて医者や薬よりも食べ物で治せることが沢山あると言つて食べもの療法の本を貸してくれたことがあつた。この提案は素極道理だと思つた。

人間は科学の進歩に頼つて、薬や医療こそ一番大事だと思ふようになった。しかし自然に基づく食べものを良く理解して、食べもので健康を保つことをもつと大事に考えることが必要だと思われる。

こんな話もあつたりして、診察の合間にこの頃思うことなどもちよつぱり話す事もある。私の書いた自分史や独り言など見せたりすると、意見を述べたり、見せたい人も居るからもつとほしいとかということもある。次第

に気安くなり、この頃は私の老体を気遣つて二週間毎に往診してくれる。

また見せたい本があると言つて「機関銃を捜しに来た男」という盛岡在住の大宮純と言う人の書いた分厚い小説とエッセイの本を提供してくれた。内容は民主主義文学協会という、いわば独占資本主義による良民搾取で権力支配と戦つたひとたちのことや、とくに蟹工船について多くの人たちが議論し、今の就職難、不正規雇用などにどう対応するか、などということが小説として、またはエッセイとしてよく書いてあつた。まだ全部は読んでいないが、面白くて、今の時代を考えさせられるものようだ。

田中先生も医師として仕事をしながら、社会の矛盾との戦いもあつたようだし、いずれ恵まれない庶民のよりよい幸せを願つて日常活動をしているという点で、私はいい人ともめぐり合えたと思つている。長くない私の人生をより豊かに生きる為に、良い関係であることを願うものです。

原発反対運動広がる

今年三月の東日本大震災により、福島第一原発の事故が発生、その後原発特有の目に見えない、しかも人間や自然をジワジワと犯す放射能が荒れ狂ってきた。

原発の安全神話は崩れ、住民は住家を失って右往左往しなければならなくなった。

それでも六月七日の新成長戦略実現会議で、海江田万里経済産業大臣は、「原発の再起動に全力を挙げる」と言明したと伝えられた。

六月十二、十三日に行われたイタリアの国民投票は、投票率54・79%で94・05%という圧倒的多数が原発反対投票をした、と報ぜられた。全世界が注目することになったイタリアだが、このような全国投票で半分の投票率を得ることは滅多にないことだ。国民の原発に対する関心が高いことを示している訳だ。

福島原発事故は、安い電力とは引き換えられない全世界の関心となって、強いうねりを起こしている。

わが国の国会でも、原発廃止論が出できたが、このよ

うな大事件に直面しているにも関わらず、世界の世論に比べてまだ低調であり、しかも海江田大臣は原発再起動論を唱えるなど、実に遺憾である。

災害は復旧の目処が立たない所と、復興の息吹を燃やしている所もあるが、原発事故はまだこれから何が起こるか判らない。不気味な放射能がどういふ暴れ方をするか、固唾をのんで不安に慄いている状況だ。

東京電力の職員の放射能被害、野菜や牛乳汚染、子供が外で遊べないなど、この国にとつてただ事でない状況は、直ちに原発をやめて、新鮮な自然の取り戻しに舵をきらなくてはならない。

イタリアの国民投票は今、次の重大国際世論の表れであり、次世代の安全安心の為、脱原発の運動を緊急の課題として、日本こそその先頭に立つべきものと確信し、その広がりを見守り待たせて止みません。

将棋について

将棋遊びは子供のとき覚えた。面白い遊びとして、何年もやらないでいても忘れない。将棋は何百人も専門家が居て、月刊雑誌のほか沢山の本も出ている。

僅か八十センチ×九十センチの中の八十一区画の中で互いに駒を操作し、お互いの知恵で駒をうごかしながら勝負を決めるゲームだが、今まで何十年やっても絶対勝てるという方法はないようで、名人戦は何年もやっている。

此処二、三年は度々友達と遊び、将棋の本に出でくる問題集を一人で解いてみたりするが、やったことをすぐ忘れる。

最近の子供たちのブームになっているようだ。中国では小学校の教科として実施しているとか、子供の知恵を磨く為に取り上げられ、日本でも中国でも将棋力は大人の専門家にも負けない力が備わってきた。将棋はゲームとしてだけではなく、先を読む力は化学の発展に役立つと考えられている。

年をとってからではなかなか能力は進まないが、子供の頃からの鍛錬は社会の発展に寄与できると認識されている。

子供の頃から将棋で、攻めること、守ることの中で先見の明とか決断力を養い、やがて世の中を変える力となつてほしい。

私はこの頃は何かしなないことが多いから将棋の本の次の一手と言う問題を考えることが度々ある。飽きないで考え込むことも嫌でない。答えのある場合は答えを見ってしまうこともあるが、頑張つて自分の頭で考えて答えを出したときはとても嬉しい。また解いたと思つても正解表見ると、もつと手短かに解いている事もあつて、不正解だつたと思うこともある。

また、どっこいどっこいの相手とへボ将棋をやる時は、勝つても負けても面白い。勿論何回やっても上達することもないが、それでも面白くてまたやろうと言つて分かる。

将棋は重要なゲームであると共に、私にとっては何回やっても楽しい遊びでもある。

ホーの花とアカシヤの花

くる名のある花で愛らしい。
六、一九

忙しく暮らしてしまったせいか、ぼんやり暮らしてしまつたせいか、ホーの木の花なんて初めて見たような気がする。子供の頃からホーの木の葉は広くて長い容積の広いものだから、よくあんこ餅やおこわなどを包んでもらつて食べたことは覚えている。それから田植え終わりのヨテ田植えには神様にお供えするときもホーの葉を使ったような気がする。また秋になつて落ちている葉を拾つてきて包み紙の代用に使つたものだ。だから古くからホーの木には馴染み深いのだが花のことは良く覚えていない。今年をあちこちにホーの花が見える。白くて大きい花だが気をつけて見ないと判らないほど少ない。そしてどの木にも咲いているようでもない。この年になつてやつとホーの木の花を知つた。ボンヤリ暮らしたつた。

それから今はアカシヤの花も咲き出した。白い花でブドウのように連なつて咲いていて、もう少し経つと並木の通りは初夏を彩る道となる。アカシヤの花は歌に出て

頼ることと尊敬すること

俺は年を取るに従ってばあさんに頼っている。洗濯は全部、下着をはじめ衣類の在りかも一々聞かないとわからない。医者やお風呂の料金もばあさん任せで、俺は人造人間みたいなものになってしまった。だからばあさんが居ないと何も出来ない。そういうわけで俺にとつてばあさんは実に有難い存在だ。でも日常は空気みたいなもので、居ないときはとても困るが、いつもそれほど感謝しているわけでもない。そして不満を言われるわけでもない。

それほど頼りにして居ないと困るのに、尊敬しているかと自分の心に聞いて見ると、「そうでもなさそうだなあ」と言う。今のばあさんは俺より絶対優位なわけだが、どこかで俺はそれを認めまいとするところがあるようだ。男性優位を誇示するわけでもないが、古いしきたりがどこかに残っているかもしれない。

全く頼っているのに、尊敬にはまだ足りない。直さなければならぬ我が儘があるようだ。 六 一九



終生の友人

終生の友人と言えるかどうかは判らないが、私が昭和十九年秋に日本国軍隊として中国にわたり、一年四ヶ月同じように暮らした仲間がいる。戦争と言う人殺しの真っ只中で過ごしてきた仲間なので終生忘れられない間柄だ。戦後の荒廢地に戻ってきて、それぞれの地域で再建に働いて四十年経ってやっと隊友会が出来た。あれから三十四年、毎年一回続けてきた。それは小原四郎さんと言う真面目で、この会の意義を守って行こうと本気で取り組んでくれた人が居からだ。

二十五回。平成十四年当たりからは出席者は五人になり、四人になり、いまは三人になってしまった。それでもやれるだけの気力と元氣あるうちはやろうとしている。八十七歳になっても、会って語ろうと言う気はどこから出てくるのだろうか。

私の記憶は正確でないかもしれないが、迫撃十六大隊は、岩手、青森 秋田 山形 愛知の五県から五十人ずつ二百五十人の初年兵が中国で作戦中の本隊に向かわ

された。南京で爆撃された時は確かに愛知県の間も居たようだったが、大同ではどうだったかは判らない。

私たちの隊友会は二、三年後に青森、秋田も加わったがそれでも第四回に三十二人で最高の参加者だった。

隊友会と言ってもそれぞれ都合もあったり、必ず行きたいとも思わなかったり、体調も悪かったりで来られぬ方もあったでしょう。それにしても小原さんは几帳面に案内や会計、次回にはきちんと報告書も作ってくれろという努力をずっと続けてくれたことは有難いことで、だからこそ今まで続いているわけだ。

和賀町の石川さんも体の続く限り仲間になってくれた。一週間ほど前に電話してみたなら嫁さんが出て、田植え頃から花巻の施設に行って寝たきりになってしまったというのでした。私は石川さんとは距離的にも近かったのでよく話しに行ったり、お世話にもなった。会話も出来ないかと思う。私自身もほとんど外出できない体になってしまったから会いにも行けない。年よりはこうなって散って行くのかなと思ったりして悲しくなる。

赤沢さん 小原さん、石川さんは大同の待機中の宿舎生活では目の届くところで一緒に居たが、上海で部隊編

成となつてからは離れ離れになった。それから終戦になつてからは赤沢さんとは度々会つて、帰つたら何をしようかなんて二人で話し合つたことがあつた。帰宅してから、まだ帰らぬ兄の消息を調べる為、赤沢さん宅に泊めてもらつたりして日赤病院などを探したことがあつた。

小原さんについては戦後湯田村出身の高橋久次郎さんが花巻中学の校長時代に生徒として知つていて、その後県庁の地方課に勤めていることも久次郎先生から聞いて知つた。

その後、小原さんと赤沢さんが協力し合つて同年兵の集まり隊友会を開いてくれた。とても有難かつたし、よろこんで参加した。帰りたいが帰れない所で様々な体験をしてきた仲間と奇しくも会えたのだから特別な喜びだつた。

それから十五年経つて、やつとみんなで中国の戦跡を訪ねることが出来た。たった八人だったが、五十年ぶりで死を賭して、歩き、過ごした中国の地に行った。何もかもかも変わり果ててしまつたが確かに復興していた。私たちの日本と比べれば総体的には劣るが都市の復興は目覚ましいと思つた。農村に入つてみると貧困はまだま

だ続いているようだつた。なんとかこの農村も早く幸せになつてほしいと思つた。

この旅行で五十年前の自分たちの反省もいろいろさせられたし、勢いよく建設に向かつていると感じた。

生きていてよかつたと思つた。共に死線を越えてきた仲間と、侵略戦争の地で其処に住む人々と接することもできて、言わず語らずの中でもお互いの尊厳と言うものを思つた。

小原さん 赤沢さん、石川さんと言う友人はそれぞれ同じではないと思うが、隊友会を通じて、私はよその国のこと、人間の尊厳、友達の絆など大事にしようという思いを共にした。とてもいい友達と会えたことを幸せだと思つていきたいです。

一一六二二



家族の絆

一つの家に家族だけ暮らし始めたのは何時頃からだろう。大昔は大家族で、何十人も一つの家で暮らしているのが古代の家の風景だったように思う。

私たちが見てきたのは夫婦子供、それにお爺さんお婆さんが一つの単位の家というものを形成していた。

日本は家族主義の暮らしで、文明国は親子が別々の家で暮らすものだと思っていたが、文明国だって子供が一人前になるまでは傍に置いて可愛がつて育てただろうし、一生自分の子供にはどこの国の人も特別の愛情を持って暮らしものだろ。

社会の末端の単位は家族で暮らす個々の家だろう。そしてその家族は厚い血縁でつながっていて、そこには堅い絆があり、お互いが我が事のように思いあつて暮らし居る。だからどこの国でも家族の絆は人間としてもつとも大切にされるべきものだと思う。

三月十一日の東日本大震災で、青森県から茨城千葉県あたりまでの太平洋沿岸地方の人たちが、瞬時にして何

千というこの大切な絆をずたずたに切られてしまった。二度とこの絆をつなぎ合わせる事が出来ない、言葉では言い表せぬ悲しい惨憺たる悲劇を招いた。

誰にも抗議も出来ない、償いも出来ない災害に出会ってしまった。その上前代未聞の人災と言いたい原発事故も重なってしまった。これは放射能という汚染されたらどうにもならない怖い細菌のようなもので、人間も植物も動物も空気も海もジワジワと蝕まれるのだ。

私どもの時代に嘗てない大きな災難に遭遇した。二度とこのような災難がこないような手立てを講じなければならぬ。

先ず原発のような怖くて防ぎ切れないものは計画的に無くして代替の電力を作っていく。地震や津波について、少しは予知出来るので、さらに研究を深めて避難が早くできるように努める、避難訓練はなお充実して皆が非難出来るよう工夫する。そしてなによりも津波などは予報より大きく来るものと心得、より高く遠くに避難することを実際に訓練しておくこと、などをお願いしたい。大切な家族の絆を守り、二度とこんな災害に遭わぬため取り組もう。

嬉しい悩み

六月二十四日。仙台の娘夫婦が来てた。私が清水苑から四時半頃帰ったら、息子の文生も珍しく早く帰っていて、もう宴会が始まっていた。聞けば午後早く着いて、オセンに行き材料を買って来て、娘夫婦が料理を作ったらしい。娘の民子は一か月前にも来たが、夫の正夫さんは暫くぶりだ。この夫婦は何時もユーモアのある会話で、結婚以来四十年くらいか、長女と長男の二人の子供と平和に暮らして居るから安心している。

正夫さんは鹿児島県の生まれで家に初めて来た頃は私たちの話はさっぱりわからなかったようだ。しかし今では何でも判るらしい。「ンダンダ」なんて盛んにしゃべる。冗談も面白い。地震当時タバコを買って来たら、かあさんが「それいくらしたの」「四千二百円」「エーそんなにしたの」、「その時のかあさんの顔は地震より怖かった」なんてことも聞いた。また民子が台所に居て「お父さん一緒に遊ぼうよ」なんて呼んで二人で料理を作ったりする。面白い夫婦だ。

民子のパッチワーク仲間が関東方面に沢山いて、今度の震災で仙台は酷いと聞き、心こもる義援金や贈り物をいっぱい届けてくれたそうだ。お金の額も多くておどろいたり、申し訳なく感じたり、とてもとてもこのご温情はそのままだ頂けないと思った。

だって、家を流されたり、家族を失ったりして本当に丸裸になった人たちが大勢いる中で、私たちは何も失っていない。だからそういう人たちと比べたら被災者なんて言えない。心からのお見舞いを送ってくれた皆さんのお気持ちは大変有難く思ったが、とてもそのご好意には甘えられないという気持ちも起こってきた、という。

それから何日もかかって、一人ひとりにお手紙を書き、応分と思われる額の他は、「私たちより困っている方がたくさんいらっしゃるから、その方たちに分けて上げて下さい」と言ってお返しした、とのことだ。心のこもったお見舞いをしてくれる仲間が居ることも有難いし、お礼文を書いて一部を返してやったことも貧乏人のくせに、いいことをしたもんだと思った。

嬉しい悩みのうちを聞いて喝采した。

新しい友達

六月二十九日 清水苑から帰ると、盛岡の小説家で本名伊藤孝、ペンネーム大宮純という人から分厚い本が届いていた。この人は一ヶ月程前、掛かり付けのお医者さん田中先生を通じて私の書いた本をほしいと言われていた。前作の「俺らの一生」を送ったところ、面白くて感動し、勉強になることも沢山あったという。はがきが来て、「機関銃を捜しに来た男」という小説とエッセイの本を贈ってくれた。それからお札の手紙に添えて私のエッセイも同封したら、今度は「夜空を駆ける」という大冊の初版の本を送ってくれた。やはり小説とエッセイで、同封したのはがきには、第三集や四集が期待されると書いてあった。

苦勞しながら県立第一盛岡高校定時制を卒業して、日本民主主義文学会員となり、岩手県保険医協会の設立に努力し、その協会の事務局長も勤め、病気で退職し、今は文筆活動に活躍しているようだ。

前に「田中先生と私」に少し書いたが、彼は民主主義

文学者として、昔の文学「蟹工船」など、大資本の横暴に戦う労働者にエールを送る作品が多い。大衆に元気を与える読み物も沢山書いているようで、これからじっくり読みたいと思っている。

私も自分の心や姿を映したエッセイを書きたいと思つて、たつぷりある時間を使つて見たもの聞いたものを心に感じた通り書いているが、それはあまり元気を与えることにはつながらないようだ。やはりものを書くと言ふことはそれなりの力が必要なのだろう。

新しい友達なんて書いてしまったが、まだ会つたこともないのに、力強い文章を書く人に快い思いを抱いて言つてしまった。文筆で力強く訴えることで世の中が変わつて行く。そう願つて大宮先生とこれからもっと親しくなりたいと思う。

今日の雑感

七月二日。晴れ。今年も六月は一昨日で終わり半年の年月を暮らした。七月は暑い夏というイメージどおり、今日は晴れた暑い日となった。まだ東北地方は梅雨時で、暑さは全域だが、驟雨のある所もあると予報されている。だから夕方までには俄か雨がやってくるかもしれない。朝から蒸す暑い時が続いた。

庭の花の赤いシヤクヤクは終わり。もう終わり近い白いシヤクヤクが残っている。ネギボーズは七十センチくらいの細い幹の上に直径十七センチくらいの薄ピンクの花が六個見られる。このネギボーズは新しく植えたあたりは花も大きくて見応えがあったものだが、何年もそのまま咲かせていれば小さくなってしまふ。最近植えたマリーゴールドは黄色い花が小さく咲いている。まだ茎や葉が弱いままだから、ブルーベリーは数日か前に花が散って小さい実がついていた。背が低い、なんとかききようも薄紫の可愛い花を沢山つけている。

近くの野菜畑を覗けば、ばあさんが一人で頑張って植えたミニトマトの「愛子」が少し小さく実をつけはじめた。茄子や馬鈴薯も花が咲き出した。ばあさんの働きが今年も実のりはじめた。やはり我が家のばあさんは一等賞だ。

蒸す暑い居間に戻って新聞を見た。今日の岩手日報の声欄には私も感ずることが幾つか書かれていた。

原発問題については、安全であると確信があるなら、その根拠に基づいて納得の行く説明をすべきだし、そうでないなら無責任に推進すべきではない。原発にもリスクがある。科学技術のリスクにはみんなで目をつぶり、経済性の恩恵を受けてきた。その恩恵とリスクゼロは両立しないのは明らかだ。その前提に立って今後の原発のあり方を広く論議すべきだ、と主張していた。同感だと思っただ。

もう一つ、四十八歳の主婦は、二十代の頃新聞で「昭和一桁は親を捨てられない最後の世代、子供に捨てられる最初の世代」というのを読んでいた。昭和一桁の最後の両親をもつ私はその言葉が忘れられなかった。

『三年前、病気で手術をし、余命が少ないといわれた父。

私は最後の親孝行と思い今の主人に結婚を申し込み、花嫁姿を父にみせた。その後私たちは幸せに暮らし、父が教えてくれた沢山の宝物を、私なりにしっかりと伝えて行こうと思っています。』と述べられていた。私は、核家族で親子の縁が薄くなるという悲しみを乗り越えられたことを喜んだ次第です。

また、この欄には菅総理に決断を望む声もあった。

『最高権力者というものはワンマンで、決断とは孤独の選択ということで、究極的には責任を携えた独断でなければならぬ。そうでなければ最悪の事態を想定した意見を部下は口に出来なくなる。』

『はたして菅総理。その胸中には、在任中にこのような震災が起きたことを運が悪いと嘆く気持ちがあるやもしれない。しかし、あなたの評価は決定した。あとは最後の孤独な決断をするだけだ。誰よりも運が悪かったのは、最悪の宰相の下、最悪の事態に見舞われた被災者なのだから。』というのがあった。

少し難しい表現だが、これも今の国民はみんな思っていることだ。判っていることだが菅総理は一番いい時期を見計らっているかもしれない。

前に私は「政治は生き物というが」と題して私の思いを書いたことがあったが、菅総理だけでなく政治家はみんな自分の都合のよいとき使う権力の道具として政治を弄んでいるとすれば、国民は大変な迷惑をすることになる。

民主主義の精神に立ち返って、困り果てている国民の幸せのための政治に取り組んでほしいものである。



古物化した生活用具の保管

七月三日。午前八時半頃。細内の康広さんから電話があつて「今日十時より岩手大学の教授及び学生が来て古物化した生活用具について学習する会を行うので、都合がよければ来て見てくれ」という連絡があり、早恵子が送ってくれるというので行つてみた。

これについては数年前から岩手大学の調査報告書が私のところにも届けられていたので、これも貴重な歴史作りだと思つて賛意を持っていた。子供るとき実際に使つて、わらびの根から澱粉粉を作るとき用いた道具など、私も此処へ引越して来るとき持っていたものだったが、その後保管に困つて捨ててしまった。しかし康広さんは古物を残して置くことを心がけていたし、それに新しい家を建てても、古い家はそのまま残していたので保管することも出来た。

今の若い人たちは、藁や木の皮で編んだケラなどを見てもこれは何に使つたものか判らないだろう。当時は雨風をしのぎながら仕事をした大切な雨具であることな

ど余ほどよく説明しなければ判らない。このような昔の生活用具を康広さんは百数十点も保管していた。

小さいものは取つて置けるが、大きい機織道具など、櫛のような長くて重いものはしまつて置くのに大変だ。しかし長い雪の深いこの地で暮らすにはなくてはならない道具だった。だからこのような古い生活用具を保管して置けば、少なくとも百年以上の生活を解明して行くことが出来るというわけだ。私たちは今のことを十年経てば忘れるし、説明も出来なくなる。だから記録して置くこと、実物をしまつて置くことは歴史を伝え、より正確に判り合えることにもなる。その時代に生きた人の大切な努めでもある。

康広さんは歴史のことも興味を持ち、古物も大事なものとしてきた。私も歴史とか、今の暮らしの記録で歴史を作る人になろうと思つているので、今日は康広さんに招かれて、改めて今を生きることの意義を感じた。

あれよ、あれ

ばあさんとの会話でこの頃よく出てくる言葉だ。

物の名前や人の名前がなかなか出てこないときに口から自然に出てくる言葉だ。年とともに思い出せないことが多くなる。物忘れと同じことだろうが、思い出せないということも苛立ちを感ずるものだ。

ばあさんと一緒に話して何回か、「あれよ、あれ」「うん、あれがあ」とやっているうちに思い出すこともあれば、とうとう思い出せないこともある。こんなときは脳味噌が休んでいるときなのか、脳味噌も俺たちの体の一部だから同じように疲れているのか。

八十数年も生きていけば沢山の出来事や学んだこともあるが、それらはみんな頭の中にあるわけがない。だから忘れるということは頭の調節なのかも知れない。しかし同じ人間でも俺たちと余り違う年なのにしつかりしている人も居る。同年代同一でもなさそうだ。若くても物忘れの進んでいる人も居る。脳味噌の鍛錬も人によって違うのか。俺は脳味噌の疲れで思い出せないの

だと思いたい。

この頃震災があつてからテレビのアナウンサーも何時も見慣れた人でない人が毎日変わって出てくる。それもなんとなく頭がかき乱されているようだ。またこの頃テレビも地デジ化などと言う工事もあつて、今まで見ていた番組を探すのが判らなくなり、進化したのが俺たちにはかえって不便になった。

「あれよ、あれ」「うん、あれがあ」が、テレビに出てくる歌手や俳優を見るたび、ばあさんとの会話が多くと多く続くのだろう。



新聞で知恵を磨く

暇な人は新聞を隅から隅まで読むというのを聞いたことがある。俺などは自分の興味のある所、仕事の足しになることなどしか読まなかった。また見出しの大きい文字だけを見て新聞を読んだつもりにしてきた。

二、三年前からは政治面、県内の慶弔欄などをよく見た。そして最近は声欄とか判りやすい論壇とか、文芸、生活面のようなところを見るようにしている。

そうすると、なんとなく広く柔らかい感じがする。俺たちと同じ目線で世の中を見たり、感じ取ったりする人の居ることを感じる。

七月五日の生活欄には、野菜不足でベランダで野菜を作り、野菜の育ちをみて喜びや元気を貰ったとか、震災復興のこと、原発のこと、町内会のことなど、多面に意見が述べられていて、周りの生活の様子が生き生きと見えてくる。

こんなこともあった。「縄文に学ぶ」という総合地域環境学研究所準教授、内山純蔵さんの説。

東日本大震災から二ヶ月ほど経った頃、松島湾にある貝塚遺跡を調べたところ、それらはみな無事であったという。

これらの貝塚は地図上、海に面しているように見えるが、実際は標高15メートルから30メートルの高台にあり、みな無事だったそうだ。

縄文時代の集落の大半は海と山の接点にあり、遺跡にも津波の被害は見当たらないという。

それは縄文人が防災に考慮していたというよりは、狩猟、漁猟、木の实拾いなど、より多くの「仕事場」に行き易い場所に住む、いわば「職住分離」につながったと準教授はみる。

縄文人が自然を「広く薄く」利用していたのに対して、弥生時代以降の集落遺跡を発掘すると、洪水や津波など大災害の跡がしばしば見つかる。しかも繰り返し害を被っている様子がわかる。

農耕が始まると交易拠点など特定の場所に多大の投資をして、自然を「狭く濃く」利用。生活と仕事場が一致して生産性は上がったが災害には弱くなった。

さて今回の震災で、被災地の人々は元の場所に住みた

いと考えるのは当然だが、悲劇を繰り返さないような地域デザインを考えたい。

縄文人に習って自然を「広く薄く」利用する思想を取り込むべきだ、と内山氏。

住居は高台に、そこから仕事に通う「職住分離」の町づくりは人名も家財も守れるだろう。

という事で、縄文遺跡からその変わり方を見ることによつて貴重な文化や思想を伺い知る事が出来る。

こういうことを、新聞を見て知っている人も沢山居ることだろうが、俺などははじめて新聞様の知恵に触れた思いがする。

多くの人たちが新聞を見て、その日その日の計画を立てたり、方向を予測したりして生活に役立てているであろう。そういうふうには新聞は活用されているから、必ず朝早く配達されるわけだし、多くの人たちは新聞は生活必需品と心得ているだろう。

「新聞で知恵を磨く」と書いたが、俺は年寄りで、それに津波の来る所でないところに住んでいる。読んでも読まなくてもいいようなものだが、優れた知恵は覚えておくことが大事に見えてきた。



いろいろあつた今日

七月六日。晴れ。六時半に起きた。晴天のようだがまだかんかん照りでもない。久しぶりに散歩に出た。この頃の散歩は遠くには行かず、家の前の歩道を行ったり来たり一キロくらいの区間を歩いて、途中休んだりしながら五十分間。

路面に綿のような白い糸のようなものが沢山落ちていた。丁度タンポポの花のようだったが、タンポポは大分前に終わったのになんだろうと思つてよく見ると、細い木の枝についていた。道路のそばには大分大きい唐檜とアカシヤが立っている。そうしてみると、これはアカシヤの実なんだと思つた。アカシヤの実は今まで気がつかなかったが、こういう実なんだと気がついた。何十年も此処を歩いていて、どうして今まで判らなかつたのだろう。

八時、新聞の慶弔欄に目を移したら、大沓越後谷幹雄七十六歳と言うのが見えた。「オヤー、越後谷さんが亡くなつたのか。」死亡日は四日とある。そうすると今日

あたりが葬式なのかと思つた。とても悲しいが、間違ひなくあの越後谷さんだろう。ばあさんと話あつて予定通り清水苑に出かけた。途中大沓を通つたら野辺送りの人たちと行き交つた。親しい友だったが、野辺送りもしないでしまったことを申し訳ないと思つた。

清水苑に着いたら部屋は七夕を祝う飾りが一杯張り巡らされていた。みんなで願い事を書いた短冊も沢山吊るされていた。去年は七夕の日にあたつて、彦星や織姫に扮した介護士さんたちに祝福を受けて楽しいと思つたことを思い出した。子供に帰っていくような私たち高齢者を、何処の施設でももてなしてくれるであろうことを有難いと思つた。

清水苑から帰つたらばあさんが季節が変わつても部屋が同じでは面白くないからと言って、畳の上敷きを裏返しをして新しい感じにしていた。ばあさんは家の中を綺麗にしようと常に工夫する。

悲しいこと、嬉しいこと、自然の営みに気づいたことなど、今日もいろいろあつた日であつた。

越後谷さんへのお悔やみ

昨日新聞を見て知った越後谷さんの死。葬式にも参列はできなかった。今朝、息子の文生が「お参りに行きたいなら送って行くよ」と言ってくれたので早速行くことにした。

八時半過ぎに越後谷宅についた。出迎えた奥さんの英子さんの案内で越後谷さんの霊前に額づいた。あの巨体の越後屋さんは、今は遺影になってしまった。在りし日のお写真のそばに、小さな遺骨箱の中に納まってしまった。私はいい友人とと思っていたので、遺影の前でいろいろな思いが走った。

まだ達者で居た頃、九年も掛かって、湯田町の各部落の歴史や家柄などを丹念に調べて、部落部落の本を作り、さらに統合した明治時代からの湯田町歴史書の大冊をつくり各部落に配布した。だから大部分の町民はこれを知っていて、多くの町民の心の中にずっと生きていると思われる。獣医を退職してから、誰にも頼まれないのに大変根気のいる仕事をする人は越後谷さんでなければ

やらなかったであろう。

彼は退職してから好んで文筆に取り掛かった。彼の書いた文章は面白く、ユーモアもあり、また専門の技術のことでもあって、多くの人に喜ばれたようだ。

また平成十年には私と一緒に協同して中村の高橋毅一さんの密かに書いた密造酒と言う作品を、改めて本にし、多くの人に読んで貰おうという計画を立てた。毅一さんの了解も得て、秋まで掛かって「どぶろく」と改題して、一千部出版した。苦労しながら、ついに完売にこぎ着けたこともあり、いつしよに苦労した思い出も楽しく思い出された。

大柄で何者にも臆さない、そして単純で、誰とでも話し合えるいい男だった。決して形にこだわらず、中国に行くにもゴム長を履いて行ったり、お土産だと言って袋から一掴みお菓子など出してくれたり、素朴で面白い奴でもあった。

英子さんも夫を支えてよく尽くされ、一年前頃か、疲れのせいかな病院で暫く治療を受けたことも後から知った。なにせ七年以上も透析治療を続けたというから、英子夫人や身内の方々の尋常ならぬ加護があったからだ

と思われる。一家の主人が健康回復の見込みのない闘病生活に入ったとなれば、その支えになる奥さんの重荷は大変なものだったに違いない。旦那の病気を半分背負ったような気持ちで過ごしたようなものだったろう。そう思つて、私はお二人によく頑張つたと申し上げたい。

越後谷さんは湯田町に於いてはみんなの為になる仕事を一人でした数少ない人で、その命は、広くみんなの心に生きて行くのだろう。総理大臣のように偉いと思つて崇拜されることはなくても、俗社会の為に献身的に生きて、多くの人の心の中に長く生きた人であり、私はそういう人を崇拜したいと思ひます。

英子さんは越後谷さんの最高のパートナーでした。これからは英子さんが長生きして越後谷さんの霊を慰めて貰いたいと念じます。

一一七七、

熱暑と大雨

日本列島は今年も九州地方で大雨、水害に襲われたと報ぜられる。何度も水害に苦しむ九州の人たちを気の毒に思う。温かでお米を二度採る事も出来るいい所で、昔から大陸や南の国とも交流があつて、俺たちの住んでいる東北よりずっと昔から栄えて来た所だが、今でも神風ならぬ台風の通り道で大変な災害を蒙る。化学の進歩はあつても気象はどうにもならぬものか。

そういう中でも関東や関西は三十度を越える暑さが続き、熱中症がいつも多く発生して亡くなった人も多いようだ。人の命が犯される暑さは困る。予想されて対策も立てているのだが、これもなかなか防ぎ切れない。大雨も暑さもなければいいが、どちらも自然の猛威で、今の人間はどうにもならない。

電波社会でもまだまだ自然はコントロール出来ない時代は続くのか。

災いをバネに

今度の震災で、テレビに映る被災地で最も悲惨だと思われるのは、漁業の港だ。大分片付いたがそれでもまだ漂流物が散乱して、船も網も流されて、途方にくれて海を眺めている猟師の姿は本当に気の毒に思う。

どうしようと、家族を失った悲しみに襲われながら、腕を組んで、もう一度ここで猟師をはじめるか、もう此処を諦めてよそで何か仕事を変えようかと思案する人に、何か力になってあげられたいが、と思う。

北海道の猟師から船や網が届けられて元気を貰い、困難はまだまだあるが、もう一度やり直そうと堅い決意を抱く人も居る。隣の町に移ってコンビニを始めた人も居た。

自暴自棄になっても不思議でない環境になっても、そこから立ち上がる人はほんとに強い人だ。そういう人も沢山居て、心から応援したい。

漁業関連の工場を経営していた社長が、社員が困っていることに苦悩する姿にも同情に耐えない。工場の何千

万円の施設をすっかり流されても、職員の生活のことに責任を感じ、一人で工場の片付けをしていた。しかし職員が一人、二人と集まって来て、再び起こすエネルギーとなり、みんな流された裸の工場の再建に取り組んだ。泥を掻き分けてひとつひとつ使える道具を洗って集めた。お互いに励まし合って再建の夢を追った。

災い転じて福となる、と言う言葉はあったが、それは偶然ではない。試行錯誤して苦労の結果、あとで思い出される。あのような困難に遭ったから今の幸せを掴むことが出来たんだ、ということとそんなに沢山あるわけではない。

この度の災害で、災いをバネに前よりも力強い事業の再建が沢山生まれればいいですね、

蟹工船調査記事を見て

七月九日晴れ。暑くなると予報があつて、ほんとに暑くなるかどうかと思つていたら、昼近くになつて暑いと感じてきた。一時間ほど畑の草取りをしていたばあさんも「暑い、暑い」と言つて逃げ込むように家へ入つて来た。

十一時頃、ばあさんが冷蔵庫から残つていたスイカを出してきて二人で食べた。冷えていて美味しかった。暑いということは悪くはないが、身の置き所がないのでゴロゴロ寝たり起きたりで何も出来ない。

それでも岩手日報随筆賞受賞の作品二編を読んだ。投稿するほどの人は何遍も書いて、余ほど前から計画して何日か掛かつて、練り上げて投稿するようだ。一つの課題から枝があつたり葉があつたりして多様に豊かに文章を仕上げている、読む人に感動を与えるから素晴らしい。

それから吉田恭子さんの、『蟹工船「秩父丸」遭難という記事を読んで』という文学作品も読んだ。盛岡の友

人伊藤孝さんに県立図書館に足を運んで貰い、一九二六年四月から一九二八年九月までの記事約百点、四万字に及ぶ資料を集めて貰い、それに基づいて書いたものだ。私は小林多喜二の蟹工船は何十年も前に読んだ記憶はあるが今はすっかり忘れていた。

一九二六年四月二六日、蟹工船秩父丸一五〇〇トンは、カムチャツカ半島のバラムシル島沖で座礁し、乗組員三七六名のうち一八一名が死亡するという悲惨な事件が起きた。

当時の岩手日報記事の概要を吉田恭子さんが紹介しています。

秩父丸は、ソ連領海ぎりぎりのところまで蟹漁に行つていた。激しい嵐で座礁し、乗組員は二日三晩漂流して番小屋にたどり着いた。そこで翌日の朝、沖合いを航行する船を発見して筵旗などを振つて大声で叫んで第二富美丸に救助された。ほかの船は救助しないで行ってしまった。あとでこの船は世論の非難を浴びて問題になった。

オホーツク海やカムチャツカの海岸付近には蟹工船

の警備のため駆逐艦浦塩丸などがいた。

次に幸い助かった方が、記者に対して事件当時の状況を語ったこともあったので、それも紹介します。

一九二六年（大正一五年）四月一七日、私たちが乗った船は函館を出帆しました。出航して約六時間、波は静かで、若者たちは面白おかしく談笑にふけていた。しかし、次第に空にはヒョウ交じりの雪雲が現れ、たちまち大しけとなつて行きました。

荒れ狂う海を航海する船の中で、体の弱い者は病人同様となり、へたばるものが多くなってきた。そうした中で、四月二十日から船内の機械工場など仕事の準備にかかったが、余りのしけで、秩父丸は木の葉のように弄ばれた。酷い天候は何日も続き、仕事はもちろん命さえ危うくなり、ついに私たちは食料を除いた全部の荷物を海に投げ込み、船を守ろうとした。それは船が暗礁にのりあげる僅か二時間前だった。吹雪の中船は幌筵島に非難しようとしたが思うように舵はきれず、直ぐそばの島は断崖絶壁でも上れそうにない。そうしているうちに船は座礁してしまった。仕方なく小さな川崎船に乗って

荒波にもまれ、二日三晩一粒の米さえ口に出来ず、手足に凍傷を負い、船に入つてくる水を掻き出し続けました。このような苦難の日が続き、四月三十日朝、やっと通りかかった船を呼んで助けて貰った。

少し省いて書くが、この秩父丸の乗組員に岩手県の人が四十七人が居た。そのうち二十九人が亡くなつていて、ということだ。蟹工船は小説だが、かなり実態を調査して書かれたものであることは知っていた。しかしこんなに身近な話だとは思っていなかった。これは私が生まれて間もない大正末期のことで、和賀郡からは東和地方から何人かが乗船したが、西和賀の人は乗っていない。こちらには鉾山が沢山あったから周旋屋も来なかつたかも知れない。身近な歴史をまた一つ知った。吉田さん、伊藤さんに感謝致します。

暑い夏電力不足

七月一日。今日も暑くなった。午後二時半、家の中の温度計は三二度で小さい扇風機ではどうにもならない。そういう中で雷の音がして、余り曇らない空から大粒の雨がぼつぼつ降ってきた。しかし蒸し暑さは消えない。

日本列島はやつと梅雨が明け、軒並み三五度内外の熱暑に見舞われている。熱中症が各地に頻発しているが、日本の電力事情は窮屈で、一ヶ月以上も前から節電の要望も厳しく伝えられ、テレビが達成度を報道する。

福島第一原発の事故は収束を急ぐが次々にトラブルが起こって中々前に進まない。国民の原発に対する不安は益々増大し、玄海原発の稼働についても政府の対応は不一致で国会を混乱させた。

原発は一度事故を起こせば底知れぬ怖い被害が続く。今、日本国民は、原発の廃止を求めている。しかしこれも一度足を染めてしまえば電力事情などが絡んで、行くも地獄、戻るも地獄に陥っており、身動きが出来ないこ

とになった。

人間社会でもっとも不幸な状態で、招いてはならないことを招いてしまったのだ。

こんなむさ苦しいなかで、福島県の酪農家が牧草汚染されて牛のエサに困っていることを聞いた。北海道の同じ酪農家が、乾草七トンを届けてくれるという。聞いていてホツとするようなことも伝わってきた。昔、沢山牛を飼っていたこともあるので、生き物が安心して生きて行ける状態に早くなってほしいと、しきりに思う。

にわか雨は三十分ほどで終わり、一時涼しかった。しかし夕方にはまだ遠く、また暑さが続く。テレビは相撲を報道していた。痩せたハタギ山が太った相手を倒してハタギ山の勝利に喝采したりした。

暑かった今日、わが人生の一コマである。

朝の散歩

七月十二日。六時に起きて散歩に出た。朝霧が深く百メートル先がよく判らない。昨日の日中の暑さを思うとなんとさわやかなこと。国道の車もまだまばらだが朝の静けさを破る音は高く響いた。道のほとりの雑草の花も少なくなつた。栄養の悪いシロクローバーはところどころに小さく咲いていた。一回目の草刈が終わつて暫くだったので、二番目のアカクローバもほんの少しだが薄紫に目だつて見えた。

木の葉、草の葉に高い所、低い所。様々な場所に白い薄い膜が見える。形は不揃いだが一五センチ四方くらいだ。まるで薄い布のようで、これは朝露を浴びたクモの巣のようだ。日中は見えないだろうがクモはこんなにも蜜に糸をはっているのか。極く小さい虫も逃すまいとするクモの営みの執念さが覗かれる。

少し行くと終点としている幹雄さんの田圃に行く旧道の三叉路に着く。そこで俺は何時も押し車を止めて車に腰をかけて暫く休む。あたりを眺めたり走り去る車を

見たり、こうした姿はどう見たつて年寄りの姿にしか見えないう。国道の向こう側に幹雄さんの作業所があり、軒下にアジサイの花が群れをなして咲いている。水色の花に混じつて薄赤色もあり、一色より趣がある。そうだ梅雨時によく咲く花だったな。

自分の座っているところから数メートル西へ行けば細内道路の三叉路で、すぐ右側の少し高い所に今は誰も住んでいない廃居がある。誰も住まなくなつて二年くらいしか経っていないが、雪の重みで屋根がへし折れ、風がくればトタンの音がガチャガチャなる。この家を建てた人は清さんで、この家の近くで生まれた人だった。大分前に亡くなり、連れのお婆さんは九十七歳くらいで、今私の通っている清水苑で静養して居る。

往古盛衰世の習い、と古語にあつたが、この人たちも若くて元気に働いていた当時は幸せに暮らしたものだ。だが、私の知っている限りでは子供たちの運が悪くて最後の幸せをなくしたように思われる。

人の一生は、連れ添う人や、子供たちの甲斐性によつても左右される。そんなことを思つたりした。

家にたどり着いたら、ばあさんが花壇の草取りをして

いた。側でまた一休みした。菊のような、菊より少し小さくて白い花びらで真ん中が黄色い花はマーガレットというと聞いた。道端に咲いていたマーガレットを改良した花だという。ピュチュニヤとかいう白い花も少ないが二株ほどよく咲いている。一本だけ残っているカラオイは背が高く、真っ赤に咲いて目立って美しい。部落の花壇の花植えて貰ってきたマリーゴールドは何が足りないのか、今一景気が悪い。

今朝の散歩は五十分だったが、いろいろなものを見たり感じたりした。また今日も暑い日となりそうだ。



五十年前のこと

私は七月八日で八十七年六ヶ月となった。そこで五十年前の私は何をしていたかを振り返ってみようと思つた。

今頃突然五十年前のことなんて思い出せるのかと思われるかもしれないが、俺にはちよつとした武器があるので少しくらいは嘘のない事実を語ることが出来る。

五十年前は三十七歳で、戦争が終わつて十七年になつていた。遅い奮起だったが、昭和三十六年、大渡の地で酪農開発をする事として六ヘクタールの土地を買い求め、とりあえず二ヘクタールの草地造成と二十坪の牛舎を造つた。青年のように夢を膨らませて開拓に取り組んだ。なにせ文無しで取り組んだから夢は順調には進まなかつたが夢中で突き進んだ。

もう後には引けず細内の住居付近の土地は処分した。この年十一月、湯田ダム建設工事も終わり近くとなり、大石にある小さな工事事務所を譲り受けて仮住居を作つた。

この頃結いによる家普請も以前より形が崩れ、細内では久一、貢、文止郎の三軒が同時普請をした。例年だと一軒一軒が盛大に「家出し」という大振る舞いをするのだが、この年は七月四日、公民館で三戸合同の家出しをしたと記録されている。

またこの年、私が農家組合長を勤めていて、部落内の暗渠排水事業が行われ、秋田県大曲町の藤光建設が請負つて工事をした。何回か大曲の藤光さんを訪ねて交渉したことも記憶にある。

この工事がどれだけの面積だったかは忘れたが、与市さんの家の後ろあたりをやつたことが思い出せる。この頃の工事も材料が改良されて居らず、昔どおりの枝芝やカヤなどが使われたので、排水は長く持たなかつた。

この入植地で四頭の乳牛を飼育し、直径九尺高さ十二尺のサイロも作り、着々本物酪農家に近づいて行つた。その他いろいろあつたが、これだけ書くにも、種も仕掛けもあつて、日記やその他の記録によつて五十年前が蘇つて来る。

五十年前を描くにはちよつとお粗末だが、今日の暑さで品切れになつたことにしよう。

やはり歴史は記録によって間違いない事柄が再現出来るのだ。そうでないと十年前だって自信がなくなってしまう。

しかし記録によって間違わない歴史を作ることが出来ても五十年前を作り変えることは出来ない。

今にして作り変えたいことが沢山あるが、それは生まれつきの定めだったかも知れない。



年の功こう

七月十四日。朝は霧があり涼しかった。今日もまた暑くなると思い暑くならないうちに散歩しようと押し車に掴まって散歩に出た。大台野まで三回ほど休みながら歩いて来たら四十五分掛かり少し汗ばんだ。少し休んで朝飯を頂いた。

昨日ばあさんは同級会に行き、夕べは泊ってまだ帰らない。息子も嫁も働きに出て一人になった。九時半頃、悟さんから電話があり「暑いが元気でいるか、これから遊びにいつてもいいか」「元気で居る、只今一人ぼっちだから大歓迎だ」と言った。それから十五分くらいして悟さんが来た。

いつものことだが彼はいろいろな所に出かけ、またいろいろな人が来て、さまざまな情報を聞いている。だからそれを聞くのはとても楽しい。

久一さんが病気で沢内病院に入院しているがまだよくならないとか、忠一さんは私より調子がよくなさそうだとか、また桂子沢の仁平さんが時々来て柳沢の話しも

してくれるとか、普段聞くことのない人たちのことが聞ける。

清水苑で大野の照井清到さんという九十七歳の人で、体も心もしっかりした人が居る。ところがこの人が、小繫沢生まれで現在湯川に住んでいる高鷹さんというおばあさんに「あなたを知っている」と言われたが、清到さんは「思い出せない」と言った。そばで聞いている私たちは、清到さんはすっかりしている人だから、湯川のおばあさんが勘違いしているのではないか思った。しかももう少し話してみると、清到さんの近い身内の人の姉であり、面識もある人であることが判り、正確で間違いのない清到さんでもこんな忘れ事もあるのかと思った。

このことを悟さんに話したら、小繫沢生まれのおばあさんは重一さんの姉であることも知っていた。このほか既に亡くなった人でもあそこのおばあさんと、どこその爺さんは兄妹だったとか、いろいろ懐かしい人たちの顔が浮かんで来た。それが新町の人とか下前の人とか、かなり遠い範囲の人々が思い出される。

悟さんは私より二歳半くらい年下だが、お互いにもう八十はとづくに過ぎている。これだけの年数を過ごせば、

かなり多くの人や、かなり広い範囲の事情も、薄くはなっているが、思い起こして話し合える。

こういうのを年の功と言っていた。こうとはどういう意味か、またどんな字を使うのか改めて考えさせられる。亀の甲羅の甲か、効果の効か、高さの高か、功績の功か、ことわざ辞典でも見たらあるのか、今まで吟味したことはない。高齢者の利点みたいに使われてきた言葉なのだろう。

年をとっていいことは何もないが、年の若い人より経験が多いので、見たこと、聞いたことが沢山だ。このことは私より先に生まれたあの人がよく知って居る筈だ、というふうに古い人が用いられることもある。

そんな時は先輩顔して得意になることもある。また敬老会などでは年の多い方が尊敬されるが、それは自然であるような気がする。

ちよつと話は変わるが、終戦当時、細内の代治郎さんが満州軍で重要な任務に付いて居た筈なのに、なぜ東京に居たのか、と言う話をしたら悟さんは、「当時東京が危険だということで、皇居を守る近衛師団を二個師団に強化するために、各部隊の優秀な将兵を集めたそうだ」

と言う。これもはじめて聞いたことで、素晴らしいニュースを知っているもんだと思った。

話し合ってみると私の知らないことを悟さんは詳しく知っているようで、どこからこんなニュースを仕入れているのかと感心した。これも悟さんの年の功かも知れぬ。今日は悟さんと話し合って、年の功でお互い納得した楽しいひと時だった。

あやめ公園の散策

七月十五日。晴れ。この頃暑い日が続き、昨日は西和賀でも熱中患者が出たとの話があった。全国では例年の何倍とかで、死者は七十人以上とのこと。原発事故の影響で電力不足ともいわれ、一人暮らしの老人はクーラーをつけずに孤独死をしていたということもあった。暑さによる暮らしの影響も出てきている。

七月も十五日となり、なか日となった。今日の午後は清水苑であやめ公園へドライブすることになり、車三台に乗って出かけた。いつもと違うコースで、湯田部落から間木野へ少し下がって橋を渡って行き、間木野部落を通って中山道で山を越えて中学校に下り、川尻に出る。上野々を錦秋湖のほとりに湯川方面へ進んで橋を渡り、向かいの山道を走る。ダム回遊路だがあまり景観を楽しむようにはできていないと思った。山の自然はいいようだが少し深い山で、熊も出る話もあり、散歩も警戒しながら、というわけだ。平和的な観光地ではないようだ。曲がりくねった上り下りもあって、やがて第二ダムを

左に見ながらあやめ公園の終わったあたりから三百メートルくらい橋でダムをひとまたぎして野球場に出た。この辺が公園といわれ、あやめ畑も広がっている。真ん中の池には大きな鯉も居るはずだが、鳥の害を避けて黒い鯉だけで、その姿を見ることは出来ない。このあやめ園には去年も来たが、数年前私たちが老人クラブで草取り奉仕をしていた当時を思えば、あやめは少なくとも、草畑が多くなって残念だ。管理の手が行き届かないようだが、西和賀の観光資源として町民一体でお客さんに来て見て貰うような場所にしていきたいものだと思った。

湯田ダム周辺は県立自然公園といわれていたと思うが、ダムを囲む緑や雪景色も、都会から見れば素晴らしい景勝地であるに違いない。地域の知恵を活かし、みんなに来て貰える町づくりを力を入れてほしいものだ。

沿岸津波の余波

七月十六日。晴れ。今日も暑い日。午後の台所温度計は三十四度を指していた。私がいつも良い努力をしていると思う小さなグループ「麗ら舎読書会」の便りによれば、六月例会は会員の陸前高田市、村上末子さん「震災で行方不明」の慰霊に出かけ、瓦礫の中に末子さんの家を探しあて、在りし日を懐かしみました、とあった。菩提寺にも詣で、冥福を祈ったとのこと。

村上さんとは私も二度ほどお会いしたことがあり、六十五歳くらいで、すっかりした活動家という感じだった。陸前高田から和賀まで自分で車を運転してくるから、よほど麗ら舎に好意を持っていた方だと思われず。

数年前に仙台で学生暮らしをしていた娘を交通事故で亡くされて、〇八年「追憶の余韻」と言う随筆集を発売されて居られたことも記憶にある。陸前高田でもいろいろな任務で活躍されていたことだろう。優れた人材を亡くし、さぞ惜しまれていることでしょう。

お目にかかったこともあり強い印象も残っているの

で追憶の念を抱きながら麗ら舎の事務局担当の佐藤恵美さんにパソコンで手紙を書いて私の作品「翔べ ひとりごと」を同封した。

麗ら舎の仲間たちに元気を贈ることにはならないと思うので自信はない。

麗ら舎にとつて、沿岸津波で有力な仲間を失ったことは、意気消沈というところだが、乗り越えて頑張っているってもらいたいと思う。

岩手の中、あるいは東北の平和活動の砦の一つだと私は思っているので、次々に若い活動家が入会して、この活動が続けてくれることを願っている。

象潟の岩ガキ

今年の海の日には東日本大震災の影響と、昨夜、なでしこジャパンのワールドカップ優勝に沸いたこともあってあまり話題にならなかった。

しかし何時もより暑い夏で熱中症も多く、海水浴も敬遠された感もあった。

去年は七月十九日が海の日で、一家で象潟に出かけて岩ガキを食べた。去年は遅く出かけたので丁度お昼となり岩ガキの注文が殺到して一時間以上も待たされた。今年は九時に出発。二時間掛かり十一時に着いた。込んでいなかったので二〇分くらいでガキを頂くことが出来た。しかし岩ガキというガキは三陸にはないのか、ガキは養殖で、秋から冬の味覚とされている岩ガキは自然生息のもので岩に付いているものらしい。大きさあり味も美味しい。多分漁のものでなく、味覚品として売られているものかも知れない。

今年も象潟に来て美味しい岩ガキを食べる楽しみに出会った。

ここ象潟は日本海沿岸の国道七号線が新潟に向かって通っていて、由利本庄市の南に繋がっている。仁賀保、金浦、象潟の三つが合併して仁賀保市となり、この辺一帯は昔海だったようだ。特に象潟は島々のあとがよく判る。俳人の松尾芭蕉もここで沢山の句を残しているようだ。ゆつくり訪ねることが出来れば、いろいろな資料館があるとも聞いているし、楽しめるだろう。

十二時頃、去年も休んだ、「ねむの丘」というドライブインの四階にある温泉入浴場で休憩と入浴、五百円という安い料金で休むことが出来た。ここの浴場では広い日本海がありつたけ見られる超絶頂の展望浴場で、今日はよく晴れ渡っていて海の果ての果てまで見えた。青い海、波もなくなんと広いこと。岸から近くに小さい釣り船が五つくらい見られ、それも静かで平和な海を映してくれた。

十キロくらい離れた東の山並みには風力発電の風車が東南方面の鳥海山の麓まで連なって小さく微かに見える。またこの国道七号線と少し離れて東側に日本海自動車道が開作中で交通高速化も進められていた。

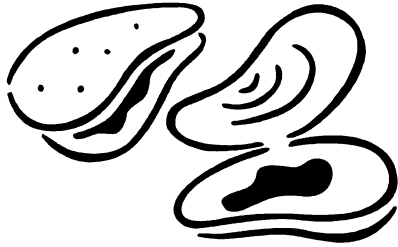
私たちの住んでいる所から車時間で二時間。日本海の

絶景と珍味を楽しめるのも幸せだなあ、と思った。

道路の高速化は人や物の流れを多くし、特に観光地への動きには貢献することになる。景気が良ければお金の流れも盛んにすることになるんだ。

達者で居て、家族の慈しみがあって、生きていることの有難さを噛み締めた一日でした。

一一七 一八



年金の恩恵

今私たちがデイサービスを受ける清水苑は立派な施設で、似たような爺さん婆さんが楽しくガヤガヤしている。今から三十年前には考えられなかった。福祉社会は人類の望みであったろうが、その望みを実現するかは貧乏社会ではとても遠い望みであったに違いない。

昭和三十年頃か、国民年金制度ができて、四十年頃加入の勧めがあったことを思い出す。当時私などはお金が厳しかったし、それに二十五年先に受けられるなんて、それで助かるとは思えなかった。

しかし今は年金がなければ、高齢者は生活出来なかったであろう。そして光寿苑も清水苑もなかったでしょう。もしあっても私たちはとても利用出来なかったであろう。

年金制度は社会全体を幸せに動かしている。

越後谷幹雄さんを偲ぶ会

七月二十五日。午後四時から「越後谷さんを偲ぶ会」の案内を頂いていたので、迎えのバスに乗って巣郷温泉静山荘に行った。広治さんの呼びかけで、私も願っていたことだったので有難いと思って参加した。菅原彰さんの名前で案内状が来て、彰さんが私の健康を気使って心配してくれた。

四時から一時間の予定で出席者全員から思い出を述べ合った。二十数人だったが、それぞれ深い印象を語って二十分以上時間が多く掛かった。私も先に申し出て、自分史に書き込んでいた分の一部を語った。出席者の中で思い出せない二人が居たが暫くして判った。秋田羽後酪農の昭和四十年頃から長く交流した千葉肇さんと柴田さんだった。千葉さんとは毎年年賀状も交換しているのだが思い出せなかった。それほど頭が鈍くなっているのだ。

秋田県の二人のほか、久しぶりの人たちとも会えてよかったと思う。みんなそれぞれの越後谷感を持っていた

が、共通していることは、あつさりしていて深い心の人だったという事だ。また懇親会で越後谷英子さんの謝辞では、妻という立場で言うのと、『もつと生活のことも考えてほしいとも思ったが、社会を見つめて仕事をし、いろいろな活動をしているの夫の生き方はみんなの為にもいいことをしているのかなと思った』と越後谷さんの奥らしい話で感銘を受けた。

達者であればみんなともつと話したいと思ったが、宴会には向かない私の身体なので、三十分くらいで退散して静山荘の車で送られて帰った。

越後谷さんについては、私も特別な思いで、二年くらい前まではお宅を訪ねて話しあったものだが、車から降りて、体調も悪くなり、思うように訪ねることは出来なくなつた。言い尽くせない思いだが、自分史には思いを込めて書いておいた。人生はいい人と会っても、やがて別れなければならぬ辛いことも沢山あるものだ。

越後谷さんともそういう出会いだった。

一休みのあと

七月二十八日。今日は朝から晴れ、昨日は一日腹具合が悪くてばあさんにカタクリを作ってもらって食べて寝床で寝転んで過ごした。何回もトイレに行き、ほんの少しの軟便で終わるのを繰り返した。腹具合が悪いといってもそんなに酷いわけでもなく、テレビは見る事が出来た。

七月二十四日から今まで見ていたアナログ放送から地上デジタル放送のテレビに変えないとテレビは見られなくなるという。息子が新しいテレビを買って来て取り付けてくれた。今度は寝ていて足の方の窓の上に額のように取り付けてくれた。今までのように横上を見ているより見やすくなった。退屈しのにぎに見ていても本気で見られる番組もあり、そういうのは面白いと思つて見る。しかし年のせいだろう。やがて疲れて消すことになる。二十三日土曜日から二十八日まで五日間もパソコンをやらないうでしまった、俺専用のパソコンを息子から貰つていて使わないのはもったいない。この間も大相撲あ

り、高校野球あり、また二十五日は山田眼科に行き、午後四時より静山荘に行き越後谷幹雄さんを偲ぶ会にも短時間だったが参加して来た。老化体質の俺には少し無理だったかな、疲れて腹具合が悪くしてしまった。

それでもその日その日は変化もあり、退屈ではなかった。体の調子もまた元へ戻ったようだ。

少し過ぎた日を思い返して見ると、大相撲にも変化があった。関脇琴奨菊が大関を掴む勢いで期待を呼んだが、あと四、五日のところまで負け、十一勝四敗で大関に届かないことになった。また横綱白鵬は八連勝をかけて戦ったが十日以後三敗して大関日馬富士に負け優勝は日馬富士となった。相撲界の人気者大関魁皇は、歴代在位最高勝ち星一〇四七勝を上げたが、体力続かず引退した。相撲も八百長事件で騒がれ、今場所やつと正常場所に戻り、再スタートとなった。日本の最も権威のあるスポーツとして長く国民に親しまれる相撲であつてほしい。

高校野球は、準決勝は民放で見たがコマースィヤルなどで全部はみられなかった。決勝は本放送で見られたので始めから最後まで見ることができた。準決勝は盛岡勢が三校と花巻東加わり四校で戦った。決勝は、盛岡三高と

花巻東との戦いとなり、花巻東が先に点をとる。敵方も毎回ランナーが出て険しい戦いだったが、ついに一点も許さず五対〇で花巻東が優勝を成し遂げた。どちらもミスのない素晴らしい勝負だった。八月の甲子園の戦いが楽しみだ。

また、なでしこジャパンが女子サッカーで優勝し、世界一の栄誉に輝いたことは、震災で沈んでいる日本人の心を希望に導いた画期的な事となった。なんと言っても世界一だ。百年掛かっても得られない栄誉だ。選手諸君に心から祝福を贈りたい。

平泉が世界遺産に指定されたことも岩手県民として誇りに思いたい。平泉は私たちも若い頃に参拝に行ったものだが、ここ最近忘れるほど行っていない。当時の歴史にも浅いが、わが湯田町鷺の巣金山からも多くの金が運ばれて作られたであろうことは想像出来る。

藤原三代の厚い信仰と、万民の平和を願い建立されたものとして五百数十年、世界の尊望を集めて、今漸く世界遺産に認められた。苦労はあっても、その価値が広く認められた事は大きな意義がある。

そのほかノルウェーの無差別殺人事件も恐ろしく感

じた。人間社会にはまだこんなことが起こるのか。

その日あったことを直ぐパソコンに書き込むことが億劫になり、何日か経たないと書けない。これも老化現象だろう。でもまだ日記は毎日メモのように書いている。そうしないと、一日が暮れると思いついて出せなくなってしまふ。こんなことがいつまで続くか。これが出来なくなればボケとなり、木造人間みたいになってしまうだろう。

この年になればどうでもいいようなものだが、生きていく限り人間の機能を失わないように、生きていることが自分も、周りの人たちも幸せであるように、その時なりに勤めることが必要なのだと思う次第だ。



川柳と平和

七月二十八日。午後五時俄雨が来た。日中暑いと思つても午後はヒグラシが鳴き、涼しくなり秋の訪れを感じる。

新聞アカハタ日曜版が届き、開いてページをめくり、川柳編に目がとまる。

『責任は国が持つから心配です』
 というのを見て笑いが止まらなかった。ほかに、こんな句もあつた

『基地かかえ原発かかえ火の車』

『憂き世でも九十六の誕生日』

『語りいる妻とふたりの終戦日』

などと言う句を見て、なるほど、今の世をよく映したものだと感じた。

私も、俳句とか川柳を書けたらもつと面白い人生を過ごせたらうにと思うが、才が乏しくて残念だ。

五七五の文字で、長い文章より、深く味わいのある意

味を伝えるから知恵の力に感じ入る。

もう直ぐ八月で終戦後六十六年になる。日本では思わぬ大災害と原発事故という嘗てない不遇に遭った。そのほか、昔は米ソで重苦しいことがあつたが、いまは中国とアメリカの軋轢があり、最近では中国が東南アジアで資源拡張を狙う動きもある。平和が脅かされる危険を感じるようになって来た。

長い戦争が終わって六十六年の平和が汚されぬことをしきりに願うこの頃です。

災害と苦難の試練

八月一日。曇り。時々日が照っても夏のような暑さは感ぜられなくなった。

七月二十七日にお腹の具合を悪くしてからまだすつきりしない。特に腹痛というわけでもないが、少しずつ軟便が数回出て下腹が軽く苦しい。

数日前に買ってきたカーテンを文生とばあさんが二人で取り付けた。煤けた障子を取り除いて白いカーテンに替えたら部屋が明るくなった。俺のパソコン操作もやり易くなった。

金曜日、二九日に清水苑に行つてから三日間家に居たがパソコンは休んでしまった。新潟県、福島県の雨雲は連日繰り返して大豪雨となり、川が何本も洪水となった。多くの家や田圃が浸水し、山崩れ、道路の損壊など、何箇所かの集落が孤立して、ヘリコプターで救われるとか、数人が流されるという惨事が起こった。三日間に千ミリも降り、信濃川など大きな川の洪水だから大変な面積が川になってしまった。福島県にも六五〇ミリの降雨で磐

越線の鉄橋が壊れた。七年前の大豪雨よりも余計降って、被害も大きいと言われる。

三月の東日本大震災は福島原発の事故につながり、その復旧はまだまだ困難が続き、なかなか目に見える復旧ならぬ中に、この豪雨災害が起こった。政府はさらに災害対策に追われて正常な政治が出来ない状態だ。

またこの頃はアメリカの財政危機の余波を受け、円高と異常に日本の輸出産業は低退することになり、経済も大きく落ち込む心配がある。

原子力発電の安全が揺らぎ、発電力が減り、電力不足も生活や産業にも影響しそうだ。

今年は大災害が何回も襲う、復旧に追われる克つてない苦難と試練の年なのかも知れない。

なぜ可笑しいの

川柳で『責任は国が持つから心配です』と言う句で笑いが止まらなかった。家のばあさんでさえ笑ったから誰も可笑しいと思うでしょう。今なぜこの句がみんな可笑しいだろう。普通は国が責任を持つなら安心していい筈なのに、どうして、と思う。

わが国は世界の文明国であり、経済大国でもあるがこの国の国民からこんな句が生まれて、多くの人がいかにもそういう気がするということだろう。

何処の国でもその国の舵取り役は立派に国民の為に勤めているであろうに、こんな句がみんなをこれ程と思わせるからどうしたものか。詠み人が勝手だからだろうか、川柳と言う可笑しい書き方だからだろうか。

でも川柳とか短歌とかは、時の世の風刺でもあるから、見る人に実感を与える強い力があるから素晴らしい。

福祉のすすめ

八月二日。曇り。普通八月は暑い季節なのに、ここ数日は涼しい日が続いた。お盆が来ないうちに秋がきてしまったかと思われる。

十時頃包括支援センターの中野さんが、「介護予防サービスマニュアル」なるものをもって来た。先に聞き取りしたものを整理してきたがこれで宜しいですか、と言うことだ。私は今、週二回サービスマニュアルを受けていて健康状態は前より気分的に少し良いようで、このままもう一年続けて行こうという事で了解した。

今、私のような高齢者はこのように、役場や介護施設の人たちが丁寧に対話をしてれて、健康を守ってくれるから有難いです。

中野さんの訪問を受けてお話をしたあと感じたことでした。

夏蘇る

八月五日。朝六時。もう外では陽が照っていた。ぼあさんは先に起きていた。それから俺も起きて散歩の友、手押し車と外に出た。朝からこんなに明るく陽が照っていることは最近なかった。朝の冷気は全くなく、ほのぼのと温かかった。この頃は手押し車につかまっても腰が痛い。それでも散歩をはじめた。車に結わえ付けてあるラジオはスイッチを入れても鳴らない。どうしたものか。門口から三十メートルくらいで国道に出る。今朝は横手方面に向かった。少し行くと横手の方から来た車が駐車場に休んでいて、中年の男性が車から降り、足腰を伸ばしたり曲げたりして体をほぐしていた。何時間か運転すると肩が凝ってくるから、体をほぐすといいいもんだつたと、運転していた当時のことを思い出した。二百メートルも歩いたら汗ばんできた。アブラ蟬がヂイヂイ鳴いて真夏に戻った感じがした。

横手方面四百メートルくらいで幹雄さんの田圃に行く道の降り口がある。そこは広くなっており、汗も出て

来たので休憩。手押し車の座席で座り、しばらく辺りを見回しながら汗を拭いた。ヂイヂイ蟬は直ぐ其処の木に止まっているようだ。登り下がりトラックやマイカーがまだまばらだが目の前を横切る。何時もはもつと遠くまで行くのだが、今朝は此処から戻った。入り口の花壇の草取りを少しやったが、暑くて止めて家に逃げ込んだ。今日はディサービスの利用日で迎えの車に乗って清水苑に行った。入浴後リハビリルームで低周波治療をしてから窪田先生に、インターネットを開かなかつたかと聞いた。開かないで来たと言った。七時頃息子に頼んでエッセイ集をネット送信したが、まだ見ていない、とのことだった。帰ってからのお楽しみようだ。

部屋に戻ってからも暑くて疲れを感じたので、布団の上で休んだ。気温は三十度以上のようにだが、この部屋は冷房しているので暑さはあまり感じない。眠ろうとしても眠れず本を読もうとしても目が疲れて読めない。そのうちお昼となり、おかゆを頼んで出して貰い、美味しいと思っ頂いた。となりに座っている富雄さんは食欲がよくて、俺より早く全部食べてしまう。だから健康なんだ。

お昼寝のあとはドライブするという。今日は蓮の花見物ということで何処へ行くとも知らされない。かえって知らぬ方が楽しみだった。車は樺沢を通って下前に行き、下前の百姓たちの団結のしるしの田園アートをを見せてもらった。此処は去年もやっていたが、今年は上達してはつきり「がんばろう下前」の黒い文字が見えた。田圃に描いた協同のしるしに拍手を贈った。

それから左草の牧場を眺めながら左草のムラを下って下左草を通り桂子沢、芳ヶ沢、柳沢を通る。山を越えて細内、白木野を経て越中畑の高速道そばの柳沢良久さんの家の近く十坪ほどの蓮園がある。やや満開のところ、水管理が不十分か、花の彩りが少し足りなく感じたが、久しぶりの蓮の花に、お盆前のこの季節に会えたことはしあわせだった。

子供の頃は小繋沢の幹雄さんの家の前に大きな池があり、そこで綺麗な蓮の花を見たまんだし、蓮の葉を分けてもらって、お盆の仏壇やお墓に供物のお膳にして仏様に捧げたものだった。昔から、暑い季節のお盆に、仏様が最も好いた花は蓮の花であったであろう。でもこの頃は、人間様は仏様が何より好まれた蓮の花を忘れてし

まい、お墓に蓮のお膳は余り見られなくなった。蘇った夏に、蓮の花と出会い。もう近くなったお盆のあれこれを使った日だった。



マメでまた会えた

八月六日。昨夜、越中畑のヒデさんから電話で、「埼玉のシメ叔母さんが来ていて、明日中村の妹ゆり子の家で待っているから会いに来てくれ」とのことであった。シメさんは数少ない同級生で、久しぶりなので是非会ってみたいと思った。

次の日は土曜日で早恵子が休みなので、ばあさんと一緒に中村のゆり子さん宅まで送ってもらった。

シメさんも八十八歳だが年よりもシャンとしていて、マメでまた会えたことを共に喜んだ。

思い返せば、平成八年。今まで一回もやったことのない同級会を、なんとかしてやろうと思ひ、小原清治さんなど近所の同級生たちと相談して、バラバラに離れて何十年も経った友達を探し、何ヶ月かかかって住所を調べた案内を出した。私が言い出したものだから大方私が準備した。何十年ぶりかのことだから、今の故郷のことなどもみんなに知らせようと文章も作った。二十人に案内して十三人集まってくれた。七十年も会わなかったから

思い出せない人も居た。しかし子供の頃の面影はどこかにあって、抱き合つて再会をよろこんだ。実に感動的だった。シメさんもその時会った一人だった。シメさんは越中畑に生家があるから時々帰省しているらしかったが、この時から何回か会う事も出来た。数年前、朝早くの列車で埼玉に帰ると聞いた。来ていることも知らなかったが、その時は車の運転もしていたから、駆けつけて駅のホームで短い時間だったが話して、「また会うべし」と言つて別れた。あれ以来だ。姪のヒデさんの話だと、耳が遠くて話をするのも大変だと言つていたが、今日はそれほど聞こえないようでもなさそうだ。もちろん補聴器もつけていたが、私との会話はお互い大体解り合えた。シメさんは長く土畑鉦山で働いて、早くに夫を亡くし、戦中戦後の物不足の時期を苦労して過ごしたが、再婚してからには幸せな家庭生活であったようだ。土畑鉦山が全盛時代を過ぎるようになってから、同僚達と一緒に埼玉県蓮田に協同で土地を買い、其処にそれぞれ家を建て、今も其処に住んでいるとのことだった。しかし今までに夫と四人の息子を亡くした。男の子はみんな亡くなった。六十八歳の長女は近くで家庭をもって生活している。同

居しているのは亡くなった息子の嫁と孫だと言っていた。元気で長寿だが、四人の息子を先に亡くしたとは何たる不幸なことよ、と同情に耐えなく思った。

でもシメさんたちの知恵は優れていて、鉾山の仲間たちが同じ土地に住むようにしたことは、お互いの暮らしを守るのに大いに役だったのだろう。シメさんが言うには「その時の友達みんな死んで居ないけれども」と言うわけで、長生きは私一人というようだった。

私の同級生でまだ達者でいるのは、菅原喜代治、高橋毅一、高橋金作、小田島正治と私の五人、女の人は菅原瑞枝、加藤マサ、中山シメ、高橋トクエの四人だ。同級生は何時会っても親しいし、会うことでお互い元気を貰うことになる。

これは私たちだけではなく、一緒にいるゆり子さんもヒデさんも同じ事を言っていた。

幼いときに同じ教室で机を並べて学んだり遊んだりした六年間は、なんとしても忘れられない印象として一生ついてはなれないものなかも知れない。

シメさんと同じ越中畑の同級生で菊池セツさんという可愛い女の子と、一年生の時、一つの机に二人並びで

座っていたことを思いだす。ほんとに可愛い子だったが大人になっても恋しい人だとは思はなかった。セツさんは年若くして嫁さんになり、満州に渡った。戦後こちらに来て横手の平鹿病院で夫婦二人勤めたと聞いているが、その後病気で亡くなったとも聞いている。今でもあの人の顔は可愛くてはつきり思い出せる。

久しぶりの同級生との再会で、懐かしい話と、それを取り巻く友達の思い出など楽しくさせてもらった一日だった。



お盆が来た

八月十日。晴れ。清水苑に行ったら今日は午後から夏祭りをするという事を聞いた。去年は八月六日金曜日だった。泊っている人も通いの人も一堂に集まって、清水苑の職員たちが私たち利用者を慰安する為、お祭りを開く。やきとり、おむすび、うどん、漬物、とうもろこし、ノンアルコールのビールなどを振舞ってくれて、川尻の小学生十人くらいが太鼓を叩いて御神楽を踊ってみせてくれた。子供たちの踊りも去年より少し進歩して良く見えた。それから去年も来てくれた北上の喜友会という演芸団の唄や踊りがあって、半ばプロだけに上手だった。一行には目の見えない方も二人いるが、踊りも踊るという努力家に感動した。私は去年も今年も参加出来てしあわせだった。

清水苑の皆さんもお盆という一年に一度の夏季の休みを明日十二日から十六日まで四日間休む。私たちは毎日の履物のズックを持ち帰り、家で洗って半年のゴミを落とすことにしている。

この頃は高校野球が続いていて、帰ってから第四試合が見られるので六時過ぎまで見てしまう。だからその日の出来事や感想など記録しないでしまう。

十一日は曇りで雨もあり、散歩しないで、朝食以来ずっと野球観戦。第二試合の青森光星学園は十六対一の大勝だったし、第四試合の九州大付属高校(福岡)と関西(岡山)の対戦は期待通りの熱戦で、どちらもミスもなく二対二で延長戦となり、十二回の裏関西のサヨナラの見ごたえの試合が演ぜられて終わった。

十二日。曇り少し雨。清水苑へ行き、入浴のあと敷いである布団に寝転んで野球を見ながら居眠り。午後は体操のあと魚釣りゲームで楽しんだ。明日から四日間お盆休みということも告げられて、一年の半ばのお休みを改めて思い返して帰宅する。

十三日。晴れ。気温三十度。迎え盆の日で、出勤の息子夫婦も休んで先祖の仏様を迎える準備をする。北上の長男善美も来て、夕方五時、みんなでお墓参りに行く。我が家では昔は十四日の朝、馬用の草を刈ってきてから

行ったものだったが、今は草刈もないし、十三日の夕方に替えてお参りするようした。十四日の朝参拝慣例の人もまだ沢山いる。一年に一度御先祖たちの霊を迎えて懇ろに慰める。この行事は何時から始まったのか。ずっと前から続いているようだ。全国的にお盆の墓参りは、十六日まで遠く故郷を離れている人もお参りしないといけないような気持ちになっていのではないか。先人の霊を偲ぶという慣わしは、人間である限り何時までも続くのである。今年、我が家のすぐとなり位置している細内の康広さんが新しく立派なお墓を建てた。年々お墓は立派になっていく。先人の遺徳を偲び、これを顕彰しようという今を生きる人の姿なのだろう。

いろいろな思いを感じながら今年も家族の手伝いを得て例年のように先祖代々の眠るお墓を拝む事ができた。

高校野球は如水館対東大阪大附柏原が期待通りの熱戦で、延長戦で如水館が勝った。また秋田の能代商は香川の英明を押さえて勝ち進んだ。

夜は善美と文生が三時間ほど酒を交わしながら話合っていた。

十四日も晴れて暑い日。朝六時に起きて散歩する。体にこたえるが、雨でない限り散歩した方が、何か自分と妥協しない僅かばかりの努力をしたようで気分がいい。

善美は朝早く、北上に行つて忘れてきた薬を持ってきた。日中は誰も来ないで野球を見た。午後善美がお風呂をかねてドライブしようと言うから、善美の車に乗って出かけた。細内から柳沢左草下前と山根通りを通過して、沢内道路を北へ進んではずれの貝沢まで行き、銀河高原まで行つた。此処には仙台の孫たちが小さい頃に時々連れてきて遊んだことがあつた。その時は林間牧場もあり、トナカイなども飼つていて子供連れのドライブも見えたものだった。また酪農組合や牛乳公社などの集まりでも通りがけに休んで、地ビールを飲んだこともあつた。一時経営不振の時もあつたが、今は高原の良さを求めて来るお客もいるので結構いい商売になっているようだった。

此処にも温泉があるので入る事にした。以前にも孫たちと入ったこともあつた。その頃は普通の風呂だと思つたが今は少し改良したようだった。しかし高級ホテルの風呂場という感じもしないが、料金は六百円と高値だっ

た。風呂が終わってフロントで銀河高原ビールを買って帰った。沢内街道は南北三十五キロもあって盛岡に行く時はずいぶん長いと思ったものだ。通りの家々の玄関付近には大抵二台か三台の車があつて、お盆の客の来訪かと思われた。田圃も穂が出てきて、実りの秋が望まれる。

良いお天気が続き、お盆という全国的夏休み兼、先祖の供養をする機会の農村は、何ともいえない豊かな気のある時でもあると思った。

今年もお盆を迎えた。元気で八十七年目のお盆を迎えた事を感謝する。



第六十六回終戦記念日

八月十五日は太平洋戦争を終結した日であると共に、長い間の軍国主義体制から、軍備をしない民主主義の国に生まれ変わる決意をしてから六十六年になった日でした。

しかし、今までも何回か、日本の軍国主義は間違いではなかったとする意見や行動もあり、その都度政府見解としては今の民主主義体制を守ることにしてきた。

それにも拘わらずこの間の国会で議員が首相に「なぜ靖国神社を参拝しないのか」と言って参拝を督促するような発言もあった。その後八月十五日には、自民党や民主党などの多くの議員が靖国参拝をしたと報ぜられた。

日本遺族会は侵略戦争に敗れて、何もかも総反省を迫られる中、戦死者の霊を靖国神社の神様として祀ることだけは固持し続けてきた。それは代々の日本遺族会の連合会長は自民党議員が勤めてきたことも重要な要素であつたらう。

戦後アメリカは日本の占領政策のうち、最も統治しや

すい方法として、天皇を国政に参加させず、日本国民統合の象徴として残すことにした。

今まで天皇と神様を一体としてあがめてきた日本国は、天皇の存在を残してもらおう事は大変心強いこととして歓迎したのでした。

皇室の権力は極端に弱くなったが、とにかく存続して、敬神の天皇家行事も行えるから保守層の人たちは救われたと思つたに違いない。

天皇と神様のつながりを残す事で、靖国神社を日本の神様として祀り続けたいとの念願も強くあつたわけだ。

このことは神を祀る精神の意味もあり、一概に否定してもいけないことだ。いろいろな意見はお互いに今後も話し合う課題であらう。

思い返せば私どもも、国の為、天皇の為、名譽の戦死をして靖国神社の神として祀られることに憧れを持って生きた時代があつた。日本は神国であり、世界中で最も神聖な国である。従つて間違つた行いは絶対にしない国であると一方的に信じていた。

軍隊も国民も天皇や政府の命令は正しいと信じてい

て疑うことはなかった。だから靖国神社だつて間違つた神社だとは思はなかつたし、思いたくもなかつたわけだ。

私もみんなと同じ気持ちで軍隊に入隊したが、二ヶ月の生活で、日本軍は神聖な組織ではなく、最も野蛮な組織だと感じた。そしてこの戦争は本当に大東亜共栄圏確立の為だろうかと思つたようになり、兄の戦死も、名誉の戦死ではなく、騙されて死んだ悔しい死であるかも知れないと思つたようになつた。

父母は名誉よりも悲しい死だと思つたようだが、靖国神社に祀られることには反対はしなかつた。しかし、心から納得しないまま、何回か参拝に行つた。

私たち一億国民が命がけで参加したあの戦争が、善良な世界の人々から忌み嫌われる侵略戦争であつたことを、心から感じない人も居たかも知れないし、またそう思わせたたくない資本家もいたわけで、遺族会などは、遺族年金に吊られ、名誉の戦死した者は国が祀るべきと唱えるようになった。

毎年八月十五日、天皇が出席して行われる国の戦没者慰霊祭でも「あなたがたは世界平和のための礎となられた。あなた方の志を大事に、今後世界平和に努めます」

と言う誓いをする。決して「侵略戦争の犠牲にしたことをお詫びします」とは言わない。

この反省がない限り、真の世界平和に繋がる道はないのです。

神国日本の作つた靖国神社の何十万人かの英霊は、国が誤つた侵略戦争の犠牲者として、根本的に考え方を變えて、新たな国民的慰霊の方法を考えるべきです。

今年東日本大震災で新たに沢山の犠牲者への涙を流したことでもありました。このような一大事もあり、戦後六十六年について考える機会も少なかつた。福島県の原発事故が放射能漏れという、原爆被災国として、ゆるがせない事態となり、長崎国際平和大会でも、今後原発に頼らない安全なエネルギー政策を求める宣言が行われた。

これは原子力被害の再考について、世界へのメッセージとして大きな意義があると思われまふ。

太平洋戦争が終わつて六十六年、世界各国が目覚ましい発展を遂げました。特に通信機器の躍進でインターネットメールは、独裁国家の民主化に大きな力となつてきました。正しい認識を共有することは何処の国でも大切な

事です。また、何事も発展の影には障害も伴うものだが、世界の歴史は、良く困難を乗り越えて、正しく発展してきました。靖国神社のあり方も、やがて正しい世論によって無理のない存在となるであろう。

民主主義の世の中には絶対に正しいと言いきれるものはないようで、意見の対立はこれからも続くであろう。ただ、戦争はどんな理由でも、やってはいけないと言いつけたい。たとえ一人の命でもその尊厳を否定して作られる平和というものはあってはならない。

私は今、デイサービスに通っていて、障害のある人たちが一生懸命生きようとしている姿を見ると、とても尊いと感じるようになった。病気や障害は誰も自分から招くものではない。ふりかかった災難であり、健在の者は少しでも楽になれるように協力しなくてはいけないと思う。このようにひとりひとりが思うようになれば、そこに福祉社会ができて、みんなが気持ちよく暮らせるのではないか。

そんな思いをした八月十五日でした。

戦没者慰霊祭

八月二十日、土曜日。晴れ。今日の我が家は予定が立て込んで、ばあさんは日詰の弟啓二さんの所へ、タコ姉さんと一緒に仏参りに行く事にしており、八時半頃美智子の車で出かけた。文生は幸助さん宅の京子さんと幸辰さんの合同供養に招かれて出かけた。旧湯田町の遺族会主催の慰霊碑前での合同供養参拝、十一時の通達があったので、それには私が出ることにし、早恵子に送られて出席した。腰が曲がつてからは何時も文生に出て貰っていたが、今年は無理して私が出た。暫くぶりで川尻小学校「今年から廃校」の隣にある南昌寺前の慰霊碑に集まって南昌寺住職の読経とともに合掌した。この碑は今から四十数年前に建立して、兄の名も刻まれている。総数何名だか覚えていないが、先の太平洋戦争が終わって十六年になる。坊さんの話によると、「大地震にも耐えて余り壊れていないが少しひび割れもあるので手当てなさった方が良いだろう。その際は私もお手伝いしたい」と言われた。

遺族会も年を経て今年は二十名足らずの人が集まった。久しぶりで会った人たちからは、「良く達者で来たごどよ」と言われた。また本のお礼もあり、思わぬ言葉も掛けられた。腰を曲げていかにも老人らしい姿は、ひとの同情を頂くことになってしまった。

お天気はよくておかげだったが、暑くはなくなった。今日は二十日盆で川尻地区はお祭りだ。お神輿を担いだ人たちが大勢練り歩いていたし、門ごとにしめ縄も張りめぐらされて、お祭り気分がした。

暦を見ると旧暦の七月二十一日で、昔のお盆と揃ったかたちだ。大抵は新暦の九月のはじめ頃からお盆になるものだが、今年は丁度一ヶ月遅れでお月様に恵まれたお盆となり、盆踊りも久しぶりの十五夜のおどりとなったようだ。



庭の花たち

「お盆の頃には何も咲く花はなくなってしまうだろう」ばあさんはそう言って寂しげにしていたが、千本桜も益々盛んに咲き、ピンクとさらに濃いピンクが輝いた。白いマーガレットもまだ散らない。ネムの木も今年はいつものより沢山咲いて庭を飾ってくれた。

軒下にポツポツと生えている五、六本のバラも燃えるような真っ赤な花が次々に、そして白や薄い赤の花も花園のように壮大ではないが車を止めたとき真っ先に和ませてくれる。少しだが居間のガラス戸を開ければ目に飛び込んでくるマリーゴールドとケイトがあり、そのほか名前の知らない菊のように黄色い綺麗な花や、薄青く細かい細長い花も畑の彩りをしてくれる。

お盆の終わる頃から芙蓉の花が赤、白と大輪と小輪が入り混じり次々に咲く。柔らかい花びらだが美しく輝いてくれる。花たちよ、ありがとう



高校野球感

八十七歳のお爺さんだが、年寄りのくせに高校野球は大真面目に食い入って目を離さない。ほかの人が見たら、何でこんなお爺さんが夢中になるだろうといぶかるであろう。

私は若い時から高校野球は好きで見えてきた。プロとは違う純粹さがあるからだ。白球に思いつきり若さを打ち付けて行く迫力にはなんとも言えない爽快さがある。

子供の頃校庭で遊んだ野球は只の遊びで、ボールの投げ方など考えた事もなかった。しかし今見ていると、一球毎に投げ方、ひねり方がありそうだ。またボール一つの幅や上下を一回毎に変えるように工夫しているように見える。捕手が指で送る合図で投手との意思疎通があり、頭脳も重要な戦いだ。そして一つ一つ監督が陣地で指揮をとるのも約束された合図で、監督の指示も勝負を決める大切な事項だ。

同点で迎えた最後の満塁場面で表情を変えない胆力も、高校一年や二年の子供ながら、その度胸の強さに圧

倒される。

打たれないストライクをどう投げるか、あれこれ工夫するであろうが、迷いや心配がないと言えば嘘になるかも知れない。監督の指示もあるかも知れない。バッテリ一の判断に任されることもあるかも知れない。いずれにしても最終的には自分が決断して最良の投球をして結果を待つことになる。

私はこの悩みと決断に対して結果はどうであろうと選手の一投に拍手を贈り、その勇敢を賛美したい。



農林漁業を思う

子供の頃日本では、農は国の基と言われ、貧しかったが一番安定した職業として、全国で最も多く営まれていた。農民人口は国民の割合でも多くを占め、昭和初期までは日本の政治家は農民票を重視していた。林業も漁業も手作業で、経験による技術で仕事をして来た。

しかし昭和二十年に終戦と共に外国文明も入り、手労働から機械作業に変わり、農業より機械技術の進んだ工業生産が有利となり、農林業はどんどん縮小された。

世界の機械文明は次々に新しく便利で、さらに大型化し、大量生産へと発展した。企業や消費者はその恩恵を受けて、以前より楽に生産したり消費したりする事ができるようになった。

戦後も六十六年になったが、夢にも想像しなかった物質文明が生まれ、人々の生活様式もまた一変してしまつた。このような変わり方は便利で豊かになるばかりではなく、通信機器のインターネットのように不当に個人情報報が流されたり、原子力発電の事故のように、ひとたび

誤れば、空気も水も汚染され、農林漁業のすべての生産物が利用出来なくなるなど、人間や自然の生存を脅かし大惨事となる。

今、私たちはこのことを現実に体験している。決して他所の事でもなければ、昔の事でもないのだ。

文明の開発にあたって、大よその防衛策は講じているが、それでもこうした被害が起こる。さらに膨大な費用を掛けて対策を取らざるを得ない。こうしたイタチゴッコはいろいろな場面で出てくるであろう。それで税金の負担が増えていくことになる。

でも今までは多くの人間の生活は支えられてきた。これからもそうであろうと信じた。

九十年近く暮らしてきて思う事の中に、今のスーパーの果たしている役割を考える。人間の生活には食料の利用は何年経っても必要だ。その食料生産には地球を守るコストも考えられなければならない。

安いことで消費者は良いにしても、生産者はその生産を続けられず、外国や大型栽培者から低価格で仕入れて地元農家が潰されるようではなにか円滑さが欠けているのではないか。

この辺ばかりではなく、今は何処の農村も野菜などは作らずスーパーから買って来て食べている。農家が野菜を作れない、米も作れず田圃が荒れていく。これで日本の産業政策が正常と言えるか。私はどこかが狂っているという気がしてならない。

今から四十年前も前、農協の総会に行くと、農家の暮らしを守るために減反しなさい、農協も合併しなさい、と、中央会から毎年そういう指導がされるものでした。しかしいくらその指導に従っても農民は追い詰められるだけでした。

今も田圃や畑が荒れて、農業をしていた人たちが食料を買って食べるようになった。実りの農村が、なにも作らなくなることも農政のありようによるものだろう。

農民のひがみと聞こえるかも知れないが、農民が排除される農業政策には農民の要求を掲げて闘うことを忘れてはなるまい。

数年前までは農協も大きな看板で「農産物の輸入反対」とか「日本の米を守れ」とか農民の要望を掲げて闘いの意思を表したのだが、大型合併するとその必要はなくなっただけか旧農協単位で議論されることもなくな

った。

いろいろ見てくると農協が大型化し、農産物の生産調整する度に農民の暮らしが豊かではなく厳しくなってきたことは間違いない。林業や漁業についてはよく判らないが、似たような傾向ではあるまいか。このような過去について農林漁業民は良く見直すべき事と思われる。

弟久巳が死んだ

八月二十二日 夜一時半トイレに起きて眠れずにいたら、二時を少し回った頃電話の音が聞こえた。今頃の電話はいい知らせではないだろうと思っていたら、二階の文生が受けて、間もなく「北上の叔父さんが死んだだよ」と声を震わせて伝えに来た。

久巳は一週間ほど前に電話をよこして、少し咳きも出るし、もう少し経ってから行くとのこと、体調を崩しているとは思った。しかし普通より少し悪いくらいだろうし、そのうち来るだろうと待っていた。特に変わった様子もきこえてこなかったので大した気にかけていなかっただけに、信じられない驚きだった。

しかし夜中でもあるし俺とばあさんは明日まで行かないで、とりあえず文生と早恵子に行ってもらった。四時頃戻って来たが、心筋梗塞で急に死亡したとのことだ。死体は霊柩車で運ぶがまだ時間がかかるということで引き上げて来たのだという。わたしたちも一晩眠れず朝を迎えた。早恵子は仕事に行き私とばあさんと文生が八

時過ぎに久巳の家に向かった。迎えてくれた長女の田鶴子が泣きながら戸を開けた。遺体のそばに行き、あまりの悲しさに声を上げて泣いてしまった。

久巳は私より六年年下だが真面目な性格でよく働き、北上に土地と家を自力で買い、二人の子を育て、定年後もごく最近まで新聞配達や、直ぐそばのお菓子工場に働いき、まともに生活していた。五、六年前に一度心臓発作で倒れたこともあったが、その後健康で病氣らしいことはなかった。

私が酸素吸入をするようになってからは私のことを心配してくれたし、生家として我が家の為にも良く尽くしてくれた。私はとても頼りに思っていた。だから六つも年下の弟なので私は死ぬまで世話になれると思っていた。突然先立たれ非常に悔しくてたまらない。

今年も家のそばの山に蕨取りに来て喜んで帰ったことも、私のばあさんと同級生で毎年同級会の幹事をやってくれたことも、みんなに頼りにされていた。友達も大事に思い、既に亡くなった同級生三人にもよく見舞に通い親身に励ましたり、真面目で優しい人柄は私だけでなく多くの人に良い感じを与えた。

私が平成二十一年四月、自分史「俺らの一生」を発行したことを祝って、兄弟と子供たちだけのこじんまりした祝賀会を呼びかけてやってくれたことは嬉しかった。

貧乏農家の三男に生まれ、戦後のどさくさの中、勉学を志し湯田炭鉱会社に働きながら川尻定時制高校に通い、さらに大学を目指して上京。苦労しながら、親の支援も受けたが、良く頑張って法政大学を卒業した。当時東京では余り良い仕事にも就けず何年か過ごしたが、結婚してから岩手県の教員に就職できて、沿岸部の中学校に勤め、後に横川目へ帰って来た。遅く教員になったから退職するまで上級職に就くことはなかったが、真面目に仕事を全うして無事に退職した。それから数年経てから宮古方面の教え子たちの結婚式に招かれたり、仲人を頼まれたりするほど生徒に親しまれていたようだ。

長女は花巻に稼ぎ孫が一人いてもう大きくなり一人の女の子は既に就職している。小さい方は男の子で中学二年生。父親より背が高くなっていた。家は北上とは近いので、よく久巳と来ては遊んだ。次女の祐子は結婚して松田の姓になったが夫の美津也さんとともに後を継ぐことにしたようで久巳も喜んでいた。

久巳も八十一才で、まだ惜しまれる年だが高齢者になってしまった。その足跡は、生来の真面目と優しさが多くの人に認められ信頼を集め、立派な人生だった。

後顧の憂いはなくなったかも知れないが、私はまだまだ兄弟を奪った運命が憎い。しかしどんなに惜しんでも久巳は帰って来ないでしょう。

久巳よ、あと少しかもしれないが魂の一部は俺の胸で眠ってくれ。俺はお前の心をあくまでも愛しく思っているよ。

久巳の葬儀

八月二十六日。金曜日。晴れ。六時過ぎに起きて大台野まで散歩、大台野の幹雄さんのところまでの距離は九百メートルだから往復すると一八〇〇メートルだ。一休みして、鳥や蝉の声を聞き、通って歩く車でもなかには俺だと判ってベルを鳴らして行く人もある。戻って来ると少し汗ばんで、四十分以上掛かり、家に入って休む。散歩の時は酸素をやらなくて歩くがそんなに苦しくはない。でも帰ったら直ぐ酸素をやる。

二十二日未明に亡くなった久巳の葬式はお寺の都合や友引もあつて、今日午後一時から北上の長安殿葬儀場で行う事になっていた。我が家では家族四人みんなと娘の民子も来ていて一緒に一台の車に、そのほか文生の車には細内から幸夫とチエ子それに越中畑のヒデさんの四人で出かけた。

総議場の長安殿は初めて行った。余り大きくはなかったが立派な施設だった。沢山の参列者が来てくれて有難いと思つた。思いがけなくも神奈川から晃が、また茨城

から文子が来てくれていた。

一時から葬儀が始まった。宗洞宗の尚明寺の和尚さんによる読経も厳かで丁寧に読まれた。余り長くなく、弔辞の時間になった。正式に弔辞を行う人は一人で、久巳の教師の同僚であった及川さんと言う人が懇ろに懐かしい思い出などを述べてくれた。次に私が送る言葉と言う事でメモによる話をする事になり、あらかじめ用意したメモを読もうとしたが、涙もろく中々話にならなかった。それでもこらえてなんとか話を結んだ。とても辛い思いで話した。それから田鶴子の娘と息子(久巳の孫)がお別れの話をしたが、これは泣き声が多くて聞き取れなかった。それほどお爺さんが名残おしかったのである。姉の方が高校を卒業して仙台で働いていると言っていた。そのあと予定外に退職者共済組合からの弔辞も頂いた。弔電も沢山頂いたお知らせがたつた。

弔電の披露や喪主の謝辞は次女祐子の夫松田美津也さんが行ったが、自然体で聞きやすい話で印象が良かった。

葬儀は三時に終わり会食には参加しない事にしてしたが、和尚の隣に席を用意したので、席に就かないと形

が取れないと言われ、ばあさんと一緒に参加した。沢山ご馳走も出たし、隣の席の坊さんも優しく話しかけてくれて、出て良かったと思った。

後ろを向けば久巳の遺影が良く見えて、此処から出て一緒に歓談出来たらいいのにも思っても、もう語り合う事は出来ない。今この人を偲ぶために多くの人たちが集まっているのだと思うと、なにか異様な感じがした。なぜ久巳が偲ばなければならないのだ、俺が偲ばれていても不思議でないのにも思った。

諸行無常の世の中は、思わぬことに突き当たりながら、正常でないことも越えて行かねばならないものなのか。そんな思いをしながらガヤガヤと談笑する中で一時を過ぎ、みんなより一足早く控え室で休んだ。

葬式は厳粛でみんな緊張するが、飯台供養となると和やかになり久しぶりとか、初対面とか、すべて盃で談笑となる。そういうことでお互いのつながりが始まったり、深くなったりするからある種の役割を果たすことになる。

私は年寄りですべて文生にやって貰ったから何も心配する事もなく葬儀は終わり、五時ごろ家に向かった。

何もしないでも疲れたような気で家へ着いてすぐ寝転んだ。もう久巳はこの家に来ることもないし、話すこともなくなってしまった。儂ない終わりだったとしきりに思った。

民子 仙台に帰る

八月二十八日。日曜日。晴れ。朝六時に起きて大台野まで散歩する。ラジオを聞きながら、手押し車につかまって体を斜めにして歩くのを散歩と言えるか。余り楽しくはないが、ラジオでニュースや音楽を聞き、道端で何か今まで気付かなかったことが見えたりすることもあって面白い事に出会うこともある。三十分くらいで戻り、アスパラ畑に行ってみた。アスパラも伸びて倒れ掛かっていたし、草も伸びていた。畑の草取りはそれほど嫌ではないが、腰が痛くて苦手になってしまった。三十分位取って家に帰り、腰を伸ばして酸素ホースをつけて寝転んだ。

文生はこの頃消防演習と久巳の葬儀準備と重なって忙しかった。昨日葬儀が終わり、今日は演習日終わりで朝早く出かけて昼頃帰って来た。

民子（長女）は久巳叔父さんの葬儀のため、二十五日に来て三晩泊って今日帰った。民子は仙台に住むようになってもう三十年近い。今年は大震災に遭って大変だっ

た。入っているマンションは大破したが、家族はみんな無事で、不幸中の幸いだった。

時々夫と二人来て泊ることもあるが、よく冗談を言う。ユーモアが面白くて本当の話がどれかわからない時がある。二人とも料理がうまくて、来るとよくやってくれ、うまいものが食べられるから嬉しい。

この二十六日は五十九歳の誕生日だったが、叔父さんの葬式にあたってお祝いはお預けとなった。二人の子育てが終わり、四十歳頃からパッチワークに魅力を感じてやり始め、今も続けている。細かくて根気の要る針仕事をどうして面白くなったのか不思議だ。

東京や大阪などあちこちに仲間が出来て、全国コンクールに出品したり、ヨーロッパに旅行したり、また何箇所かで教室を開いたりするように成長している様だ。そんな素質がどうして出来たか、驚きものだ。

いつもお金がありそうでもないが、少ない謝礼金などを蓄えてやっているらしい。俺たちの子にしては良く出来たものと思っている。また、健康の為水泳をしたり、三時間もテクテク歩く事も欠かさずやっていると云っていた。

お金がなくても健康で家族が円満で暮らしていれば、それ以上望む事はない。野球帽子みたいな帽子を被って細いズボンをはいてオンジユみたいにして、シタシタ歩いて湯田高原駅まで行き、十時半頃の列車で北上に向かって帰って行った。

年とった俺たちのことを案じているようだ。何事も無く暮らして、時々来てくれれば嬉しいと思う。



民主党代表決まる

なかなか止めない菅直人総理がやっと辞任することになり、代表選挙が今日行われた。政権党の代表は総理大臣となるので、一日一杯放送された。

今回の選挙には五人も立候補したので、誰が代表になるか予測が出来ず、やや関心を集めた。前原誠司、野田佳彦、海江田万里、馬淵澄夫、鹿野道彦の五氏で、最大派閥の小沢一郎氏は海江田さんを支持すると宣言し、海江田さんは一回目が一四三票だったが過半数には達せず二番目の野田さんと決選投票となり、逆転して野田さんが二一五票を得て代表に決まった。

民主党政権になって三人目の首相となるわけだが、総選挙を経ないで、言わば民主党の盪回りで二人目の首相となるわけだ。国会が順調に進むわけもなく、震災復興も放射能対策もまだまだ期待出来ない。国民不在の体制だから不安が続くことになりそうだ。



ねじれ国会下の政治

民主党政権は平成二十一年八月三十日の衆議院選挙で過半数以上の当選を果たして誕生した。発足したばかりの鳩山首相は沖縄基地問題で失敗し、僅か八ヶ月で辞職した。次の菅直人内閣は選挙の洗礼なしで発足し、約四十日後の参議院選挙で大敗して以来ねじれ国会となった。

ねじれ国会とは衆議院で可決しても参議院の数が少なければ法案審議で否決されて法律が成立しないか、もしくは長く掛かることになる。

二院制は法案を吟味して、よりよい法律を作るためのもので、多数派工作で弄ぶものではない。

参議院は衆議院と同じ所属政党の政策に同調するだけでは正しくない。政党政策から距離を置いた所謂良識の府として、慎重かつ公平な審議を尽くし、広く国民の利益を守らねばならない。

両院が正比例しないとねじれ国会となるという認識は一般的だが、それも考え直す余地はないだろうか。参

議院議員たる者は良識の府の一員として、政党の駆け引きに参加するのではなく、国民の為、今何が緊急に行わねばならぬか、中期、長期にどんな方策が必要か等々、真剣な働きを望みたい。

今日はまたねじれ国会のままの首班指名国会で、野田佳彦さんが選ばれたが、先が案ぜられる。

千年に一度といわれるこの大災害に、ねじれ国会はなしにして、全員が一致してこの国難を乗り切って貰いたいと念願するものです。

登苑日

八月三十一日。曇りから少し雨。水曜日。

前の週は二日休んで今日清水苑に出た。暫く欠席してしまつたような気がする。

北上の弟久巳が二十一日未明に突然死亡したので、二十四日と二十六日は欠席した。あれからまだ心がすつきりしない。

登苑日と書いたが、清水苑の苑は幼稚園の園と同じ意味だということだったので今日はこう書いてみた。出席する日は利用日とも言うようだ。しかし私は幼稚園にでも行くような、待ちどうしい、楽しみのある日なのだ。だから本当は幼稚園の園がいいようだが、作る方は子供と区別しないといけなかつたのか、この辺には光寿苑、(老人ホーム) 蘭寿苑(旅館) 霊苑という苑が多い。花園(はなぞの)のように集める、とか集中とかの意味があると辞書には解いてある。

八月三十一日は八月の終わりの日だ。明日から九月に入る。曆ではとつくに立秋が過ぎて、いよいよ秋かなあ

と思われる。

清水苑に着くと職員の方々が私に対して、弟の死亡にお悔やみの言葉をしてくれた。家族のような温かみで有難いと思つた。

入浴のあと、少し疲れを感じたので布団の上に休んで自分史を見ながら居眠りした。昼食後の昼寝は少し眠つた。午後は軽い体操の後、間違い探しで頭の体操。東海林さんが、萩野れい子さんの小学三年生の子供が沢内甚句の民謡大会に出るそうだ、九月二十三日 さわうちバーデンでやるからみんな観賞してね、と言う。それから萩野れい子さんから、「明日から二階の方で勤務することになり、ここからは移る事になりました。お世話になりました」とのこと。良い人に離れられることは惜しいと思つた。でも二階に居るなら良いと思つた。

終活行動について

昨日の夕方テレビで終活という新しい言葉が出てきた。何の事かとよく聞いて見たら、最後の人生をどう締めくくるか、ということだった。

私もこの頃そういう気がしているので、さらに見た。それにはある人が、エンディングノートという、遺言を判り易く記入出来るノートを考案して売り出したら、大変良く売れているということでした。そしてそれが、以前は高齢者が多く求めていたが、震災後は若い人も買うようになった、とのことだった。

人はみな生きた足跡を伝えたいと思っているが、中々書く事に迷い、何も書かないでしまう人が多いでしょう。私は何年か、下手でも日記をまとめた自分史を書いてきたので、大体のことはわかるでしょう。だからノートを買って書く気はしないが、今まで仕事をした後片付けをしないでしまっているのが気が掛かりだ。

借金はなくしたが、今も将来も使う事の無い、大きな牛舎は、壊すのに大変な金が掛かる。これから計画的に

取り壊しをするのも、時期が遅すぎる。もつと早くやるべきだったが、やらないでいまは後にツケを残すことになる。申し訳ない次第だ。

働けるうちは働いたつもりだが、この牛舎も二階は新しい材料で捨てるにはもったいないくらいだ。もう少し時期が経てばほしい人も出てくるかもしれない。でも今は古材料などは捨てて、新材で建てる方が経費は少なく済むのだから、もったいないなんて考える者はいない。終活を考えるとこの事はいいことだ。自分の足跡を確認することでもあるし、遺族に伝えたいことを整理して残すのだから、遺族にとつてもいいことだ。

さて俺の終活はまだまだ悩まないとならないようだ。

九月はじめの災害とニュース

野田内閣は八月末から九月二日までに成立した。新内閣が出来たので、政治問題が賑やかになるべきだった。

台風十二号が日本列島に近づき、大型で時速十五キロという遅い速度で、中心がまだ上陸しないうちから大雨や大風などをもたらした。和歌山県、奈良県などで大量の雨が降り、山際の部落の山崩れで数多くの家が押しつぶされた。四日夕方までに奈良県十津川という所では四五日間に一八〇〇ミリと言う年間降雨量の三分の二にあたる雨量を観測。今までにない大雨で、四日夕方までに全国で死者十七人、行方不明四十三人、けが人九十八人という。まだどれだけの死者になるか判らない惨事で、高い山の部分に降った大雨で、平野部に押し流される水かさは市街地の堤防を破り、膨大な水溜りになった。

なんともならないことは、暴風雨が何日も同じ所からなかなか移動しないで傷めつけることだ。人命に襲い掛かる災害は何よりも大事件で、テレビなどの報道機関は休みなく報道した。

この影で、サッカー女子オリンピック予選が中国済南で行われ、タイを破り、韓国も破り、オリンピックの切符に近づいて来た。台風の影ではあるが明るいニュースとして、日本国民に元気が送られた。

サッカーは人気スポーツになってからそんなに古くはないが、国際大会はみんなが夢中になって、自分の国が勝てばいいと力を入れて見る。女子だって男子と同じ運動量を駆け回り、ぶつかって怪我をしたり、スピードのあるシュートで争うから、どれだけ体力を使うか。感動する。

やはり災害の影になった野田内閣の成立も、世論の人氣は少し良くなったが、ねじれ国会には変わりなく、これからはどれだけ自民、公明に寄り寄って行くか。自民党に変わる政治を求めた二年前の選挙で示した国民の意志に対する政治はどう変わって行くか。この分だと元の木阿弥になってしまおうではないか。

九月五日

朝は霞んでいた。涼しく散歩は丁度良い。一・五キロくらい歩いた。月曜日。晴れ。文生の車でばあさんと一緒に横手の山田眼科医院に連れて行ってもらった。月曜日は患者が多く、長くかかる。眼科だって年寄りが多い。酸素使用の人は私一人だが、腰の曲がった人、体が不自由で付き添いが付いている人が沢山見える。今日は途中から早く診てくれるようにしてもらった。眼底検査、視力検査は大体年相応の結果が出るようだが、サカサマツゲは診断の度ごとに出ていて、取り除いてもらわねばならない。今日は私が速く出来たが、ばあさんの方が長いかかり、薬を受け取って十時半頃となった。それからイオンで買い物となるが、俺はよほど前から店に入っていることはない。歩くのが大変だから、車の中で本を見ながら待つことにしている。店に入ればお金が掛かる。食べものだけで八千円使ったと言っていた。

昼近くなったので、近くの栄助寿司に行き、回転寿司を食べる。回転寿司は好きなものを好きなだけ食べて、

割合安く済むので便利だ。三人で食べても二千八百円だったという。この頃は贅沢になってあまり旨いものはないようになってきたような気がする。

文生が午後花巻に出かける予定があったので、食べた後は直ぐ家に帰った。

俺はパソコンに向かい、いろいろあったことを記録してみる。

野田内閣誕生、台風十二号、なでしこジャパンの勝利などだが、それより近い同級生の死があった。

今朝聞いたが、野の宿の高橋金作さんが亡くなったという。あんなに若々しくて、ママママしていた奴が俺たちより速く死んでしまったなんて惜しいに決まっている。八十八歳といえは若くはないとも言えるが、この頃の八十八歳はまだまだ先がある時代でもある。

彼は一ヶ月以上前にベットから落ちて首の骨折をし、平鹿病院に入院したと聞いていた。我々の年代で骨折は重大な怪我だ。しかし彼の事だ、少しくらい後遺症が残ってもまた退院して来るだろうとも期待していた。それだけに彼の死は惜しい。去年小原清治さんが亡くなって、また金作さんが亡くなったから余計寂しい。ゲートボー

ルの名選手と聞いていたから、その仲間たちも残念だろう。何事もきちんとした性格だったことが偲ばれる。

台風十二号は早くから非常に大型で、日本列島をすっぽり覆い尽くす大きさを、雨、風も台風の中心が遠くにあつても近畿、四国、中国地方に激しく襲っていた。しかもその速度は時速十五キロと言う自転車並みの遅い歩みで、大量の、そして激しい雨風は何日も同じ所を直撃して傷みつけるといふもので、報道を聞いていてもむずむずするほどだった。

此の災害は和歌山県、奈良県、三重県など主に紀伊半島が、豪雨で山崩れや大洪水など大きな被害を受け、人命も沢山失われた。およそ何百年もなかった大豪雨で、沢の奥深く、幾つもの沢が山崩れで、家も道路も潰され、ずたずたに断ち切られた。多くの人々も亡くなった。

今年には東日本大震災や新潟県、福島県の大洪水、それに続いて今回の紀伊半島大災害と随分酷い災害に襲われた年であった。

こんな中で、退陣を迫られても中々辞めない菅内閣が八月末にやつとやめることになり、九月二日野田内閣の誕生となった。やはりねじれ国会のまま、選挙なしで民

主党盟回し二つ目総理と内閣ができた。この内閣は待たなしの災害復旧予算を作らねばならない。

挙国一致と称して自民党、公明党の政策要求も受け入れて、二年前国民と約束した政策とは違った路線を歩くことになる。台風の歯止めもあり、通常の政治は益々遅れる。野党は早く解散しろと言う。選挙という政治空白を作っている余裕がないと言うが、空白論争が多くて選挙して出直した方が政治は進んでいたかも知れない。

外交や国際経済情勢なども、休みを取り戻さねばなるまい。満足出来ない発足と、前途は厳しいと思うが、なんとか国難を乗り越えて国民に幸せを与えるよう頑張つて貰いたい。

もう一つ。なでしこジャパンの大活躍で明るいニュースが届けられたこと。今日午後四時半より、中国済南市で行われた女子サッカーオリンピック予選で、オーストラリアとの対戦をテレビに囓り付くようにして見た。オーストラリアの選手は日本と比べて背が高い。シュートも遠くからスピードのある攻撃をする。日本は前半四五分間で何回もチャンスを逃して、もどかしく思ったが0対0で終わり。後半の早くに日本は一点を入れた。も

う一点入れないと危ないと思って見ていたが、その機会はなく、ハラハラしながら終わりを向かえ、なんとか逃げ切って一点先取を守った。

サッカーは日本ではまだ最近のスポーツだが、広いグランドを全力で駆け巡り、一つのボールを足で蹴り、自分のチーム同士で確保しながら敵陣の狭いコートを破る試合だ。物凄い運動量でよくもこんな体力が続くものかと驚く。そんな試合をこんな年寄りが夢中で見ているんです。

ところが俺ばかりではない。選手の出ている地元では、必勝と書いた鉢巻をしたお婆さんも、やはり夢中で応援しているのがテレビに映っていた。

実況放送を見て気が付くが、中国済南市と言う広いグランドの観覧者席には一人も人影は見えないことだ。日本や欧米の球場では、満員の観客や大応援団で賑わうのだがどうしたものか。今は何処の国でもスポーツ競技は大人気なのだが、ちよつと不思議に思う。

人気とはなんなのか。スポーツ選手には多くの人が熱中して拍手を送る。それはどういふことなのか。より高く、より速く、理由のない美しさがあるから、人々は我

を忘れて拍手を送るのだろう。

九月十一日

平成二十三年九月十一日はアメリカ貿易センタービルがアルカイダのテロにより壊滅的打撃を受けてから十年になった日でした。

同時に、東日本大震災から六ヶ月目の日でもありません。岩手県では、知事、県会議員の選挙投票日でもありません。

アメリカでも日本でも被災者の追悼が大々的に行われ、この日を忘れず、平和や復興を誓った。どれもみんなが忘れられない日です。

特にアメリカは直ちにテロ対策の報復攻撃に乗り出した。先ずイラクが大量化学兵器を隠しているとして、徹底的攻撃が行われ、沢山の死傷者を出した。しかし化学兵器は見つからなかった。続いてアフガニスタンを攻撃して、一応沈静化し、新しい政府を成立させた。しかし十年経ってもタリバンの攻撃やテロが終わらず、今でも死傷者が後を絶たない。克つてのベトナム攻撃と同じだ。

この頃のアメリカ世論でもテロ対策を批判して、アメリカのテロ対策は世界のテロをかえって拡大させている、しかもこのことに政府は気づいていないからなお大変だ、と言って対策の誤りを指摘した。

テロに対しての報復攻撃は間違いであることは、わかっているはずなのに、どうしてこんなに多くの人を殺す戦を続けるのか。

アメリカの貿易センター爆破のテロは、世界を震撼させた。十年経った今、アメリカの人たちは犠牲者の慰霊と、再びこのような惨事が起こらないことを願っていることだろう。

テロや戦争は、民族や宗教問題も絡んでいて複雑ではあるが、これからの社会、殺しあう事ではなく、時間を掛けても話し合いで解決を図るべきである。判っていないが、止められないのだろうか。人間の知恵で越えてもりたいものだ。

大震災から六ヶ月も大事な節目だ。余りにも大きな災害だから、政治家たちの進め方に文句はあるにしても、原子力発電所からの放射能漏れは、なにかも狂わせてしまったと感ずる。

マグニチュード9という地震は千年に一度だというが、その後震度5くらいの地震が数え切れないほど起こった。地球の地底はどうなっているか。千年に一度といわれる地震がまたすぐ起こるかも知れない。世界中の原発や核兵器の保存は、いよいよ安全とはいえない時代が近づいてきたのではないか。

大震災を忘れずに、ということ、今ある危険なものを、今後どう扱うかについて考えることでなければなるまい。

選挙については、県知事、県会議員は中間地域の政治で、あまりよくみえないから関心は薄い。しかしこの度のように大震災に見舞われた時は、なんとしても復旧、復興しなければならぬ。勿論県の力だけでは及ばないわけだから、県民の願いを実現する為、知事、県会議員は一丸となつて、最低でも県民に元の生活を取り戻す働きが求められる。

再び災害に会わないように、また災害に強い岩手県作りに、独自の知恵を磨く事も大切です。県として県の力を養うことの大事さを改めて感じた次第です。

今日、投票はしたが、アメリカテロ十周年、大震災六

ヶ月の催しが大きく報道され、国民の思いも新たにされた。また夕方からは大相撲が始まり、夜は、なでしこジャパンのサッカーがあつたりで、選挙の行方は注目から外れたが、現下の県民の意志が示されたと思われる。

隠居の定着

生産的仕事から離れて、何にも働けなくなつてからもう三年になる。仕事の現役からはなれることを隠居というとしたら、俺はとつくにご隠居さんだ。ご隠居さんといえは水戸黄門を思い出すが、あれは身分の高いお殿様の職を次世代の者に譲り、まだまだ健康な体で自分の好きな旅などを楽しむ身分で、羨ましい次第だ。しかし俺の場合はそんな羨ましい存在ではなく、腰が曲がつて痛くて仕事ができなくなつて止めてしまつたのだから、隠居ではなく落伍者のだかも知れない。

貧乏百姓の癖が染み込んでいるものだから、働けなくなつた時は悩みが耐えなかつた。働けないと言うことは生きていく意味を失つてしまつたと思つた。

それからいろいろ悩みながら、俺は知つているが俺が死んでしまえば誰も知らないから何もなかつたことになつてしまう。それではいけない。是非後に伝えておかなければならないことを書き残して置こう。その一つとして、兄藤見の戦死のことである。そのことについて六

十年前の兄からの手紙や私の日記があるので、それを纏めて、実物とともに、誰にも判るようにして置こうと思つた。北上に居る弟久巳の協力を得て「兄藤見の思い出」という簡単な冊子を作り、それから「私の従軍思い出記」をペンで書きコピーして戦友たちに送つた。その後文生からパソコンを教えられ、右手の人差し指一つで文章を入力して、二年ほど掛かつて、「自分史 俺らの一生」を作り、これは印刷屋北上プリントに頼んで少し大げさに作つた。

こんなことが病みつきになつて、俺はなにもしないことを余り悩まず、思いついたことをパソコンに書き込み、日記兼エッセイをやたらに書いて楽しんでゐる。

こういう生き方を百姓の落伍者と呼ぶべきか、隠居と呼ぶべきか。体裁の良い隠居と呼ばば、俺も隠居に定着したのかなあ。

猿と人間

テレビが進歩して猿の生態などをよく知る事がある。猿は最も人間に近い動物で、野生の猿や、動物園での生活も度々見る機会がある。

野生の猿でも道具を使い、自分たちで工夫して活用しているようで、知恵も発達している動物だと思われる。堅い木の実を石を使って割って食べたり、木の幹の穴に細い木の枝などを差し入れて中に居る虫を誘き出して食べるなど、人間並みの知恵が覗かれる。

人間は猿から進化したともいわれていたし、そうとも思われる。何万年も前にアフリカ大陸から分離されてインドが出来た頃、人間も四足で猿と同じように這って歩いて居たが、東アジアに付着してから次第に二本足で歩くように進化したということをテレビか何かで見たような気がする。

テレビで見る猿は、野生でも、動物園でも、少しは立って歩くが普通は四足で這って歩いている、しかし人間がいくら丁寧扱っても、人間らしく進化

しては行かないようだ。何万年も掛かったら次第に少しずつ変わって行くものか。

俺はこの頃腰が曲がって、散歩する時も手押し車にしがみつくようにして歩く。手押し車がなければ這って歩くことになるだろう。そうすると、いつか人間も猿に戻り、猿が人間に進化するかも知れない。なんて変な想像をした。

猿から進化して人間ができた。そういう事は多いにありそうだ。してみると今の猿たちもいつか人間になるのかなあ。

こんなつぶやきを猿たちが聞いたら、怒るだろうか。喜ぶだろうか。歯をむきだして笑うに決まっているよな。

間もなく逝去した夫婦

同級生の金作さんが亡くなったのは四日のようだ。七日の葬式には文生を頼んでお参りしてもらった。そして昨日、長年連れ添ったヤエ子ばあさんが亡くなったと聞いた。僅か九日の間に夫婦二人とも他界してしまうという悲しい出来事となった。

ヤエ子さんは細内生まれで、戦時中の若い時は青年会の演芸会などで一緒に演じたこともあった。明るい性格で、会えばいつも楽しい人だった。私の書いた「俺らの一生」を読んで「面白く見せてもらった」とわざわざ電話をくれたときもあった。

金作さんはおとなしくてとても正確な人だった。夫婦中もよく、二人そろってよく働き、二人の子供もよく育て子供たちにも親しまれ、いい家庭だった。

金作さんもちよっとした不注意で怪我をし、一ヶ月余りの入院で亡くなった。ヤエ子さんは最初中気(脳卒中)で入院し、再び入院した時はほかの病気のようで、夫の後を追うようにして亡くなってしまった。

息子さんは文生と同級生ということ、今日もまた文生がお参りに行った。

横手市のブドウ栽培していた温かい夫婦がいて、三年くらい前に大変お世話になった。私たちより若い人たちだったので、長くお付き合いできると喜んでいたら、突然奥さんが亡くなり、半年後に旦那さんも亡くなってしまった。とても優しく親切なご夫婦で、いい人たちを失って悲しい思いをしたことはまだ忘れられない。

それに似たようなわびしきを感じた友人夫婦の最後だなあと思う。

人生の疲れ

人の寿命とは生まれつき定まっているのか。それぞれの人が生きているうちに切り開いて行くものか。余り考えることもないが、どんなものか。

怪我とか事故とかは、もしそれがなかったら死ぬ事はなかったと思いたいところだが、それも人生の定めだろう、と言う人もある。

また笑い話と思うが、病気で死ぬ人も、怪我で死ぬ人もいない、すべて寿命で死ぬのだ、と。

人はそれぞれみな違う道を歩いてきている。体格のいい人、劣る人、特技もみな違う。だから単純に比べてはいけないが、年を取ると、ある人の物忘れとか、動作とかを見て、俺より若さがあるとか、老けているとかを判断したりすることがある。老化とはその人の人生の疲れ具合の表れでもあろう。

この頃叔母の夫、富雄さんと一緒に清水苑に行っている。富雄さんは俺より五つ多い九十二歳だ。三年ほど前はいつも畑の草取りなど働いていて、腰も曲がらず俺よ

り若いと思っていた。しかし今は腰も曲がり歩くのも俺よりのろく、元気がなくなつた。急に老けたと感ずる。

それでも一週間に二日は悠々館に行き、二日は清水苑に、一日は医者と、家で休むのは二日だけというので、九十二歳の人としてはスケジュールが多すぎると思つたが、富雄さんはずっとこの日程を続けている。でも私の隣に座っているが、新聞や本と向き合つて居ても、ほとんどネムカキをして居るようだ。あれでは判るようには読んでいないだろう。それでも布団を敷いたところで休もうとはしないから心の休みはないに等しい。また人と話合つても直ぐ忘れるようだ。この忘れ方は俺より遙かに多いようだ。

あの状態は人生の疲れではないかと思うのだが、一週間に五日も通い続けることや、居眠りしても床で休むこともない根気はどこから出てくるのかと思う。

富雄さんは若い時は細内青年会のリーダーであり、昔まだ公民館のない頃、神社で書き取りや計算算術の勉強をしたりすると、何時も指導者を勤めたものだった。

また父親が大工の棟梁さんだったが、富雄さんは父の弟子であつた大工さんに弟子入りをして技術を磨き一

人前の大工になった。そして仕事に励み、やがて棟梁になった。責任感も強く、利用する人や、仲間の大工たちにも信頼されて忙しく働いた大工だった。昭和三十年以降は暫く、茅葺屋根からトタン葺きに変えて、建物全体が新式になる普請が毎年数軒あったので、大工さんはみな仕事のなくなる時はなかった。

また、北上や盛岡などに移転する人も、富雄さんに建て貰いたいという人もあって、そちらに向いて仕事をすることもあった。つまり若い時は全身全霊で忙しく働いたから、疲れがきても不思議ではないと私は思う。

俺は富雄さんを見てみると、疲れているようにも見えるが、なお根性の強さも見える。いずれ俺も人生に疲れる時がくるだろう。その時富雄さんのような根性は残るだろうか。多分俺には残らないだろう。

俺は今幼稚園にでも行くような気で清水苑に通っているが、何時までもというわけにも行かない。エッセイだつて書けなくなるであろう。

命ある限り自分を燃やしたい。

でも自分の最後を自分で決めることはできないから、それこそ定めに従うより他にない。一一九 一八



考えよう 原発事故について

三月十一日は東日本大震災で克つてない、広い範囲で多くの人が亡くなり、沢山の涙が流されました。そして世界各国から莫大な援助も頂きました。しかしまだ行方不明の被災者や、膨大な瓦礫も残っています。

こうした目に見える災害、そして悲しみは毎日テレビ放送されるが、原発事故による放射能の怖さは余り知らされません。放射能汚染は目に見えないが何万年も消えない害を流す、恐ろしいものであるが、天災ではなく人災であり、作つた者の責任を問われたくない為、なるべく触らないようにしている。

この事は重大です、日本国民はこの事を重大事件として捉えなければなりません。

日本は原爆の被爆国として、六十年間も核廃絶を訴え、世界各国から参加して毎年平和大会が開かれる。そしてその意味が次第に、世界の人々から理解されるようになって来た。

今度の福島原発の放射能汚染は広島の二十倍ともい

われ、世界各国も重く見る様になってきた。

ここで原発問題を取材し続けてきたルポライターの鎌田慧（さとし）さんの意見を紹介すると

『原発ほどカネで人間を支配する汚い事業はないです。莫大な電源三法交付金や固定資産税で、ものを言えなくしてしまふ。国と電力会社の「毒まんじゅう」です。しかも地域が一端引き受けると、カネが切れないように増設を続けざるを得なくする「モルヒネ」です。

もう一つ、原発運転のためには日常的に被爆する現場労働者が必要です、此の人たちの健康はほとんど顧みられていません。

過疎の地域と最下層の労働者に犠牲を押し付けた繁栄とはなんなのでしょうか。こんなことは許されません。』

と言うのが鎌田さんの報告です。

もう一人、脚本家の、ジェームス三木さんの報告は

『我々は歴史の中継者です。先祖から受け継いできた環境、生き方や知恵、文化遺産などを子孫にバトンタッ

その時に放射性廃棄物が何万年も残るといわれている原発を残しているのか。このままではあの時代に生きた人たちは最低だと言われかねません。我々は最悪のバトンを子孫に渡そうとしているのかもしれない。歴史を見ても、生物は自然環境に合わせて進化してきました。ところが原発は、逆に人間の都合で自然環境を変えようとしている。自然を放射能で汚染し、何万年も害を残す。傲慢な遣り方で、基本的に間違っていると思うんです。自責しなければならぬのは、既に日本は放射能で汚した水を海に流してしまっている加害者であることを、世界に謝らなくてはならないのに、まだ謝っていない。そのことだけ考えても日本は原発を持ち続けていいか、問われていると思います。』

と、解いています。

また、九月一九日 明治公園で、「さようなら原発五万人集会」が開かれて、国民運動となっています。

日本の財界や政府はこれでも原発政策を止めるとは言っていません。

原発廃止にはまだ一層の国民的運動を盛り上げるこ

台風が来るぞ

八月末ころ台風十二号が発生して、九月三日頃から数日紀伊半島の上空に滞在し、一〇〇〇ミリを越える大雨で至る所の山を崩し、民家を押し流し、幾つもの堰き止め湖を作り、川下の平野は水浸しになり死傷者を出した。それから引き続き台風十五号が起こり、これもまた遅い速度で沖縄南東を南下し、円を描いて北上、一週間以上も掛かって、日本列島を北海道に抜けるという状態を演じた。

この台風も大型で、九州から愛知県まで、各所で大水害を起こし、岐阜県から名古屋まで一なめしに大洪水となり、三十万人以上の避難指示が出され、死者、行方不明者、多くの家が浸水した。こういう現場の放送を見ながら、今晚から明朝にかけて東北地方を縦断するぞと言われると、今まで見てきた残酷な仕打ちを、今度は俺たちも受けなければならぬのか。たわなに実った黄金の稲も、惨めに潰されてしまうのかと思う気持ちは、なんとも悲しい。

大豪雨に打たれるより辛い。そんな時間がテレビを見ながら何時間も続くのだから、辛さが倍化する。

台風様、なんとかこのあたりはコッソリ静かに行ってくれと願う気持ちもしきりだ。

宇宙ステーションも作る人間だ。そのうち台風もコントロールできるよな。なんて空頼みもしたくなる。

台風が通過する二十一日の夜は、ほんとに誰にも知られぬように静かに通って行った。後の嵐も忘れたように穏やかだった。

鬼昔のような前兆は全くなく、平穏な二十二日を迎えることができ、これでいいのかと、神様に感謝したい気持ちだ。台風の神様よ、何処にでも、こうゆう優しさを与えてくれ。

腰痛

九月二二日、朝からいつも腰が痛いと思っていた。午前中はばあさんも医者に行つて一人となり、パソコンでエッセイを書いたりしていたが次第に腰が苦しくなつて、ついに自分で医者に電話した。五時頃連絡したが、七時半過ぎになると言う。

仙台からふき子が来た。かほりもくるつもりだったが、かほりは体調が悪くてふき子だけ来た。文生も早く帰つて夕食を早く食べているところに医者 came。腰の痛い所に注射してくれた。明日も来るといったが、翌日は彼岸の中日で休み日、少しよかつたので医者は断つた。一日座敷に布団を敷いて寝転んでテレビ見て過ごした。腰の痛みは黙つていれば痛くないが、歩くと左足が痛い。そんなわけで久しぶりに娘が来ても、寝たり起きたりで夕食のご馳走もいつもよりうまくなかった。

夕方のテレビで相撲を見た。横綱白鵬は昨日関脇稀世の里に破れ、さらに今日は関脇琴奨菊に敗れるという大ハプニングが起こり、二日後の千秋楽がどうなるか判ら

なくなり面白くなつて来た。

二四日はまだ歩くと腰が痛いので、九時過ぎふき子の車ではあさんも一緒に沢内診療所に連れていってもらい、治療を受けた。点滴と注射、そのほか胸のレントゲンと心電図などもやり十一時半まで掛かった。帰途、丑の湯に入つて帰る。また少し楽になった。

昼飯を食べて少ししたら、早恵子が横手よりブドウを買ってきたので、それを貰つてふき子は帰つた。ドサクサのうち三日過ぎた。俺が清水苑に行くまで三日あるが、そのうちにこの腰が良くなるか。

翌日二十五日は日曜日で腰の痛みがよくなかつたため、座敷に布団を敷いて休んだ。午後、白木野のタコ姉さんが来て雑談をした。タコ姉さんも八十五歳だが元気だ。この頃同じ事を何回も話をすると聞いていたが、今日はそうでもなく、野球放送を見て選手の名前もちゃんと知っていた。夕方は大相撲千秋楽を見た。

関脇の琴奨菊と横綱白鵬が二敗で並んでいたの、この二人の決勝になるのか思っていたが、結び前の柁瑠都との対戦で琴奨菊が破れ、結びの相撲で白鵬が日馬富士に勝つて白鵬の優勝となった。期待した白鵬と琴奨菊の

夜になったが腰痛はまだ良くならず、明日に持ち越すことになった。この度の腰痛は全くその理由については覚えがない。何も無理したわけでも、転んだわけでもない。特別気候の変動もないのにあちこちが痛くなること、これからだんだん多くなるのかなあと思った。これも年を取れば仕方のないことなのか。今の俺はなにもしないで、健康の事には注意しているつもりだ。自己防衛は万全ではなくても気を使っているつもりだ。でもお医者さんの治療をしてもらえば、次第に良くなるから、幸せのうちだろう。医者の治療を受けても治らなくなれば大変だから。

この度の腰痛で老化と病気についていろいろ考えさせられました。

一一九 一三三

大相撲の期待と結果

大相撲は昔から国技としてスポーツのうちでも特に神聖なもので、八百長など思いも寄らず、親しみ、期待して見てきた。

しかし、残念なことだが現実には裏で金を流し、神聖な相撲を汚すという前代視門の事件が発覚した。

何のスポーツでもこのような誤魔化しは許されないが、特に国技の大相撲の真剣勝負を汚すなど、絶対に許さるべきではない。

この前代未聞の相撲界の汚点を取り除く為の相撲協会への努力は、一年以上も掛かった。関係した力士の反省と告白の徹底調査を行い、関係した者の退職などの処分や、場所の閉鎖を含み、技能検査相撲などファンの了解を得るまで協会一丸となり相撲界の汚れ一掃に全力を挙げて、やや国民の理解が得られた。相撲協会の役員達も克つてない苦悩に直面し、国民の理解を得る為に本気で汗を流したことも判った。

汚れた相撲界が元に戻るということは大変な努力が

131 要るものと実感したことでもあった。

さて九月場所は、大関日馬富士が先場所で横綱白鵬を倒して優勝したので、今度は横綱昇進を目指して火花を散らす激闘を期待した。また、関脇琴奨菊も先場所で横綱を倒したので、日本人の新大関誕生を期待した場所でもあった。日馬富士は大敗して、琴欧州、把瑠都の大関陣が振るわず、相撲を寂しくしていることに残念な気持ちには否めない。

日本人力士が横綱、大関から姿を消してしまい、日本の国技にしては寂しいどころではない。なんとしても一日も早く陣容を整えて欲しいと念願している。

このような状態での場所で、期待したのは関脇琴奨菊と、稀世の里の二人が十日まで二敗を守って奮闘したことだ。大関陣はみな三敗以上で優勝戦参加は見込みがないとされた。大相撲本場所の壁に優勝額が何枚か掲げられているが、その中に一枚だけ数年前に優勝した栃東関の額がある。しかしそれが間もなく外されて、日本人の額が全くなくなってしまおうという寂しい事態が控えている。

千秋楽を迎えて十三日に琴奨菊は白鵬を破って十二

勝と白鵬と並び、星一つ差で関脇稀世の里が控えるという場面だ。琴奨菊の優勝はあっても可笑しくない。いや大変期待される場面となった。ところが結び前の取り組みで琴奨菊が大関把瑠都に不覚の一敗を喫して三敗となり、白鵬は日馬富士に勝って、二敗を守り優勝となった。フアンのイメージは両方勝ち進んで、優勝決定戦で琴奨菊の優勝が見られることを期待したが、それはならなかった。

しかし琴奨菊の大関昇進は確実となり、尚、今回は関脇稀世の里も今回横綱を破り十三勝の活躍をしたから、来場所も順調であれば大関になると期待が広がる。日本人にとって暗いトンネルから抜け出せるか、来場所の良い展開を是非望みたい。

変貌した大渡り

私が大渡りに移り住んだのは昭和三十七年だった。その頃は、川「鬼ヶ瀬」に沿って県道が砂利道幅五メートルの道路一本、下の家から少し下がって、県道から上の家まで細い通路が一本だけ。家の数は、上の家、中の家、下の家、県道少し西へ上って石三の家、それから五百メートル西へ離れて善次郎の家があり、東の方に、下の家の分家政次郎家ができて全部で六軒だった。田圃はあちこち合わせて二ヘクタールくらいだったろう。善次郎家を除いてみんな上の家の分家と称していた、

大渡り野といって草が生い茂っていた寂しい所で、夜一人歩くのは嫌な所とところだった。

細内橋は今より北側の低い所にあつて、橋を渡れば大渡り部落となり、私はこの橋から七百メートルくらい川尻よりの善次郎さん家と県道を挟んで後ろに住居を構えた。県道から五十メートル西北である。

この頃はまだ県道とか、平和街道とかと呼んでいて、馬車がやつとすれ違うくらいの砂利道だった。

三十五年に大台野の勘次郎さんから山と原野四ヘクタールを六十万円で買う契約をして三十六年。二十坪の牛舎と二ヘクタールの牧野を改良して、九月九日農業委員会を主体に数十人が集まり、小田島酪農園誕生会を開いた。主催してくれたのは、当時の農協職員後藤英夫さんでした。そして翌三十七年四月（一九六二年）一家が此処に移住した。私たち夫婦と子供四人、父、母、祖母と九人だった。

この頃、都市では道路が改良されて曲がりもなく、広く便利になっていた。私はこの原野を買って牧場を作るつもりだったが、家の前の県道が鉄道と並んで沢入り方面小繋沢に変更されると大変不便になると思った。しかし、それを心配したが昭和三十年台には国道一級線となり、岩手県中部の秋田に通ずる重要路線となった。昭和五十七年には大台野の定雄さんの家と平行に、立派な広い橋が架かった。それは昭和三十七年だった。そして数年後に十メートル幅の頑丈な道路が北上まで出来た。

私が入植した頃のここの土地はほんとに地味が悪く、酸性が強くて、ハナシモギという強酸性地に生える短い

芝が、ところどころに密生していた。からまつを植えていたが、赤蟻が一杯付いていて一メートル以上は伸びなかつた。

周囲には細内参五郎さんの土地が約二反歩程、県道に沿つて細くあつたし、大台野の横井さんの田圃が六畝程県道に並んであり、また卯之松さん側にも横井さんの約二反歩程の田圃があつた。これらを纏めないと、いい環境にならず、しかしすぐみんな買い受けられる条件ではなく、順序に手に入れた。すぐ西隣に川尻の高橋清四郎さんの土地が六反歩程あつて、これも十年後に買い入れて草地にした。なお県道に繋がる少し急傾斜の山が、清四郎さんの原野を背負うようにして細内厚さんの土地があり、これも数年後大台野の畑と交換して牧野造成をした。このように周囲の用地を買い入れる為は何十年もかかつた。

その頃はまだ善次郎さんの西側には五ヘクタールくらいの原野や少しの田圃と畑もあり、数人の人が耕していた。私が入植して数年後に細内の定雄さんが、大台野の勘次郎さんが北上に移住する機会に、勘次郎さんの財産を買い受け、更に善次郎さんの西側五ヘクタールも買

受けて、ひとなめしの大田圃を作り、一躍大渡り農業ムラに変身した。定雄さんの壮大な計画は苦労もあつたであろうが、数年で完成した。これも偉大な人物の仕事だつたと今でも思う。

三十七年、私たちが移住して間もなく上の家の幸助さんの姉トスさんたちが分家して幸助さんの東方に家を建てた。トスさん一家は子供三人くらいの五人だつた。急に私たちと二戸増えて八軒の農村になつた。

私は原野の開拓三ヘクタールを機械開発し、次第にトラクターや付属機械を備え、牛も増やした。昭和五十年頃までには大渡り北東部にある通称下の平「しものた い」と言う湿地、灌木地帯も農地改革で大渡り住民に解放され、約十ヘクタールの草地が造成された。

こうして私が移住してから、国策として米や畜産物の増産が奨励され、十五年後は湯田町最大の酪農地となり、定雄さんの田圃を含め、大幅に農産物生産地に躍進した。まあ、運よく時勢の波に乗つて、昔のような手労働で難儀する事もなく、近代的農村が作られた。

ここで私が子供の頃見て来た大渡り部落の姿を思い描いて見ると、上の家、当主幸一さん（現、幸助の父）

は一番大きい家で本家と呼ばれ田圃も多かった。みんな我が家のように出入りしているのだった。農仕事も春から秋まで、田植えから稲刈りまで遅くまでかかり、分家がみんな助けても足りず、他の部落からの援助もあつてやつと雪の降る前に稲刈りを終えると言う具合だった。

幸一さんは馬車曳きが専業で、朝から晩遅くまで馬車仕事で田圃の仕事はしないようだった。石三さんは新町辺りから来て加藤を名乗っていたが、上の家の分家といわれていた。下の家の旦那善六さんも馬車曳きをしていた。この頃は湯田村は至る所で木炭や結束薪が生産されていて、仲買人もあちこちにいて、山で切った薪などを女子供の背中で道路まで運び、そこから馬車に積んで川尻駅構内に運ぶものだった。だから馬車曳きの仕事もあつたもんだつた。

石三さんの息子は二人居て、兄の岩夫さんには奥さんが居たし、弟の義男さんは目の病気でメチャメチャしているものだった。尺八の音が聞こえる時もあり、風流さもあつたもんだ。尺八は下の家の長男正さんも吹いているときもあつた。また正さんは早くから、坐骨神経痛という病気で腰が悪く歩けなかったが、頭の賢い人で、い

つも明るくユーモアのある楽しい人だった。手先も器用で、仏壇の装飾品なども上手に作るものだった。弟の政次郎さんも愉快な人で、小繋沢青年会の演芸会などではこの兄弟が歌をやり、喜劇も面白おかしく演じて有名な役者だった。それから加藤さんの向かい側で少し西の方におつぎ婆さんという人がクニという私と同じ年頃の孫娘と暮らしていたが、いつの間にか何処かへ行ってしまった。どうなったか、幸助さんの話だとクニは達者でいるらしいと聞いたことがある。

昔は本家のカバタの家の後ろから細い山道があつて、何の乗り物もない時代だから出きるだけ楽に、近く歩ける所は次第に道になり、子供の頃から母に連れられてこの山を越えて大渡りに通つたものだった。距離は二キロ以内だった。昔はこの家でも楽しみの一つとしてドロクを飲んで疲れを癒したもので、そのドロクの原料となるモトコをみんなに頼まれて我が家でこしらえていた。大渡りは勿論小繋沢だつて、どこの家にも運こんで歩いたからみんな知っている。だからいまでも目をつぶって思いを巡らせば、当時の一軒一軒の人たちの顔が見えてくる。

五十年前にさかのぼって大渡りを描いてみたが、日本列島至る所が戦争で破壊され、崩壊寸前で終戦となり、昭和二十二年から再建の槌音が響きだした。先に述べたように、この地帯は、昭和三十五年から四十年頃、捨て去られていた山や原野が開発されて、生産の息吹が蘇った。大渡り酪農が湯田町全体を刺激して畜産の発展や消費者組織の生活協同組合と連携ができ、その活動の広がりですべてに責任ある農産物の生産を確認する野菜の生産組織ができた。全生産物の生産者が人間らしい生活を求め、消費者を含めた農業政策改善運動へと発展して行った。これらの運動の成果として大きなものは酪農家の年中無休を改善するヘルパー制度が出来たことである。また乳業生産の広がり、ヨーグルトなど乳製品が多様化して、近代設備の大工場が小繋沢にできて四十人余りの雇用の場ができた事も、地域開発の最大の産物であろう。

戦後大渡りにできたものの中に「ゆだドライブイン」がある。これは昭和四十五年から五十年の間に新しくできた食堂で、一〇七号線の直ぐ傍の善蔵さん宅隣にあり、地の利もよく、川尻から巢郷温泉の中間で利用し易い場

所だ。その頃は水分通行量も多くなり、水沢競馬の開催日は夕方の帰り客が沢山此処のドライブインで食事をしていたらしい。ここの経営者は、元、本屋敷の卯根倉鉦山の職員を退職して、耳取から一キロ下流の峠山綿羊牧場の中でジנגスカン食堂をやったことのある田中保さんという人だった。経営能力も優れて居て、多くの通行人たちが利用し、いつも満員だった。

しかしその後、平成九年に高速道秋田線が一〇七号線と平行して走るようになり、通行量は半減してしまった。また水沢競馬も、横手市にテレットラック施設ができてから水沢に通う人はなくなってしまった。このような環境の変化で沿線の施設のドライブインも開設以来三十年経たぬうちに火のきえたようになってしまった。

大渡り開発は夢にも描いた事のない、近代設備が出来て豊かさを感じた。昭和六十年を過ぎると米も牛乳も輸入化緩和により生産調整が行われ、価格低迷に入り、金融政策が厳しくなった。大型畜産農家は軒並み倒産となり、沢山の牛や施設を抱えたまま経営はストップとなった。加えてこの頃から秋田高速道路の建設が少しずつ始まり、昭和六十三から四年には大渡りの下の平付近の牧

草地はインターチェンジとなり、何の抵抗もなく大渡り酪農地帯は全滅してしまった。

米も畜産も生産調整となり、負債整理を迫られる農家は、高い道路用地の売却に走らざるを得なかった。

こうして漸く大渡りにも太陽が照り出したと思つたのも束の間、一瞬にして夢は消え去った。ただ、大渡りは高速道路により高い土地売却や、インターチェンジが出来て農家はあまり借金は残さず、曲がりなりにも車社会の小さい玄関口が出来たことは、新しい歴史となるであらう。

私の八十数年の生涯で、特に戦後は変わったが、大渡りの変わり方は大きかったし、その変わり方の中で苦しみながら生きてきた。政治や経済をコントロール出来る少数の権力者によって、世界中の何も悪い事をしない真面目な生活者が、散々に振り回される仕組みはまだまだ続くのであろうか。



金属疲労と人生疲労

頑丈な金属で巨大な機械が作られる。外観では全く損傷などは見えないのに、稼動しているうちに事故が起こるなんて夢にも感じられない。飛行機が着陸したとたんに地中にめりこんで大破したとか、列車の車軸が折れて大事故が起こったということがある。

事故原因を調査してみれば、頑丈な機械の底の部分の金属疲労を判らないでいて、その破損が原因だったということを聞くことがある。なんでも永久に使えるものはないようだ。

だから物の持つ寿命だとか、無理な加重なことがなかったかも考慮して綿密な点検をしないと、多くの人命に關わる大事故を起こしてしまう事がある。

原発のように大施設であれば尚のこと、念入りな点検や整備が必要だ。そのことが多くの教訓を与えられたことでもあった。

そしてそれは人生にも当てはまることでもある。

この間私の弟が突然亡くなった。定年後は新聞配達や、

すぐ傍のお菓子工場にも求められてアルバイトを続けていた。普段、健康で病気の心配はあまりしていなかった。

しかしこれもあまり感じていなかったが、人生疲労が密かに進んでいたのだろう。健康診断など一般的な検査は受けていたが、今になってみればもう少し健康管理に配慮していれば良かったと悔やまれる。

気づかないところで人生疲労があっても、念入りな点検をしないしていると大事を招いてしまうこともある。寿命だと諦めるだけでなく、ひとつの反省も必要なことだと思わされた。

なくなつたメカネ

ばあさんが眼鏡をなくしたと言つて探し始めて十日くらいになるう。文生も早恵子も、それぞれ忘れていそうな所を探していたが今日まで見つからない。俺はそのうち何処からか出てくるに違いないと思つて余り探し方には参加しないでいた。

ばあさんはあらゆる所を毎日心配しながら探していたが見つけれず、この頃は諦めて新しく買うより他にない、と言ひ出していた。その前には入れ歯がないと言つて、これも家中で探したが見つけれないでいたのを俺が見つけた。別に探したわけではなかったが、外へ出ようした時、履物棚の上にあった。ハハア、これがばあさんの入歯だなど思つて持つてきたら、やはりそうだった。どうしてこんな所に置いたのかちよつと気がつかない場所だった。

そんなことがあつて、間もなくこんどは眼鏡の紛失だ。俺は午後、ソファに座つてビニール袋に入つたせんべいを食べようとして手を入れたら眼鏡を掴んだ。「アッ、

これは見つけかねているばあさんの眼鏡だな」と思つて、食卓兼テーブルの上に置いた。暫くしてばあさんが外から帰つて来た。「ばあさん、俺が眼鏡をプレゼントしよう」と言つて差し出したら喜んで「何処にあったけ」と言う。「せんべい袋から出てきたよ」と言つたら「なしてせんべい袋に入ったべ」となつたが、とにかく諦めかけた眼鏡が出て来て目出度し目出度しだった。

昔から年寄りたちは、ものがなくなつたとよく言つて探したもんだつた。今もそのうち昔の出来事になつてしまふであろう。昔のまんまの年寄りの行いを、俺たちじいさんばあさんが、やらねばならないシキタリの様になつてゐる。

傍から見れば可笑しいことに違ひないが、必ずと言つてよいくらいに続くのだろう。

一一一〇一一



これからの人生設計

人生設計とはいっ頃つくるものか。今までは忙しく、やたらに生きてきたように思う。ここまで来てしまえば後は無計画でも、何の支障もなく終わる事が出きるかな。むしろこれから人生計画なんてかえって可笑しいかな。そんなことを思いながら暇をもてあましているこの頃だ。

八十七歳だから今頃人生に「さよなら」できれば丁度よいのだが、思ったようには行かぬもの。俺の親父は九十三歳、母は九十四歳、その上の祖母は九十四歳というように長生きして世を去った。だから俺もそれに習うとすればまだ七―八年間ある。今既に三年も何もしない年寄り生活に入ってしまったっている。今まではなんとかパソコンで思ったことを書いて遊んだ。まだ少しはやれそう。まだ飽きないし、目に映ることを書いてみたい。しかしそれはおそらく、何の役にもたたないであろう。もう役に立つことなどできないだろうが、せめて他人に嫌な思いをさせぬように過ごしたい。

この頃ある先輩老人の挙動を見ていると思うことがある。若いときは、他人の為にてきばきと良く尽くしてきたのに、今は人生の疲れなのか、たとえば、「帰りの準備のためにトイレに行こう」と進めても、返事をするが動かない。三回くらい進めないと立たない。あれはどうしてなのか、言葉を聞いて返事しても行動しない。動作をしなればならない神経に達しないようになるのか。高齢のせいだと思うが、人と話していて、ちゃんと返事をしてても動作に繋がらなくなる。それは疲れた人生の正体なのかな。あれでは自分をコントロール出来ないと思う。

今の俺の調子だと、後八年くらい時間がありそう。何か手足を動かして作業が出来ればいいが、それが出来ないとすれば、自分を失わない人生設計を作れないものかと悩むこの頃だ。

星になるか 風になるか

満天の空に輝く星。無限といわれる星は宇宙の果てまで数え切れない数がある。また大空を吹き渡る風は、地上の隅々まで、ある物はなんでも知り尽くしている、と言われている。

人が死んだら星になってキラキラ美しく輝き、廣大無辺の宇宙から、地上に生きている全てのものを見守っている。また風も台風ではなく、全ての生物の呼吸を助け、生育の恵みを与えてくれる尊い存在となる。と言うわけで、どちらも、人間社会よりも更に偉大な任務に就いていて、それこそ永遠に終わりのない仕事に就く、といわれる。

それだから一度死んだ人で二度と人間社会に戻ってきた者はないようです。

この世に生まれて死を迎えない人は居ない。免れない死を諦めるだけでなく、展望を持って死に至ることの為に考えられた事なのかも知れない。

どう考えても自分の思うようにならないことなのだ

が、人生の終わりを意識する時、俺は死んだらどうなるかな、なんて思うことがある。

星や風になる展望を描く人は天国に行けるかも知れない。でも今の俺は、大切なものも、慈しみ合った者とも、なんの未練もなく、瞬時に消え去って逝くものではないかと思う。そして死んだ俺には何もなくなる。もしあるとすれば、今まで触れ合った人々に働きかけた何か、その人の心の中に生き続けるのではないか。俺はそれで十分幸せだと思う。

いろいろ欲がないわけではないが、今の俺にはこんなことしか考えられない。

展望を描ける人と描けない人

此の頃新聞の慶弔欄をよく見る。知っている人が亡くなっているかどうかが気になるから、見ないでいると、遠くの人から、「あの人が死亡したと出ているが本当か」なんて聞かれることがある。

死亡年齢を見て、自分の年より若い人が亡くなると、なんとも寂しく思う。日本人の寿命が延びても、八十を越えた人はまあしょうがないかな、と思う。しかし自分の年のことや、この間亡くした弟など、自分がよく知っていて、健康な人などはまだまだ生きていて欲しいと思う。人の健康度は年齢だけでは比べられないが、年齢を聞いてまだ展望が持てる人とか、持てない人とかを判断してしまうことがある。

若い人は文句なしにいろいろな展望が描けるから幸せだ。年を取った人でも様々で、死ぬまで夢を画いて楽しい人もいる。また、もう年だからと言って、何にも興味を示さない人もいる。

知らない人であれば、八十を越えたと聞けば、もう展

望を感じない。でも俺みたいに八十五歳を越えてから、勝手な文章を三集も書き続ける奴もいる。

そんな俺でも年には勝てない。来年は諦めないものの、その先は何にも描けない。夢を描き、展望を持てる年代は幸せだ。

八十七歳となって、展望の持てる若さを羨ましく思う。でも生きている限り、今を楽しみ、感謝の念を大事にしていきたい。

婆さんの姉弟会

十月十六日。日曜日。婆さんの姉弟会は恒例で、今年
は巢郷温泉静山荘で午後六時から行うことがずっと以
前から決まっていた。この会には夫婦のほか、都合のつ
く子供たちや孫たちも集まって楽しむことにしている。
今年には仙台の民子たちも呼びかけられたといつて来た。
民子は前日来て、家に一晚泊つて翌日参加するつもりだ
ったが一日間違えて早く着いた。

婆さんの姉弟たちは現在五人いて、それぞれ離れて暮
らしているから、集まる時は必ず我が家にも寄つてくれ
る。一番末の三男さんは定年退職したが、車の運転には
自信があり、大宮から列車で盛岡まで来てレンタカーを
借り、日詰の兄、啓二さん一家を乗せて来た。二時頃顔
を出して仏さんを拝んでくれて、直ぐ会場に行った。四
時前には民子の正夫さんも来て、五時、文生の車でみ
んな一緒に静山荘に行った。

宴会や温泉に行くのと、歩かねばならぬので苦手だ。腰
が曲がってしまうと、自分も辛いし、周りの人も可哀そ

うだと思ふであらう。だからめつたに参加しない方がい
い。でも今回は特に体調が悪くない限り、自分も参加し
たいと思ひ、みんなに支えられながら喜んで参加した。

開会して一番先に私に挨拶をしてくれとのことだっ
たので「年を取ると、いいことは何も無いが、喜寿とか
米寿とか白寿とか、寿と言う目出度い言葉が付く。なぜ
年寄りに目出度い寿が付くかと考えてみると、孫とかひ
こ孫とか、めんこい、新しい命が沢山増えてくる。だか
ら目出度いと思うのだと思う。だからこれからも長生き
して、また来年もみんなと一緒に楽しみたい」と申し上
げた。

今年の参加者は、この姉弟の一番はタコ姉の八十五歳、
次は家の婆さん八十二歳、連れの私は外野だが八十七歳、
ナホさん静夫さん、啓二さんキヌ子さん娘の恵さん、三
男さん、妻美沙子さん、タコさんの息子信一さん、娘の
美智子さん、ひ孫娘三歳、我が家から文生、早恵子・娘
の民子と夫の正夫さんで、計十七人の大盛会だった。

やはり計画して行わないと、これだけの縁の者が集ま
る事はできない。年に一度くらいはいいことだ。日詰の
啓二さんも目は見えないが元気だったし、妻のキヌ子さ

んもよく尽くしてくれるから幸せだ、娘の恵さんも目が見えなくて不幸だが健康そうだった。三男さん夫婦も明るくていい人たちだ。妹のナホさんは家の妹テイ子と同じ年だから七十四歳だ。明るく余生を送り、合唱団に入っただけでいるようだ。夫の静夫さんは耳が遠くなっただが、禅画協会に入って達磨画を主に、いろいろな仏画と仏教に関する教書を沢山書いて持って来た。

もう、何十年も禅画を書き続け、国内は勿論、中国の作品展示会にも出品して沢山の賞を受賞していると話していた。日本禅画家協会から「一路」と言う雅号も頂いて、作品には一路とサインを出している。

今までも来る度に作品を頂いているが、今回は掛け軸にした。我々でさえ優れた作品だと思ふ物を沢山持って来て、貰ってくれと言われた。それぞれ欲しい物を何点かずつ戴いた。静山荘にも立派な掛け軸を寄贈した。

ナホさんと静夫さんは、耳が遠いこともあって、あまり喋らない。また、沢山の禅画を出してくれた静夫さんは、ただ好きなだけで書いているのかと思っていたが、十年以上も書き続けると、筆とか絵とかに神が宿って、無の心と言うか、仏様に通ずる尊厳さを抱いて、天才が

乗り移って来るのだと思わった。そう思っただけで見つめ直すと、一枚一枚が素晴らしく、何かを語りかけてくるように感ぜられた。

平凡なお爺さんの静夫さんだが、俺なんかには比べると独学で厳しい試練を経て、今や達人の禅画家になつていく。「現代日本禅画人集成」という三十周年記念誌に、作品応募資格者となつていくことも報道されていた。人間はなんでもその道に通ずる人は、広く社会にも通ずる人格者なのだ。姉弟会という縁に恵まれて、今年も楽しく、新たな感じも頂いて嬉しい事でした。

婆さんの怪我

十月十八日。十時頃義妹のナホと静夫さんが白木野の姉タコさんの家へ行くという。十二時近くにばあさんは白木野の数ヶ月前に亡くなった要道さんの仏様をお参りに行きたいと言って出かけた。要道さんは親類でもあり、子供の頃は近くに住んでいて、よく知っている仲だった。文生が葬式に行き、自分が直接礼拝していなかった。文生が、なんとなく気掛りでいたらしい。約二キロほどあるので「余り歩いてもないので転んではならないから、俺の手押し車を押して行った方がいいよ」と言ったが、それほどではない、と言って出かけた。

俺は一人になり、この頃のことを思い出しながら、エッセイを書いた。エッセイなんて言うより日記だ。あつた事をそのまま文字にするだけだから。こんなものパソコンで打っておくほど値打ちのあるものではないが、退屈しのぎに遊んでいただけだ。

午後三時頃電話が鳴り出した。俺は耳が遠いから普通は滅多に出ない。遠くからばあさんが急いで来て受話器

を取っていたが、今日は俺一人だから仕方なく受話器を取った。タコ姉さんからだった。いきなり「フサなたにしてる」と言うがなんのことが判らずにいると「来る途中に何回も転んで、面に傷ついて、文生来て医者さ連れでったはずだども、戻って来たがど思つてよ」と言う。驚いて文生の携帯に電話して聞いたら、「沢内共立診療所に連れて行ったが、大した怪我ではなく、そのうち手当てが終わったら向かえに行くつもりでいる」、とのこと。動けないような怪我ではないようで安心した。

それから暫くしてばあさんが帰つて来た。額に包帯して、左目のあたりは黒くにじんでいたが普通に歩いた。経緯を聞くと、連続して何回もつまずいて転んだ。そして額の同じ所が地面にぶつかって血が出てくるのが判った、と言うことだ。脳の指令が足の動きに伝わらないようで、脳梗塞のように何がなんだか判らない状態ではないようだ。軽い脳梗塞の類なのかも知れない。

共立医院では頭の内部を検査する為、沢内病院に運んでCTを撮って調べたそうだ。異常がないようで、大事には至っていない。

いずれ、今後歩く事だけでなくいろいろな面で要注意

だ、と心配される。ばあさんは八十二歳。これからもう俺と同じ高齢者だという認識をしないといけないと思われる。

俺は年上だから先に逝くとは限らないという事が、じわりと近づいて来たようだ。

しかしそうであっても、悲観している訳にはいかない。お互いに、生きる力を支え合って、出来るだけいい生き方に勤めなければと思った次第だ。

一一 一〇 一九

秋晴れ

昨日も晴天で、清水苑のドライブに行った。紅葉の美しい天然の美術館をタダで見られて有難いと感じた。今日もまた、抜ける様な澄み切った秋晴れで、なんとも言われない快活さを感じた。

婆さんは転んで額を痛め目のあたりが黒くにじみ、ちよつと良くない顔だが、少しずつ良くなり、ささげマメの天ぷらを作って、二人でお茶を飲んだ。ばあさんの怪我が大事に至らなくて本当に良かったと話し合う。

年を取ると何事も、良いと感じれば有難い。若い時とは違う有難さを感じる。晴天も、怪我が軽く済んだことも、長い人生で経験してきた楽しかったことも、辛かった事も、人々の支えや、自然の恵みを受けた事も、偽物でない感謝の念を感じた今日の秋晴れでした。

一一 一〇 二〇

風邪と雑感

清水苑の休みになった日から風邪を引いたようだ。熱もなく頭も痛くないが、鼻水が休みなく出て、クシヤミも連発し、喉も少し痛い。苦しくて困る程でもないが、鼻水が出て仕様がなないので、布団を敷いて寝ていた。トイレに行こうとすると足がふらふらする。腰を曲げて背中に手を負って歩きながら、ばあさんに「俺も年寄りみたいになったべえ」と言うと、「年寄りみたいになあ、アハハ」と応えた。

年寄りには熱や頭痛がなくても体調が変わったら気をつけないと肺炎など併発して大事に至ることもある。ばあさんも最近道路で転んで顔に傷を負い、内出血で顔が黒くなり、来客があつても出られないと言つてベッドに臥せつている。この事故も年寄りだから、ひよつとすると脳震盪なんかで命を落とすことだってある。運が良かったと思わねば。

寝ていなければならぬほど酷くはないので、布団に横になって本を読もうとすると、字が小さくて目が疲れ

る。片肘も直ぐに苦しくなるなど、何もかも老化を感じずる。

テレビに出てきた日野原重明さんという、百歳で尚現役医者として活躍している人を見て感動した。日野原さんは「時間は誰にでも自由に使える平等なものであり、生きている限り無駄なく、良く使うべきである。その為に生きていることが必要だ」と言っていた。末期症状のがん患者に対しても、優しく手を握り、心を込めてまだ諦めず生きましようと呼ましの言葉を掛けていた。日野原さんの心が通じてか、何日か、何ヶ月か生き延びることがあるようだ。

自分の妻静子さんは九十五歳で、既に言葉を出せなくなり、感情も余り通じないようだが、帰宅すれば必ず手を握り話かけていた。

医者と患者は心を通わす会話が七割くらい病気を治すと言われているが、本当かも知れないと思つた。

数日前、湯川温泉で旅館の主人が朝早く風呂場で倒れ、救急車で運ばれたが死亡したという事があった。まだ七十七歳で連日元気で働いていたという。こういうことは時々ある事だ。去年一週間くらいの間に元気でいた同年

輩の清治さんの死など、それぞれ死因があつて亡くなつたであろうが、事前に予知することができれば、本人も家族もどんなにか救われたか知れない。

普段の健康管理や健康診断で、少しでも多く救われることを願いたい。

いつまでもありたい人生だが、終わりのない人生もないよう、精一杯働ける時は、何を食べても美味しかったが、この頃は働けなくなり、何を食べても若いときのように美味しくはない。食べ物も旬を過ぎれば美味しくない。年寄りも旬を過ぎたのだから元気が出ないのも、美味しく感じる感触も老化したのだろう。何事も旬に従つて過ごしことが大切でしょう。

一一 一〇 一二

宅急便と夕暮れ

また日記を書こう。今日、八月二十七日は朝から晴れて温かだ。風邪も大分良くなった様だ。パソコンで何か書いてみたいと思ひ向かった。

ばあさんのこの頃の怪我は、内出血が目あたりからだんだん下がり、顔一面にどす黒く、見栄えが悪くなつた。顔は黒くなつただけで痛みはないようだが、家の中でも、外へ出ても、歩行が不安定で歩くのが怖いと言う。頭は痛くないらしいが、脳内の故障かもしれないので心配だ。

それでも婆さんは、畑や花壇のあとが心配で、外へ出て枯れた花の刈り取り処理などを行う。誰もしないから、自分でやるより他ないと思つてやっているようだ。そのうち来客が来て休む事になる。

宅急便が届いた。仙台の娘民子からだ。早速開けてみると、いろいろなものが入っていた。冬を迎えたこちらの事情を考えて温かなチョッキが二枚、孫のハナ子の手編みの帽子は私のためのもので、早速被ってみる。頭が

すつぽり入り、頬つぺたも包むようになって温かい。それと可愛い小さい、毛糸で編んだ熊さんも入っていた。この間娘が来た時拾って行った栗の実もおいしく煮て瓶詰めにしたのもあった。仙台名物の牛タンもあった。牛タンはこの間民子を買って来たものが大変美味しかったので、美味しさをもう一度、と言うつもりで送ってくれたろう。

娘や孫たちからの贈り物は嬉しい。年のせいもあるろう。三時過ぎに散歩に出かけた。この頃の散歩は遠くには行かない。家の前の側道を上から下へ往復する。これでは二キロくらい歩ける。もっとも此の頃は体力も衰えて、時々休みながら押し車にラジオを聞きながらだ。道路だから車が通ると聞こえなくなる。

そんなことで、少しだけ体を動かして、動かしたぞおと自分に言い聞かせた。四時になると家に入ってストーブを焚いてばあさんとお茶を飲みながら雑談をするが、秋の夕方は寂しい感じがする。

寒いからストーブを抱くようにして、暗くなっても中々帰らない息子や嫁を待つのは寂しい。この頃はばあさんもマカナイに手を出すのも億劫になったようだが、

あまり遅いと、なにか一品くらい作らないと心苦しいよ
うで悩む。年を取っても女はこんな気苦労がある、
テレビを見ながら、若い人たちの帰りの遅いのを気に
かけ、わびしく時を過ぎすじいさんとばあさんの夕方
でした。



時期外れ

十月二十九日から十一月一日まで四日間、風邪のせいで鼻水が出て、咳きや喉の痛みも少しあり呼吸が苦しい日が続いた。二十九日は朝飯もそこそこに寢床にもぐって寝た。息苦しいのは続いた。次の日は白木野のタコ姉さんが息子に送られて遊びに来た。家のばあさんが顔に怪我をしているのを心配して、見舞いをおかねて夕方まで話して行った。タコ姉は八十五歳だが極めて元気だ。歌の歌詞や曲は何時も何曲か暗記している。宴会ではいつも歌いたいが、誰も歌わない。歌えとも言わないので歌わないでしまつて残念だ、と言っていた。またプロ野球の選手のことや勝率なども知っていて、若者に負けない常識を持っている。腰も曲がらないし、心の若さも持つていて素晴らしい。日常一人で居るが、時々平九郎さんの婆さんトミさんとは同級生で遊びに行くらしい。十分歩ける足を持つているから幸せだ。十年以上も前に路上で倒れたが、通行人に助けられて以来、心臓にペースメーカーを入れてあるが、この頃は益々元気で羨ましい。

俺はこの日一日体調が優れなく、タコ姉が帰ってからまた寢床に戻って寝た。寝ていると何も出来ない自分が詰まらなくなる。活動ができなくなるというのは実に無意味だと思う。神経は大体健康だ。八十八歳はそれ程年寄りではない時代に入ったようだし、まだ未来があると思うんだが、俺は心の割合より体調がよくない。腰が曲がって立っている事も、歩く事もとても苦しい。その上肺や心臓も弱くなってきた。この状態は心の健康度と比べると非常に悪い。だから常に体を労わらないと、心不全とか肺炎とかが入り込んでくるようだ。

三十一日、月曜日は息子が定休日なので共立沢内診療所に連れて行ってもらった。風邪らしいので、その手当てをしてもらってすぐ帰り、途中丑の湯に入って来よう、くらいのつもりで行った。しかし、医師は重く診て、採血して調べ、点滴二百ccをやつてさらに五百ccを続けた。なんと三時間半も掛かり、午後二時ころやっと帰路に着いた。文生に仕事の電話が入り、それから一時間もかかり、帰ったら三時になった。

点滴の三時間半は退屈でいろいろ考えた。現在の八十人は年寄りではないとは言っても、俺の体は大分老化し

ている。新聞の死亡蘭に出ても、誰も早死にとは思わないでしょう。それに今まで生きてしまった事も、長生きの超過ではないか。人間は惜しいと言われる内に散った方が幸せだろう。俺は時期外れになってしまったなあ。近いうちに逝きそうもないし、とんだ社会の荷物になるんだなあ、と本気で思った。

でも心がこれだけ健康であれば、いろいろ工夫して自分をいじめない、何かがありそうだ。人の役に立たなくても、自分の気休めくらいは見つけ出さなくては、とも思った次第である。

一一 一一 三

李下（リカ）に冠を正さず

清水苑で、新聞に出ていたクイズの中に、「〇〇に冠を正さず」（李下はスモモの木の下のこと）という問いがあった。さてこれはなんのことだろう、何か諺か格言の事だろうとは思ったが、言葉の切れはじめ思い出せない。ところが隣の席にいた佐藤清左衛門さんは聞いたことがあると言った。また大野の照井清到さんも聞いたことがあると言った。

しかしその意味については判らないと応えた。今私がパソコンでその言葉通りに入力すると、ちゃんとクイズの文句通り印字された。と言う事は、今でも使われている名言であるだろう。

私は今知らないで恥ずかしいとも思わないが、先輩たちは聞いたことがあるし、それには深い意味がありそうだ。なんとか誰かに早く聞いてみたいもんだと胸を膨らませた。

一一 一一 三

十一月に入った

十一月一日を迎えて、今年も終わりに近づいた。一年が早い事をまた思う。ばあさんと二人になった八時過ぎ。

八月十八日の顔の怪我以来、内出血で目の下が黒くなり、外に出ることも来客を迎えることもできないと言つて引き籠もっているが、畑の大根や白菜の処理のことが心配でグチをこぼす。俺も風邪がぶり返すことも心配で手出助もできない。「そのうちもう少ししたら働けるだろうから、今はあまり悩まないで休もうよ」と言いながらお茶を飲んだ。前向きではない悩みは年寄りの、ごく普通の語り草だ。

二日は清水苑に行く日で出かけた。風邪がまた悪くなる事が心配で、気をつけて入浴しすぐに布団で休んだ。そしたら今日はリハビリを遣る日だからと言われてリハビリ室に行った。年とって体が疲れているから、体を揉んでもらうととても気分がいい。でも俺はこのリハビリは一ヶ月一回しか出来ない。要支援一という最低の介護度だからだ。年寄りの内の良い方だという訳だから幸

せと思わなければなるまい。

大事に過ごすといつても、午後はみんなと一緒にテレビ体操を行い、ゲームも騒ぎながら体を動かした。少し汗ばむこともあるが、むしろ適当のようだ。三時のおやつを頂いて間もなく散会で家に帰る。十五人くらいの仲間と一緒に、特別何を話すでもなく平凡に過ごして来るが、やはり何らかの変化があつて、違った人生が得られる。

帰ったらばあさんが「土志田さんが来てこれを置いて行ったよ」と言つて薄い本を見せた。土志田さんとは横浜の人だが、去年、越中畑小学校の元給食所に孫と一緒に住んでいた。同じ越中畑出身の高橋勝也さんという現在横浜在住の人と提携して、越中畑と横浜の交流活動をしている人だ。とても良い活動家だ。届けてくれた本は昨年十一月十八日、土志田さんの車で悟さんと一緒に、和賀町長沼の麗ら舎読書会に参加した時の講師として来た小野寺澄子さんの書いた本でした。開いて見るとこの人は、この日から八日後に股関節の大手術を受けたことだということが判った。

この先生は東京生まれだったが、岩手県の高校教師になり、体操指導をし、特に岩手の民謡の踊りを研究したとのことでした。大手術は、この講演の八日後に行った事は間違いないようだ。思い出だせば、体操の先生とは思えぬもの静かな人だった。水沢農高では鬼剣舞や神楽など地域から教えられ、県や中央などで発表して一躍有名となった。生徒も自信をつけ、保存会もできて、いい伝統を作った、と言う話だったと思う。

土志田さんが私の不在中に来られたのは二度目で大変残念に思った。土志田さんはまだ若い女性の活動家だが私を訪ねてくれたことは有難いと思う。年を取っても私を支えてくれる人のいる事に元気を頂いた気がする。三日は家に居て書くことも出来ず、テレビを見ても文化の目らしいことはあまりなかった。午前はサッカー、午後は剣道大会を見た。

四日。晴れ。金曜日。清水苑に行った。

この日も入浴後布団の上で休んだ。入浴のあとは呼吸が少し苦しい。休んでいればなんともなくなる。退屈しのぎに読もうと思ひ、本を三冊くらい持っていてもさっぱり読めない。新聞などは字が細かくて読むのが大変

ですぐ疲れてしまう。そのほかの本も、布団の上で横になって見ていると、これも疲れて休んでしまう。年寄りの本読みは、俺には時期が過ぎたのかもしれない。俺と同じ年の盛岡の小原四郎さんは、毎日自転車を漕いで図書館に通い、好きな本読んだり、疑問なものを解き明かすために物色したりしていると聞いて、凄く達者なもんだと感心している。今日は富雄さんが傍で枕を並べて休んだので、久しぶりによもやま話をした。富雄さんは俺より五つ年上で九十二歳だ。若い時は文才も優れていて詩や文芸作品を書いた時もあった。でも最近めつきり老け込んで物忘れも大分進んだし、昔の話でも正確ではないようだ。絶えず働いてきた気質で、今働けなくなったことを家族に済まないと思っているようだ。「もう年だから誰にも気を使わないで自分が思うように生きてもいいんだよ」と言っていてやったら、「んだべがや」と安心したように言った。仕事一筋に生きてきた人間の姿を感じた。また彼は、今でも日記は欠かさず書いていると言った。その日あったこと、感じたことを少しだが書いていると言った。それは大変いいことだ、ボケないことにもつながるし、是非続けて欲しいと励ました。俺も今は

書いているが、富雄さんのように九十二歳まで続けられるかと思う。

こんな日だったが、秋は深まって来て今日の夕方は晴れて夕焼けがとても綺麗だった。綺麗な夕焼けの中に吸い込まれるように清水苑の車に送られて我が家に帰宅した。

六日は朝早く盛岡の友人、生き残り戦友小原四郎さんから電話があつて、「同じ盛岡の戦友赤沢さんからの話もあつて、また一緒に懇談したいと思うが貴方の体調はどうですか」と言うことだった。私の体調はあまり良くないが、大切な友人との会談は断りたくないので同意して旅館と交渉して返事をするに応えた。午後湯川温泉吉野屋旅館を頼んだ。

今年六月二十一日 世寿美屋旅館で三十五回隊友会と称して懇談したが、秋の会もやろうという元気があるから、同じ年配だが俺より遙かに若さがある。

七日は月曜日。文生が定休日。水沢の妹テイ子が、盛岡のミツコ（私の妹）が岩手大病院に再び入院しているので見舞いに一緒に連れて行くことにしていた。ばあさんも行ければいいが、顔の怪我がまだ良くならないの

で文生に見舞金だけ頼んで俺もばあさんも行かなかった。早く退院できればいいと願った。

今年には北上の弟久巳も亡くなって大変寂しいと思っているのに、妹のミツコまで先に逝かれたら最悪だ。なんとか元気になって退院することを願う。

十一月に入り、今年には喪中の挨拶を出さなくてはいいから、間もなく書きはじめるにはならぬ。文生が印刷して来た。あまり書くことのない文書だ。

六日午後、悟さんが訪ねてくれた。土志田さんのことも聞いた。十月三十日、横浜からバスに乗り四十人来て、こちらから二十人くらいの合同懇親会が行われたとのこと。悟さんも参加し、とても有益な会合だったと言っていた。土志田さんは今は横浜に行っているが、それでもこうして当地と横浜の交流活動をしてくれるから有難いと思つて聞いた。

此の頃の世相は、環太平洋経済提携協定という日本の農業や医療、震災復興にも大打撃が予想される大問題で、国内の世論も二分するような状況だが、野田内閣はアメリカや大資本家の強い要望にこたえて仲間入りしようと

している。農業界は猛反対の大運動で農業新聞は連日大報道だが、普通の新聞はあまり報道しない。国会でも反対の声が多いが自民党などは本気ではないようだ。

タイ国では一ヶ月も前から大雨で大都市の工業地帯は洪水に浸されても土嚢を積む程度の対策で溢れる大水を防げない。日本企業も沢山休業して、二ヶ月以上もただ雨がやんで水の引くのを待つということのようだ。アジアの大経済大国のタイ国がこのような状態だという事に大きな疑問を感じる。

またヨーロッパではギリシャは国の負債が大きくなり、国が破産の危機に瀕している。EUがこれを救うため、負債の半分を棒引きして救うという大問題が起った。度重なる世界的な金融不安は、一つの国が自立できなくなるといふ経済金融不況が今までなかっただけに、これから地球規模の変貌が起きるのかと恐ろしい不安を感じた。

十一月一週間の出来事を書いてみたが、平凡な暮らしのことは珍しくもない事だ。俺みたいな年寄りがどう力んでも何もならぬ事だが、どこの国の人も平和に不安なく暮らせる為に、みんないい力を出して欲しいもの

と切に思う。

一一一〇



雪囲いの今昔

十一月十四日。我が家ではやっと雪囲いをした。もう十一月も半ばになった。今年は雪がやや遅い。今日は幸い天氣が良い。ばあさんが急に弱くなって、囲いはやれなくなった。此の頃毎日のように、雪が降らないうちに囲いをしないと大変だ」とぼやいていた。俺も三年くらい前まではばあさんと一緒にやったもんだが、腰が痛くてとてもダメになってしまった。

今日は文生が休みで、前から計画し、丁度良い天氣でよかった。ばあさんは監督しながら手伝いをしてやいる。今は雪囲いの材料も骨組みは製材したタルキやヌキイタ、プラスチックの波板、ビニール縄を使ってやるから、昔のように乱雑にならず跡もさっぱりする。この頃は雪囲いなどしなくてもよい建て方や、やるにしても簡単に窓にはめ込むだけで良いようにしている家が多くなってきた。だから俺たちみたいに雪囲いの心配などする人は少なくなっている。

透明なビニール板や、細くて丈夫なビニール紐を使う

から、家の中も昔みたいに暗くなることもない。快適な冬を過ごすこともできる。しかも何日も掛かるなんてこともなく、大体一日で終わる。

もう昔の家の雪囲いは、それはそれは大変な一大行事だった。茅葺屋根の家の周りは粘土壁か、板に杉皮を張った程度で、隙間だらけで風が入り込むものだから二メートル以上の萱束を並べて入り込む風を防いだものだった。

毎年秋になれば四キロも離れた奥山に行つて、何日も萱刈りをし、十束ずつ山の斜面に倒れないように立てて乾かした。途中必ず雨風に倒され、それを起こしに行つて、数日後乾いた頃を見計らい、背中で背負つて家まで、それも何日も掛かつて運んで来た。それで雪囲いをしたもんだ。

萱を刈る時分はまだ葉が青く茂っている頃で、一束の目方も大分重さがある。急傾斜の山の斜面に萱ポッチと称する立て方があり、それは斜面の下側に二把揃えて立てて、上側に一把づつ開いて立てて、上の部分を縛り、それを中心に囲むように六把重ねて立てる。そして十把一組として更にまた上の部分をなるべく強く縛る。これ

が萱ボツチで、大きな急斜面の山に数百個も立ち並んだものだ。

またこの萱を家まで運ぶのも大変で、先ず急な山からやや平らな所まで山出しと称して少しづつ背中で運んでくる。五個くらい一まとめの萱ボツチを作り、そこから今度は少し多く背負って家まで運んだ。萱の長さは二メートル以上もあり、根の方が重く先の方が軽いので、背中で重さの平均を取るのが難しく、途中で背負い直さねばならぬこともあり、萱運びは難儀なものだった。

こんな苦勞をしながら運んだ萱で囲いをするのだが、入り口とか窓は特別な仕掛けが必要で、面倒な細工をしたもんだ。これも何日か掛かった。軒下一面に隙間のないように萱を並べて横に長木を結わえつけるのに誰か助手が居るとよいが、一人でやる事が多く、梯子を何遍も上がったたり降りたりしてやるもんだから長く掛かった。そしてこの仕上げも、出来具合をあたりに評価されたりするで、出来るだけ丁寧にしないといけなかった。囲炉裏のある所が居間兼食堂で、天井に近いところに少しばかり窓から明かりを取るようになるわけだが、雪囲いをした冬の家の中はなんとも暗くなるものだった。外

から入ってくると、暫く家の中の様子がわからなかったもので、他所の家に行った時などは、誰が居たか判らぬまま帰ることもあったなあ。

今の雪囲いはほんとに苦勞が要らない。家の中も普段と変わらぬ明るさだし、とても便利だ。それもここで暮らす為に何十年も掛かって得た財産なのだ。

雪囲いの今昔について昔を偲びながら書いたが、こんな苦勞した作業など、今は想像も出来なくなってしまう。無駄な骨折り話だが、当時はこうしなければ冬は越せなかったし、こうして毎日住む家を大事に扱って来た事も忘れてならない暮らしだった。

ネツテヤシとシテケアシ

子供の頃の方言で、この二つは相手を軽蔑して悪口する言葉だった。私たちはあまり使わなかったし、今は意味も判らなくなってしまった。子供の頃に親父や年上の人に怒鳴られる時に言われたもので、最も酷い罵声だった。

ネツテヤシとは語源はどこから出かは判らないが、根っこから絶えてしまった、ということなのか、また、常識を全くわきまえていない、ということなのか、この言葉は私がまだ現役の老人クラブの会員だった頃、湯田沢内のクラブ連合会で講演会を行った時の講師、高橋繁さんが語った言葉でした。高橋さんは沢内出身の教師だったが長く他町村で勤務されており、よくネツテヤシを忘れないでいたもんだと思った。

凍み大根作りをよく覚えていなかった。雪国に生まれて凍み大根作りを知らないとはネツテヤシだったと言わうわけです。このように知っているべきことを知らないことをネツテヤシと言った訳だ。

もう一つのシテケアシも、余り程度が低くて相手にならないということ、または、酔っ払って大暴れする状態などの場合に言ったものだった。

どちらもその場の状況を説明する時、この言葉が入ると最も良く実感が伝わるものだった。

方言にはその当時の生活の影と、不思議と物事のまたはその場の様子を鮮明に伝える魔力があったものだった。そういう意味で方言は大事にしたいものです。

でも生活様式とか教育の仕方の変わり方もあって方言は少しずつなくなっていく。昔の人たちの生活の中から生まれた言葉だから便利な社会になれば変わっていくのは当たり前だろう。古い方言は昔の名残か、それとも別れたくない俺たちの未練なのか。

来たぞ 冬將軍

一月二〇日。午後二時半頃仙台から娘のふき子が一人車で来た。昨日あたりから雪が降るといふ予報があつたが、夜になるまで降らなかつたので三時半頃ふき子と一緒に湯本丑の湯に行つて入浴した。文生も早く帰つて来てみんなで夕食をした。俺の子供たちはみんなビールでもお酒でもよく飲める。俺も少しお土産のお酒を頂いたが早くに切り上げて休んだ。そのあとも楽しそうに飲みながら四人の子供たちが仲良くやっついて安心だ。

次の朝は雪が二十センチくらい降つた。文生はいよいよ車のタイヤ交換をした。ふき子は普通タイヤで来たので、明日帰るのが心配で、文生と一緒に横手まで冬タイヤを買に行つた。しかし予想したよりタイヤの値段が高くて買わないで帰つて来た。まだ根雪にはならないだろう。明日は天気が良くなることを願ひながら、二十一日はごろごろとテレビを見ながら仙台の話など聞いた。ふき子の勤めているスーパーが、お店の改造をするので三日間の休みで帰つて来たが、二十三日は勤めだか

ら二十二日には仙台に戻らねばならないという。幸いや暖気だから、多くは降らないようで落ち着いてきた。道路は除雪車や車の往来で溶けていて凍らないからあまり心配ないようだ。しかし二十一日の夜も二十センチくらい降つた。

冬の天気は一日のうちに何回も変わるから安心はできない。二十二日は気温も温かく空も晴れた。お昼を食べべから出かけた方が良く進め、その気になっていたようだが、なるべく早く帰りたい気持ちもあり、十一時半に帰つた。天気は晴れていた。ばあさんは大根など野菜を持って行けと言っていた。何事もなく無事で帰ることを願つた。出かけて間もなくまた雪が降つてきて心配したがすぐに晴れた。案ずる気持ちは天気と共に浮いたり沈んだりした。

予定通り二時半無事に着いたという電話がありホツとした。冬將軍の訪れには凱戦を祝うことはないな。

愛情と尊敬

人間は生まれて十年頃までは可愛いという愛情で育つ。それは今も昔も変わりないと思うが、私は農村の田舎で育ったから、田舎の育て方しか知らない。どこの家でも七、八人の子供が育つたものだ。母親もカテメシを食ってお産間近まで肉体労働をしても、大体満足で子が生まれ、母乳もよく出て、健やかに育つた。オモチャなんてなくて、エズコに入れられて窮屈な状態で育てられた。毎年か一年おきに生まれるものだから、家族も近所の人も目出度いとも思わず、特に大切に育てようとも思わなかったのではないだろうか。

しかし、それなりの愛情は家族にも近所にもあつたのだらう。今のように虐待死なんてことは聞いたことがない。貧しい殺風景な田舎で、新聞なんて入ってこない。世の中の情報から閉ざされた地域で、たまに来る商人から他所の話を聞くだけのあの頃は、今と違った純粹な愛があつて、人も自然も包んでいたのかもしれない。

大人に育つて、他所で働くようになれば、生まれた故

郷をみんな大事に思つたこともとてもよく感じたものでした。

私は八十数年暮らしてきて、子供の頃を思えば、閉ざされた貧乏な田舎には、かけがえのない愛が漲つていたのでと思う。そしてそれが文明という便利なものと引き換えになつてきたのだと思われる。

新しい便利な文明はこれからも、失いたくないもので押しつけて入ってくるものなのか。やはり風化という化け物に浚われてしまうものなのか。

それから、私も年寄になつて感じることは、若い人たちは年寄を尊敬してくれているということだ。他人に対して何も良いことをしてくれないのに、尊敬の意を示されると、かえつて申し訳ない気がする。子供に愛情を、年寄に尊敬を、という光景は何より温かい豊かさを頂くことでありがたい。

世の中が物に溢れて物質的に繁栄すると、心が粗雑になり、本当の温かみや、心を潤す豊かさが薄れていくといわれるが、今の私はとても幸せです。これからも偽物ではない温かさが続いてほしいと思います。

終わりにあたって

私は大正十三年一月に生まれた。大正十五年から昭和になり、昭和は六十四年で終わった。平成となり、それから二十三年暮らした。

また俺の住んでいる所は湯田村から湯田町となり、それから西和賀町となった。俺は変わらないが、年号が変わったり地名の呼び名が変わったりした。

此処は半年雪の中で暮らすが、九十年近く暮らしてみると他所と比べ、少し冷温で作物の生産は劣るけれども台風など酷い嵐は余り来ないし、道路や交通事情もよくなり、昔よりはずつと雪も少なくなつた。除雪も公共でやってくれるのでとても住み易くなつた。

この地でも雪を利用する工夫や、四季おりおりの自然の美をアピールする運動も起こりつつあることはいい事だし、もつと盛んに進めてほしいものです。

今年には東日本大震災や台風被害などで、多くの地域でかつてない困難に遭遇した。国内はもちろん、世界各国から力強い援助や温かい支援の手が差し伸べられ、ボラ

ンティアの方々から行方不明者の捜索、手の付けられないような惨状の片づけなど、実にありがたい御奉仕を頂き、再起の原動力を得た。国内外からのボランティア活動は、これからにつながる太い絆として再生の道を確かにしたことも、災害から生まれた美しい賜物でした。

このようにみんなが幸せになる方向に地球全体が動いていけばいいが、便利や儲けを追求して雇用条件が悪くなったり、地球環境が悪くなったり、アフリカのように貧困の為に沢山の子供が死んで行く状態が減つては行かない。宗教や民族紛争も後を絶たない。

日本国内でも憲法九条を変えて軍備を持たなくては平和は保たれないと唱える者もでてきた。

繁栄の影に、失つてはならない大事なものが見えなくなっているようで心配です。

私はケカツや災害、戦争を経験して、儲けのためにしるぎを削ることも、軍備をして戦争をすることも嫌いです。平和で穏やかなこの故郷の美しい風物と和やかな隣どうしの暮らしが改めて大事だと思えました。

私はこれで三集目のつたない文章を書きました。お付き合いを頂いた皆さんに有難うと申し上げます。

また、本を作るためにお手伝いを頂いた清水苑の窪田先生をはじめ、職員のみなさんに厚く御礼申し上げます。

それから今回は、さわうち協立診療所田中先生、山本看護師さんを通して盛岡の伊藤孝さんにも大変ご心配を頂きました。なお、いつものことながら、息子の文生の協力も頂いて本にしてもらいました。みなさんの温かいご協力に感謝申し上げます。

これからも健康に注意しながら、気の向いたときは好きないように書きたいと思えます。

よろしくお願いいたします。

二〇一一 一二三〇

